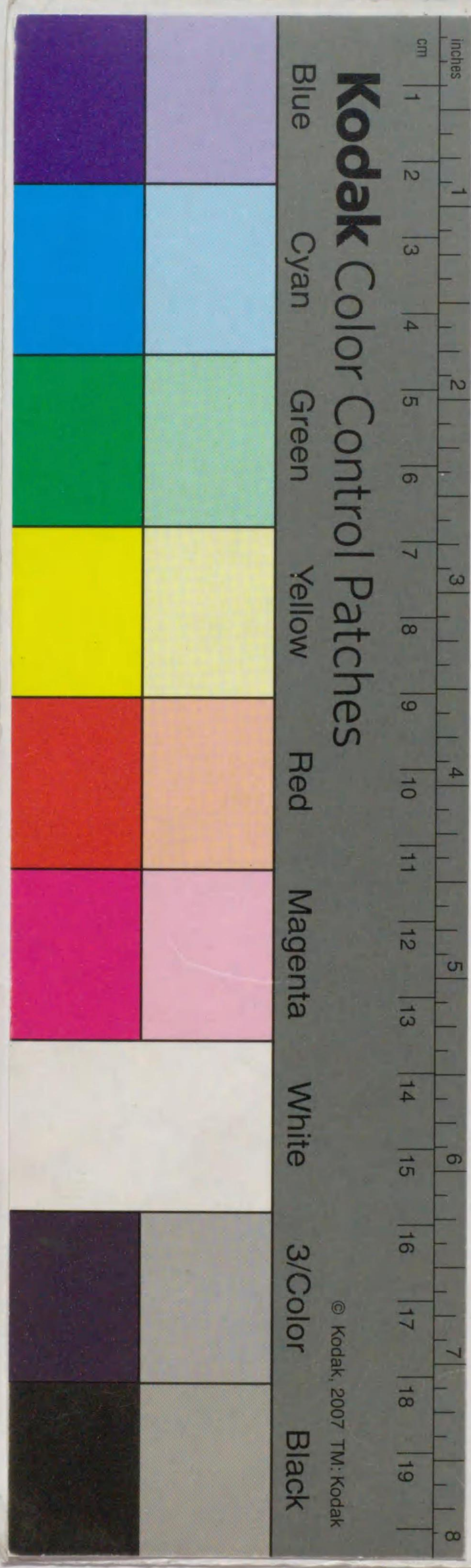
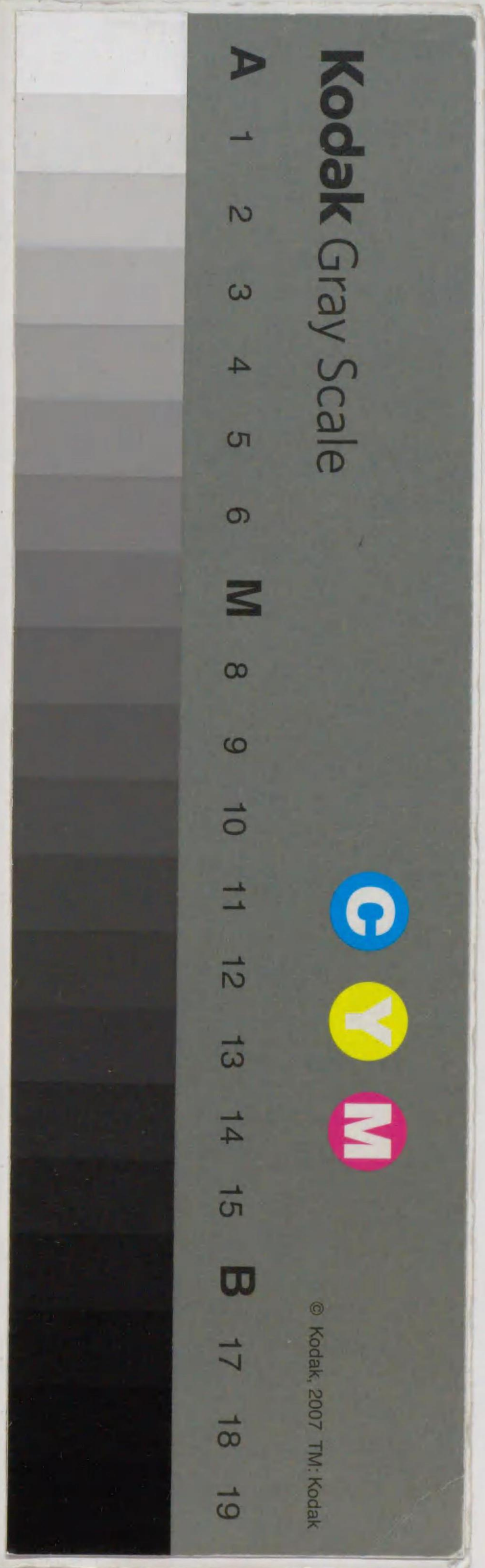
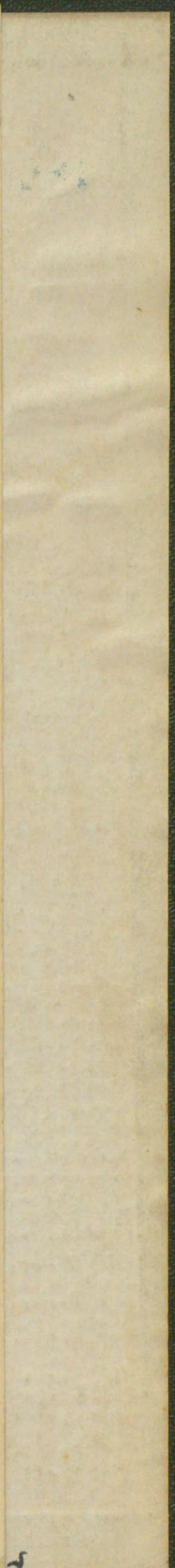
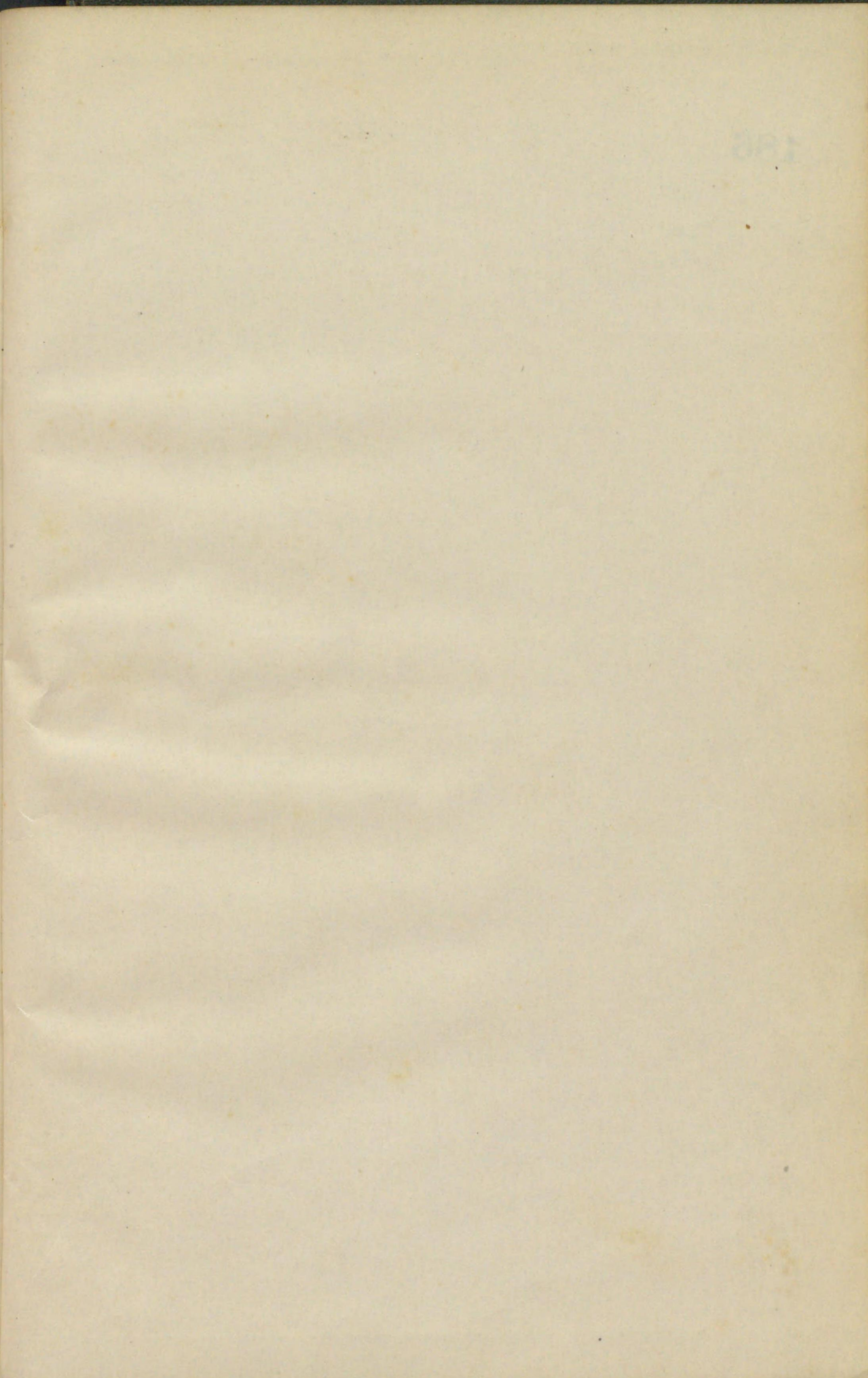
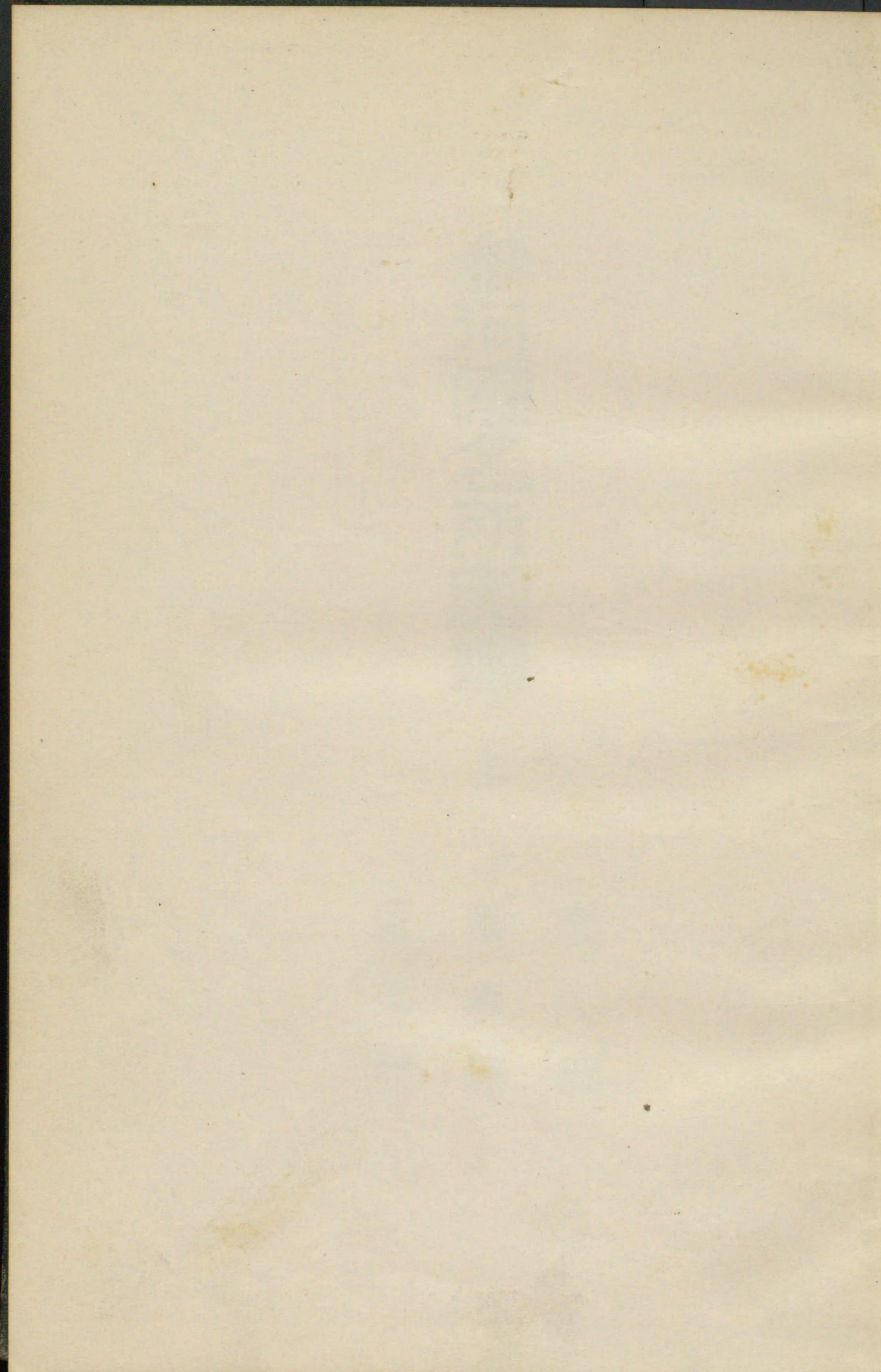


626
5

626-5
1200501539379



186





參河國名所圖繪

上

渥 寶 雜
美 飯
郡 郡 部



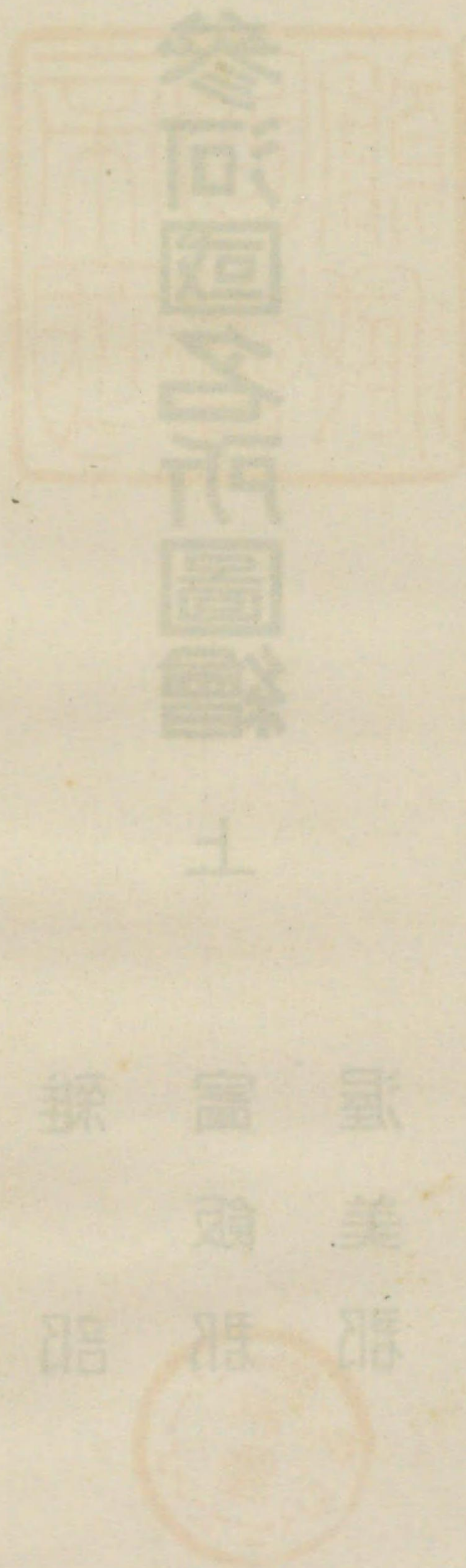
626-5.

解 題

三河國名所図繪は、三河國の名所につき、其の歴史を繪と文とで説明したものであつて、豊橋上傳馬の金物商夏目可敬が、弘化元年より嘉永四年に至る八ヶ年の歳月を費して編著し、久田登高之を補助し、羽田野敬雄之を校閲したものである。東三之部は出版のできるまでに浄書のできたものが残つて居るが、西三之部は文の原稿だけしか傳はつて居らない。可敬は此の書の編著に多大の費用と勞力とを拂つた。可敬の全財産は之がため盡せられたといふことである。

此の書の原本は只今までに知られて居る所では、次の六個所に藏せられて居る。

東三河全部十一卷（浄書繪入） 宝飯郡御津村大字廣石 渡辺隆一郎氏



右の内八卷（写本、繪入）

愛知縣 女子師範学校

碧海一卷（原稿）

北設楽郡稲橋村 古橋源六郎氏

渥美一卷、加茂二卷、碧海一卷、幡豆二卷（原稿）

碧海郡高岡村堤 村上 儀保氏

加茂二卷、岡崎一卷、碧海四卷、幡豆二卷（写本）

幡豆郡西尾町 岩 頼 文庫

岡崎一卷（写本）

北設楽郡稲橋村 古橋源六郎氏

岡崎市

岡崎市 及 古 會

凡 例

一本書東三之部は、第一卷より第八卷までは、女子師範所藏の写本を渡辺隆一郎氏所藏の原本に對照して校訂し、此の写本を原稿とし、第九卷より第十一卷までは渡辺氏所藏の原本を御津北部小学校で謄写した写本を原稿とした。挿繪は大部分原本のもの、少数写本のものに據つた。西三之部九卷は、大体古橋源六郎氏所藏の写本を写し取つて原稿としたが、内岡崎の一卷は及古會所藏の写本に據つて校訂増補した部分がある。西三之部を写し取るには稲橋小学校を煩はした。

一東三之部十一卷の原本は淨書齋のもので、文章も推敲を経て居り、繪も殆んど

全部整つて居るから、原本のまゝを上梓した。西三之部九巻の原本は、原稿であつて、繪はまだ入れてないし、文章の洗練されて居らぬところが少くない。よつて西三之部に限り、文意の通じにくい部分に若干の添削を加へ、且全部に句読点を施した。

一原本にある変体假名は読み易からしむるため、本書にはすべて普通用ひらるゝものに直した。

一原本に欄外に記してある文句を、本書は印刷の都合で本文の中に入れた。文の頭に○印を附したのは羽田野敬雄の記入である。

參河國名所圖繪

雜部

此書著述草稿の最初は予にも懇に語合ひて予が兼て三河国式内社集説 国内神名帳集説 総国風土記考 和名抄郡郷考 大神官神領考 歴代事蹟考 古歌名蹟考 見聞雑録 二葉松朱批を始め此三河にかゝれる事を集記せし草稿をも貸與へて物せさせしを其後故由有て斯く清書せし時は秘して予にも見せずまた全述を急きて急速にものしたる故に彙漏誤脱少なからずといへとも僅か八ヶ年許の程に勉強せしは其志は最も賞すべし又故有て東都の書林須原屋へ賣渡して行程もなく病死せしは誠に惜むべしさるを今度久田登高がそを買戻していかで校正してよと乞へるに志の愛しければいかでとは思へども老耄の愚性いつ事果つべしとも思はずなん後人よく校正してよ

明治十年第一月

八十翁 羽田 埜 神 敬 雄 花 押

自序

四方の海靜に治まれる御世のありがたさにむくいたてまつらむと弘化元年より本國名所圖繪をつゞらん事をおもひたちぬされと元來堂雪の才短かければことし八年の星霜を経て片なりながら漸く此巻をものしつ次て宝飯郡に草をおこして設樂八名渥美とまづ東四郡を綴りて後西碧海郡賀茂額田幡豆郡に筆を收めんとす然に本國記録に乏しからす二葉松をはしめ剛補松三河雀参河堤三河船三河水藻塩草など其餘くさくありて坂人詳に記しおけるになん そがうへ我友羽田野敬雄官社私考を始め國內神名帳集說歷代事蹟考古歌名蹟考など其外数多の書を記されぬれば自然名所圖繪は編集せしに異ならずかゝれば右等の書籍を抄出して名所圖繪なりぬこは聊おのれが才もて集録せしにあらざ偏に故人および朋友の賜物にそありつるのかに關人其心して人々の本國の事に志を竭し、功績を思ふべきことになん

嘉永四年辛 初春

夏 目 可 敬 識

○序及び凡例國号のおこりなど碧海郡に出すを順とし若東四郡より出版せは宝飯郡を以て第一とし國号のおこり宝飯郡に出すが可然見計あるべし

附言

今來古往情時世の变革を觀察するに兆民此土に生々なす事國家の活乱に隨て更に幸ありまた不幸あり今や元和を去る事二百餘年眼に戰爭の岐を見ず耳に鯨波の聲を聞かす四時唯歡樂に浴して古代の不便と且戰國の艱苦を識らす故に此に今古を學て其大概を婦女子に示さんとす先上代の事は措て論せず中古 淡路天皇の御世諸國京師に調進の人民三冬の間餓死多し如何にと云ふに當世は酒食を驚く人なれば旅行は必ず米穀を肩自ら炊て之を喰ふ故に糧盡或は病に因て殞る於此初て糶を以てこれを救はしむ其後光仁天皇の御世諸國私稻を糶爲者爵各一級を賜ひしなり其後仁明天皇の御世博士は三四國を惣て一人醫師は毎國に一人なり是等を以て其御世の不便を知るべくなん 其後醍醐天皇の御世に至りて本國纔に三禪の名見へたり所謂鳥取山綱渡津等なり猶其御代の利便ならざるを察すべし其後後鳥羽天皇の御世鎌倉將軍の時に至りて置駅漸く備はり旅行の便りを得といへども赤松樹を植へて炎暑を避くるの製に至らず猶全備の姿にはあらず且此より先保元平治の争乱起りしより世は源平鬪争の岐となりし故海内悉く擾乱して一日片時も穩かならず然るを右大將頼朝卿終に平氏を追討して國政を執と雖も父子三世にして北條氏の爲に廢亡に及ぶ尔來北條家執政して鎌倉に在職爲事すへて九代其中間承久の兵乱又弘安の外寇俱に皇國存亡の動乱なり

夫より元弘の接戦起りて諸將朝に南朝に附屬せしも暮に北朝の麾下となりて交戦須臾も止む時なし然して 兩朝和睦事成し後足利家威權を専らにし在朝爲事既に十三代如此といへとも世は猶一日の安堵に至らず即割国英傑の將士蜂の如く起り鶴の如く視て相互に其間隙を伺ひ其辺境を侵す事日夜間斷ある事なし嗚呼悲むへし此時に當りて龍城の將士糧食益て牛馬を食ひ甚たしきに及びては即戰士の屍を喰ふ左傳に所謂子を易て喰ひ骸を析て爨くの秋也於此衆民兵火の爲に燒亡爲れて他邦に潰へ飢餓のためは父子相俱に河水に投して非命の死亦少からず古語に曰治世の民は乱世の難苦を識らずと宜なるかな是等を察て中古の不便亦戰國の難洪を識るは蓋当今名所に遊覽し且旧跡を尋索して春秋を過すは實に有難しとも有難き御世に非ずや是偏に 東照神祖の御恩澤と日夜厚く謝し奉りて愈 御当家の御世萬歳を祈り申すへきにならん

嘉永四年亥正月

米華園南窓に識

可敬

禰 國 祥 康
 齋 尺 齋 風

目錄

同	同	同	同	同	八郡畧	產物	國號の起原	同	同
同	同	同	同	同	海道變革	一里塚	人物性質	同	同
同	同	同	同	同	米花を降	由機	同	同	同
同	同	同	同	同	地震	御使臣	兵庫	並松樹	本國地勢
								慶雲	
								水綿種來船	
								廣泉卒	
								牛馬を献す	

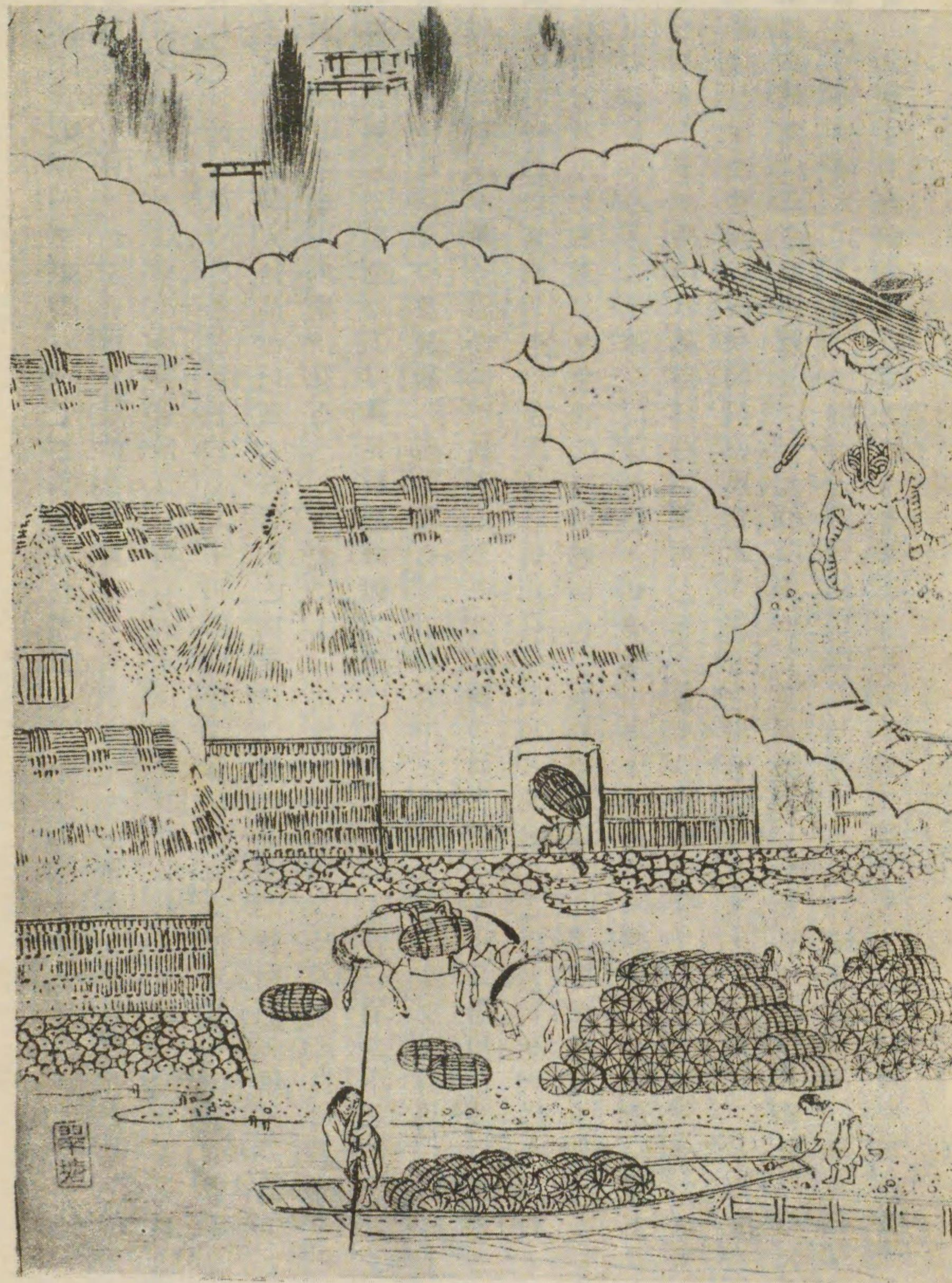
産物

米	額田郡トリス	大麥	練	糯米	粟	稗	黍	大豆	小豆	赤豆	雄豆	蜀黍	蕎麥	苳
子	人參	蘿蔔	胡麻子	筍	款冬	松露	鹿角菜	海松	疑菜	烏坂苔				
海藻根	青苔	密柑	盧橘	柑子	橙	乳柑	棗	梨	栗	楊梅	枇杷	枳椇	椎子	
葡萄	石花菜	雉脂	龍	鱧	桃	白馬	牛	筆	白糸	胡麻油	麻			
薔	雜鮮味物	紅花	紙	蘇	白絹	鹿革	荏子	荏子	黃藥	禪羅				
藻羅	窠綾	紙	櫻椒油	芋	甲	橫刀	弓	征矢	簾					
鮮	松脂	地榆	黃耆	茯苓	桑螵蛸	薯蕷	麥門冬	桃仁	升麻子					
蜀椒	栢子	白蠶	支子	等呂須岐	都婆波	多志良加	山塚	小						

國号の起源

國号の起源は本國風土記の逸文に云參河國有三河一曰男川二曰豐川三曰矢作川是也男川者河上有山神則白鬚明神是也豐川者此河上有長者民屋豐饒故曰豐川矢作川日本武東征時於此川迎多作矢給故曰矢作川と職原抄参考に見へ又國名風土記に云三河の國此國に三つの河あり一に男川二に豐川三には矢作川是なりこの三つの河に依て三河と名け云又男神とは川上に山神ありて女神男神一所には住ますた方へだたり其名より出るを男神川と云此神世俗には白鬚明神と申すとがや次に豐川は一人盛なる長者ありける此河上に住居たり人屋さかゆる事二十里なりこの民家ゆたかに栄ゆる故にその流れを豐川と云ふ又矢作川とは日本武尊東に下向し賜ひし時夷のつはものども高石山にて待かけ奉る由をきこしめしかの処にて多く矢こしらへたまひし故に其処を矢作とも河の名にもつけたまふなりと見えたり

三河國ニ葉松に云男川一名扶土川又乙川今ナリ其流岩石多くして川音高ければ音川とも云ふとぞ又云男神川とは今の大平川を云ふなるへし其故は彼三河の水源當國長の方に當りて作手保長者平村の清水より巴に巡りて流れ出るとなん往古当村に長者ありし其名を米福と云其処を長者が城とは云へりこゝに白鳥明神鎮ります又手洗所村と云ふあり彼御神の手洗なりとなん作手三十六村の産土神にして今其御社寺林村へ遷座ましけるとぞおもふに矢作川



國號起原之圖



の水上なれば日本武尊なるを白鳥明神に祭れるにや又白鬚支白鳥と訛稱しけるにやなと太
田白雪云へり かゝれは大平川を男神川と云ひけんも由縁ありけるなりされど或人亦云大
平川を三河に一加ふる事信用なし難し夫水は高景に出で北より東へ流る是を順流と云ふ
又北より西へ流る是を逆流と云ふ大平川即此逆流なり逆流を以て其一に選る事疑なきにあ
らず故に是を諸人に問ふに或人云男神川とは男神川の謂にて今池鯉鮒と今岡村の間にて東海路
を南に流る逢妻川即男神川なるへし或説にト、川元來アト川ならん大己貴命諸國を巡り賜ふ
時御足の跡として諸國にあり其足跡池鯉鮒の野にもありと云ふ菅の清公の記に足跡をト、と
訓す彼是合考ふるに池鯉鮒の西を流る、川を男神川と云ふなるへし又三河堤に云予も久しく
男神川の事を決し難く思ひしが熟考ふるに池鯉鮒の西を流る、川を男神川とする事據あり彼川
西今岡村の西にまた川あり是尾三の堺川なり此川往時妹川と云しとぞ既に今岡村の続きに
イモ川と云ふ地名あり今芋川と云ふ妹は女の通稱にて右の二流即女川男神川なるへし是譬へ
は山に妹背の名あるか如くになんかゝれは境川は女川にて池鯉鮒の西の流は疑もなく男神川
ならん又古事記傳に云男神川は今大平川と云ふ豊川は吉田川なりと云へり或説には男神川は加
茂郡より出池鯉鮒の西今岡村の東を南へ流る、川なるへし大平川にはあらじとも云へり又
諸國名義考に云彦麻呂思ふに三大川によりて三河國としも号しはうつなき物から又思へば
数を云はば唯大川を称へて御川と名つけしにてもあらんかこは試に云ふのみとあり可敬云
男神川の事は池鯉鮒の西の流といふ事其説当るか叔三河と号しことは彦麻呂の云へること

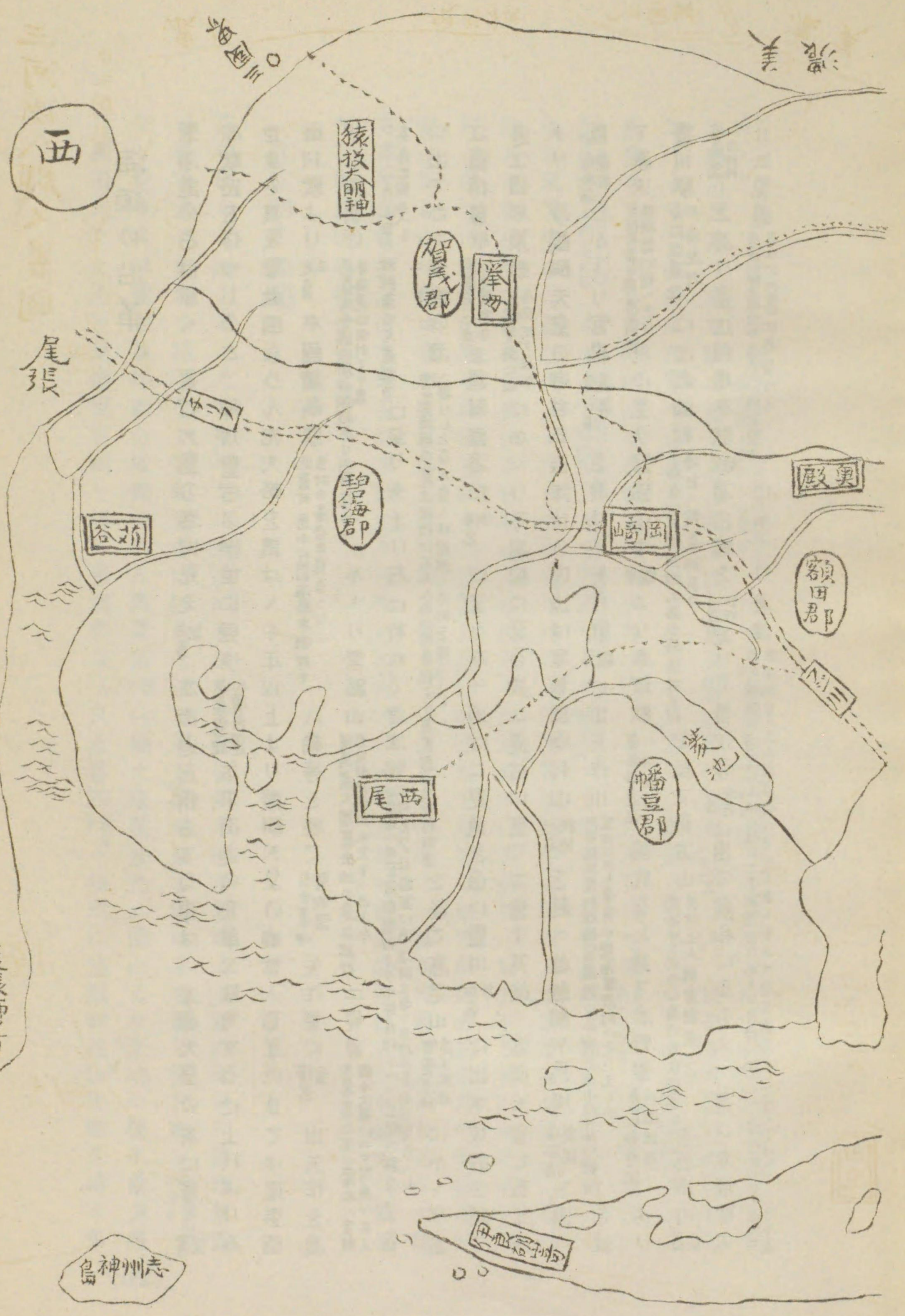
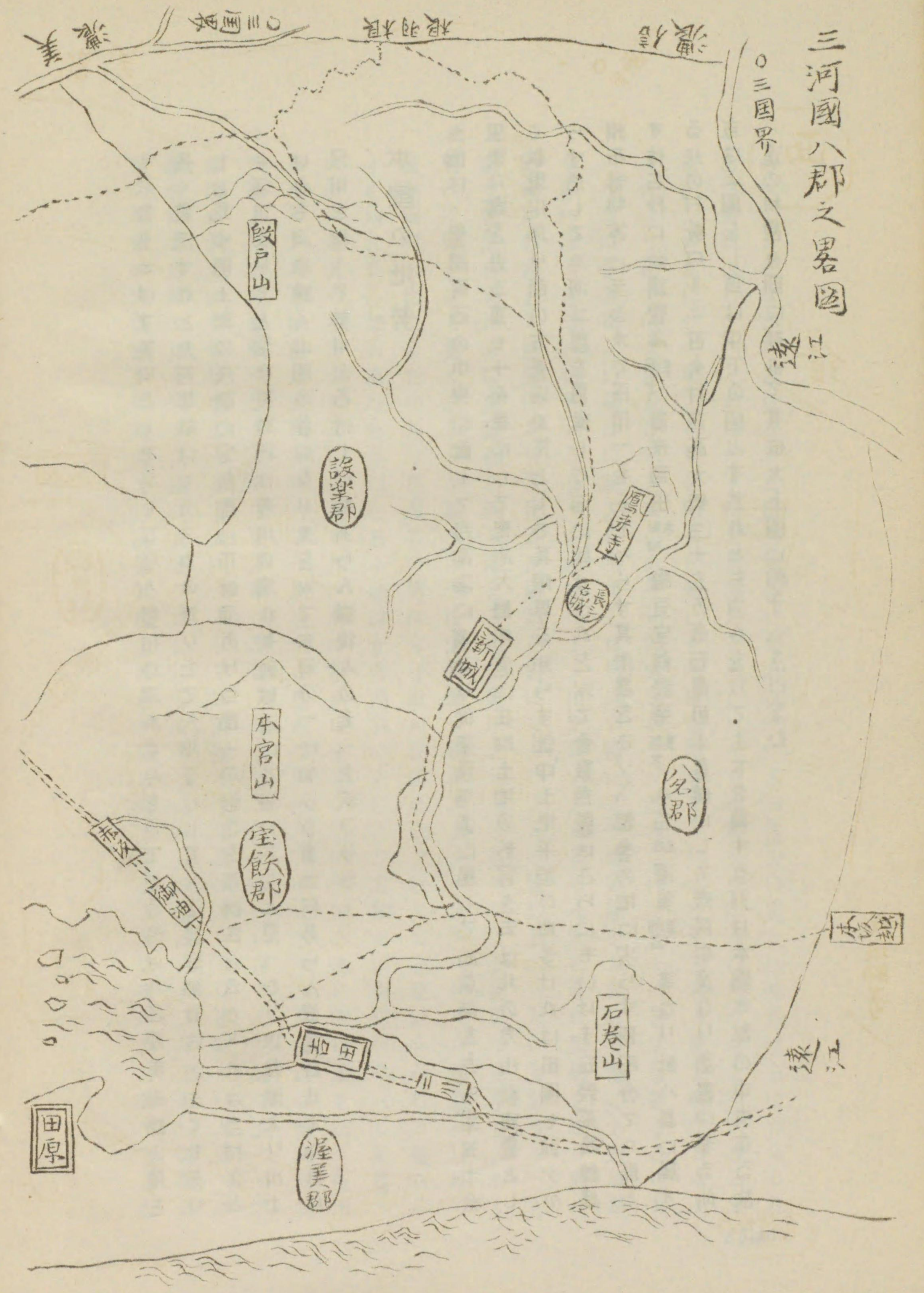
く只数を云はず美河としも号しならん豊川の流れも今を以て見る時は八名渥美兩郡の境を
長く貫流すれと九百年前はシガスカの渡りとして入海なりし其入海設樂郡新城迄までもあり
しと見ゆ風土記の殘缺に宝飯郡に市師浦あり当郡一の宮辺を市師庄と云かゝれは当村なと
も海辺なりしと見ゆ其時代は豊川の流れも新城辺にて海に入しと見へたり叔新城より川上
は今も河巾狭く山間の谷川なり夫を以て三河の一に加ふる事如何あらん彼是合せ考ふれば
只川を称へて美川と名付しにもあらん猶後人の考へを俟つのみ

本國の地勢

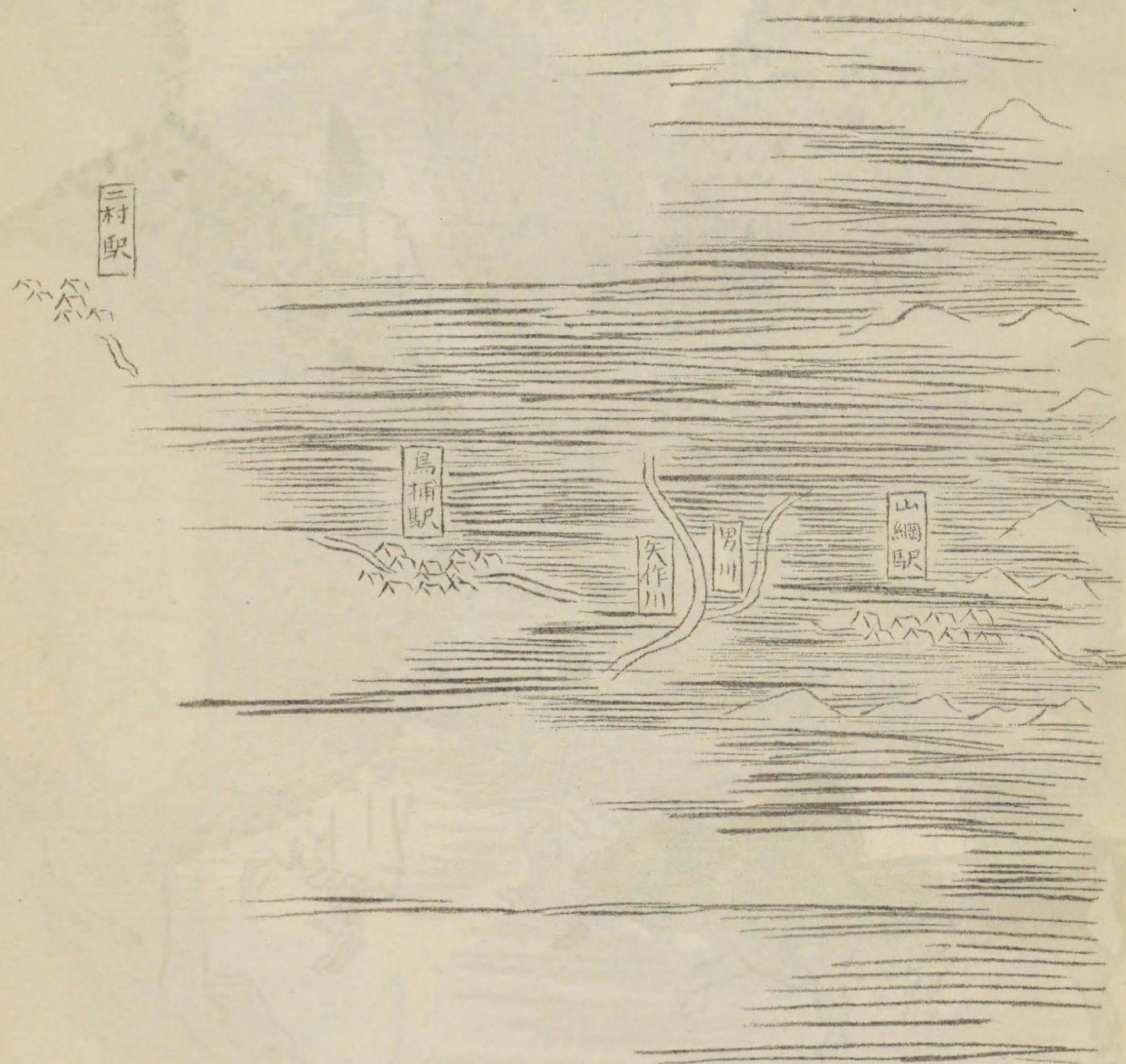
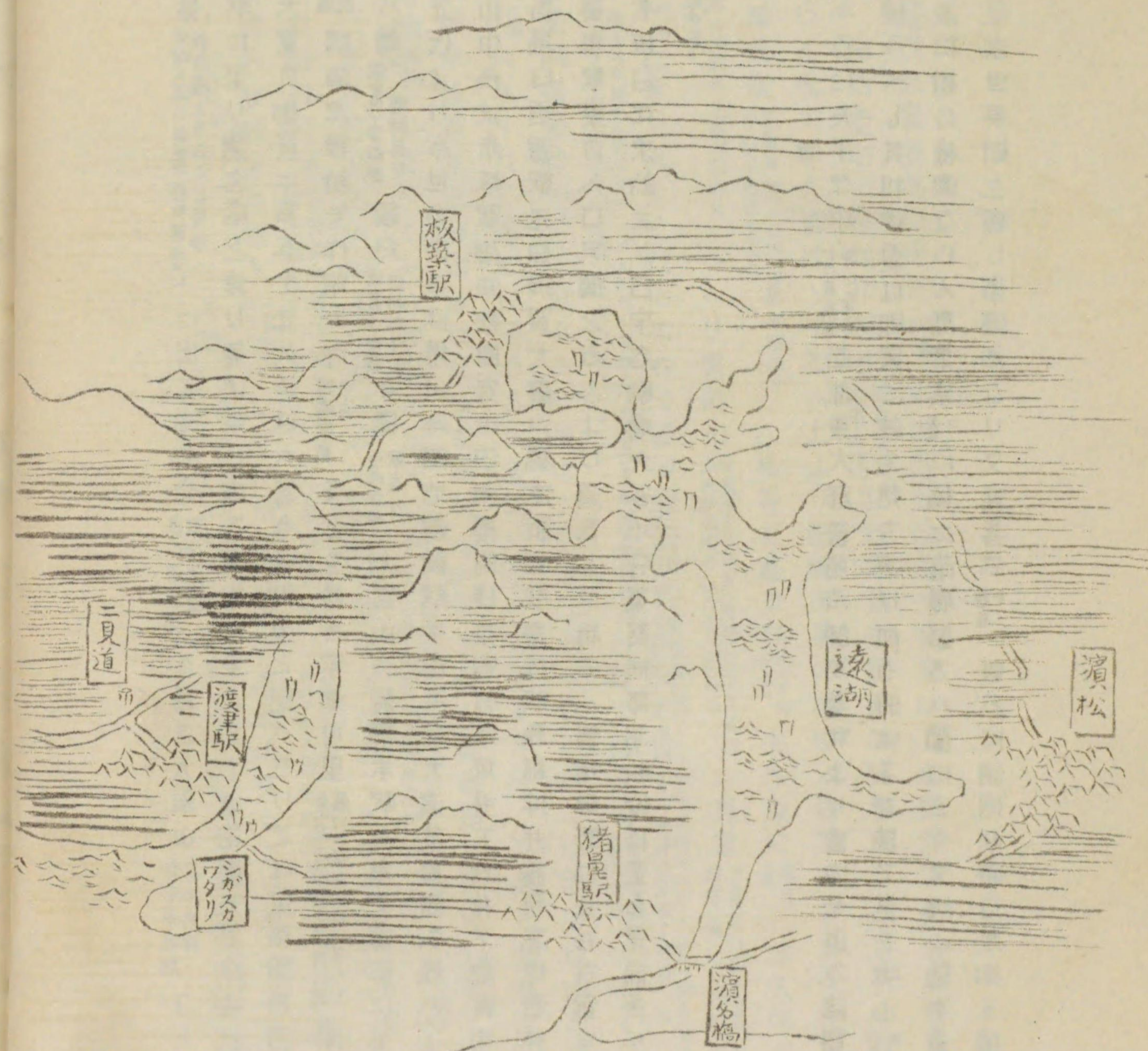
當國は 皇國東西の中央に配して且南海に濱せり從來東海道に屬して西京師を去る事五十余
里東に都を去る事七十余里にして是亦大概中道に在抑土地の形容を云は北の方山嶽重疊とし
て數里に渉り南の方蒼海渺茫として其限界を知らず就中土地平坦の地多ければ田圃も即少か
らず然して三河三郡を貫通して海に朝すこれを以て禽獸魚鼈はさらにもいはす五穀菜蔬錦繡
絹布器物等に至るまで民用一も乏しからず其榮昌をさく、都會の地に劣らず國內分て八郡と
す倭名抄に所謂碧海^{阿子} 賀茂額田^{叔加} 幡豆宝飯設樂^{志木} 八名^{紀渥美} 等なり此八郡に屬す
る処の村數凡千二百余村惣高大概三十五万余石最國土豊饒にして衆民安逸なり諸書に擧る所
或は上國とし或は中下の國とす然れとも当今を以て上下を論する則は本國三都の中央なる故
八達の利便余國に勝れて其位大上國に順すべきになむ

三河國八郡之畧圖

○三國界



古街道之圖



並松樹濶觸圖



見へたり其後北條泰時朝臣本國宇飯郡本野原に柳を植し事仁治三年の紀行に見ゆ其後天正三年織田信長公東山東海の大道路の両辺に松樹を植させ賜ひし事信長記に攀る是れ道路の両辺に松樹を植し初めならん

一里塚の初め

一里塚は 正親町天皇天正年中一里の行路を定め賜ふ地の三十六畝を表して三十六町を以一里とす諸國一里塚を築きし驗に松杉を以て植へきやと信長公へ伺ふに餘木を以て植へしとぞ承りて榎を植たる餘木榎の闇違なりと云傳ふと本朝世事談五丁+に見ゆ又家忠日記七丁+ 慶長九年二月の条に台徳院殿の釣命に依て東海道及び越後又奥州街道に一里塚を築かしめ賜ふこと見へたり右両説何れか是ならん後人の考をまつ

人物の性質

當國の風俗氣勝れて人の長十に七八延びず其言語鄙しけれとも実義多し事を約して遂さる事なし親子の間も互に恥らい虚談為事なし然れとも偏屈にして我を立て人の言を聞入れず是に依りて命を捨る者間是あり武士の風儀善多くして女も健氣に耻を知る処なり

慶雲現はる

多し寒暑温和にして人の心も寛大なり當國も北山中は少異なれとも風俗本書に説く所違はずと人記下すに

櫻の當國は北は山南は海濱にて其境廣平京平曠野





米花を降し

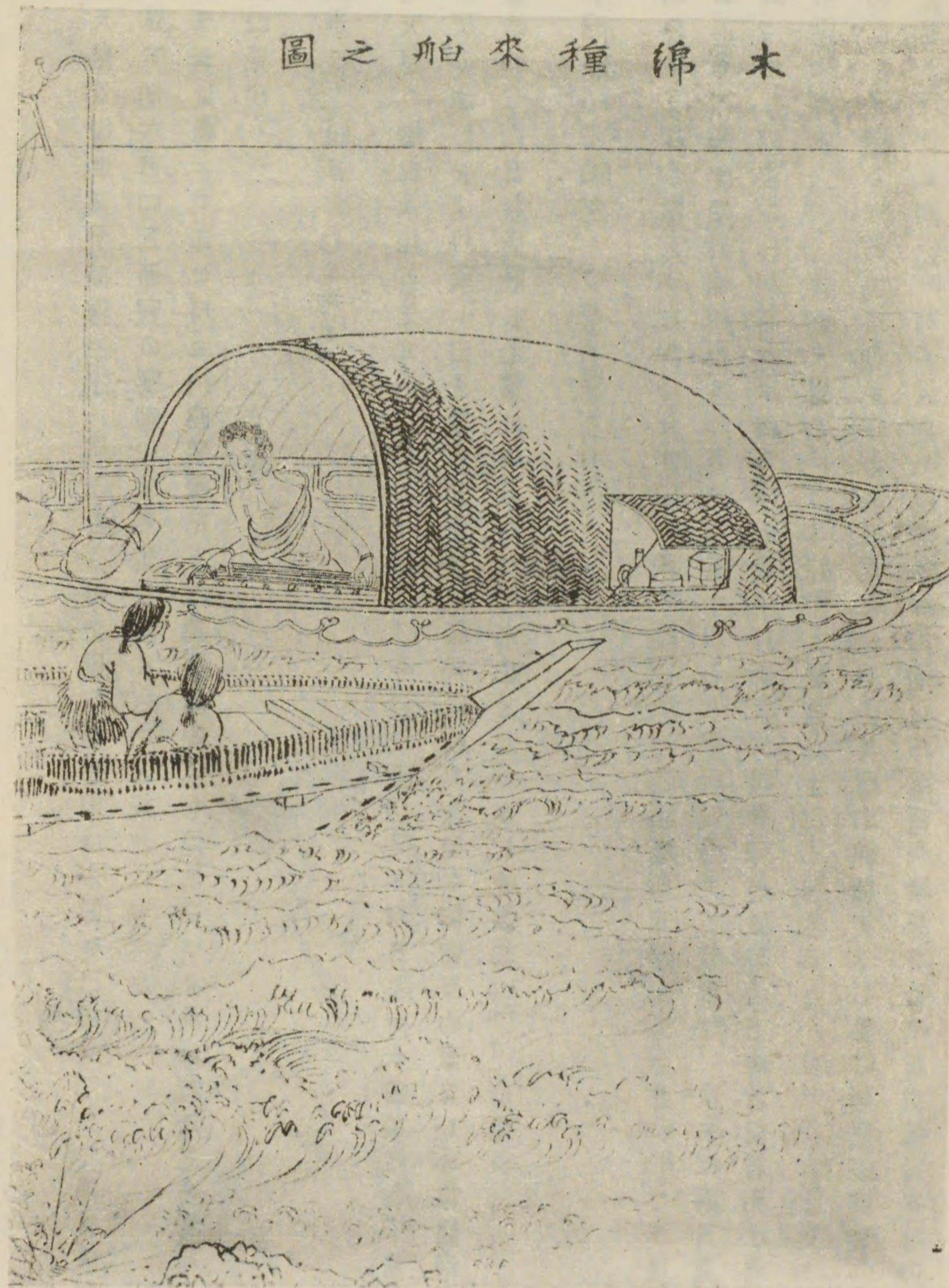
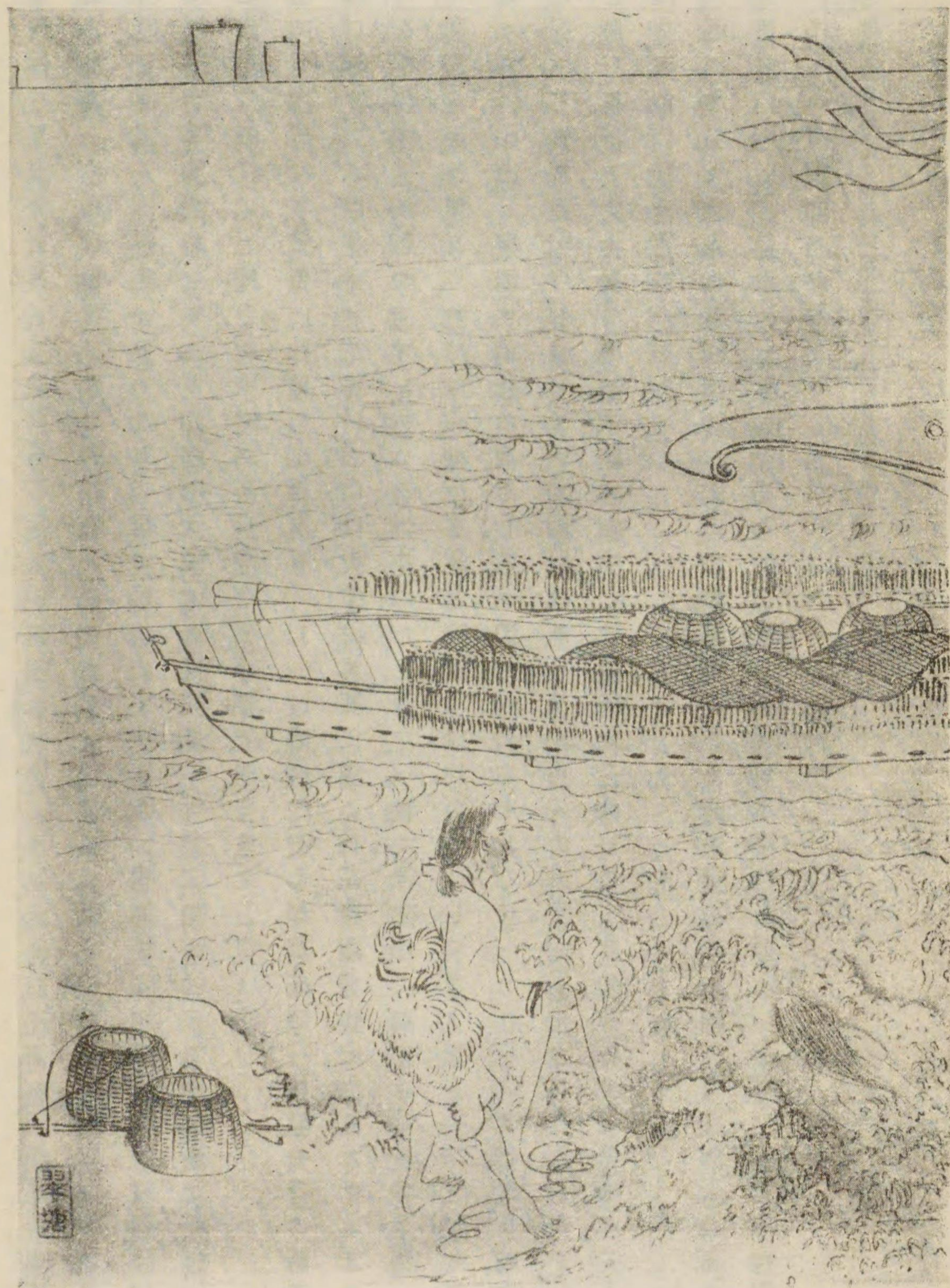
称徳天皇の御世天平神護三年八月乙酉の日当国に景雲現はる即癸己日改元して神護景雲とす
是に依て僧六百口を西宮の寢殿に於て齋を設く云々と統記に見へたり
タカラ云延暦二十年七月三川國景雲見ると類聚國史にも見へたり又承和五年五色雲見ると統
後記に見ゆ

天米花を降す ○前条に同じ

仁明天皇の御世承和五年九月の条に七月より今月に至りて三河云々十六國相統きて言上す物
あり灰の如し天より雨し日を累て止まず但怪異に似りと虽も損害ある事なし今茲畿内の道具
に豊稔にして五穀價賤し老農此物を名けて米花と云ふよし統後記卷七十一に見ゆ

水綿種初て舶來 ○此条幡豆郡天竹村に入へし

水綿の依て起る處を末だ詳にせず日に統記三十四に 淡路廢帝天平宝字六年年十八丁未造東海南
海面海等乃節度使料綿襖胄各二万二百五十具於大宰府云々又万葉集卷十 伎倍比等乃萬太良夫
須麻仁和多佐波尔伊利奈麻之母乃伊毛我斗杼許尔又同書卷三白縫築紫乃綿者身著而末者伎祢杼
暖所見又後記六十四 嵯峨天皇弘仁五年年十八上畧年八十已上人綿二十疋云々なと見へしは皆
楮の皮にて製したる由本朝武役令又塩尻等に見ゆ其後水綿種渡りし事は類聚國史三十七 桓武天
皇延暦十八年七月年十八有一人乘小船漂着三河國以布覆背有犢鼻不著袴左肩著紺布形似袈裟年



可廿身長五尺五分耳長三寸餘言語不通不知何國人トモ大唐人等見之僉曰崑崙人後頗習中國語自云
天竺人常彈一絃琴歌聲哀楚聞其資物有如草實者謂之綿種依其願令住川原寺即賣隨身者立屋西
廊外路邊令窮人休息焉中畧十九年四月庚辰以流來崑崙人所賣綿種賜紀伊淡路阿波讚岐伊豫土
佐及大宰府等諸國殖之其法先簡陽地沃壤堀之作穴深一寸衆穴相去四尺乃洗種漬之令經一宿明
且殖之一穴四枚以土掩之以手按之每旦灌水常令潤沢待生芸之と見へたり

因に云塩尻に木綿是に三種の心得あるへし一は佛教に云る却具我國桓武天皇の時來る木
綿は樹木なれば是斑枝花なり二には大學衍義補に謂る綿花東國通鑑に洪武二十二年元朝よ
り木綿の種を我朝に渡すと云はる綿花にして草なり我文祿年中に南京より其種を傳へ皆天
下寒苦を免る是なり三には我神代木綿と稱するは楮の皮にして是を糸とし布を織しなり
斯かれば中古皇國へ綿種の渡りし事本國を以て本土となすへし然して其後此木綿種絶し
と見へて夫木雜トモへししまや大和にはあらぬから人のうゑてしゆたのたねはたへにき
とあり其後天文文祿の頃再木綿種舶來して諸國之を作りて生民飢寒を凌く是偏に天上の賜
にて實に有難き靈草になむ

因に亦云大藏永常の綿甫要に云物類品階に載る所東壁の曰木綿有二種似木者名古貝似
草者名古終と草木のもの処々植る所の木ワタなり木本のものハンヤなりとあり我國にて
作る処の綿即古終なるへし云々

○敬雄云其船のつきし処は幡豆郡天竹村なりと三川堤に云り

由機となる

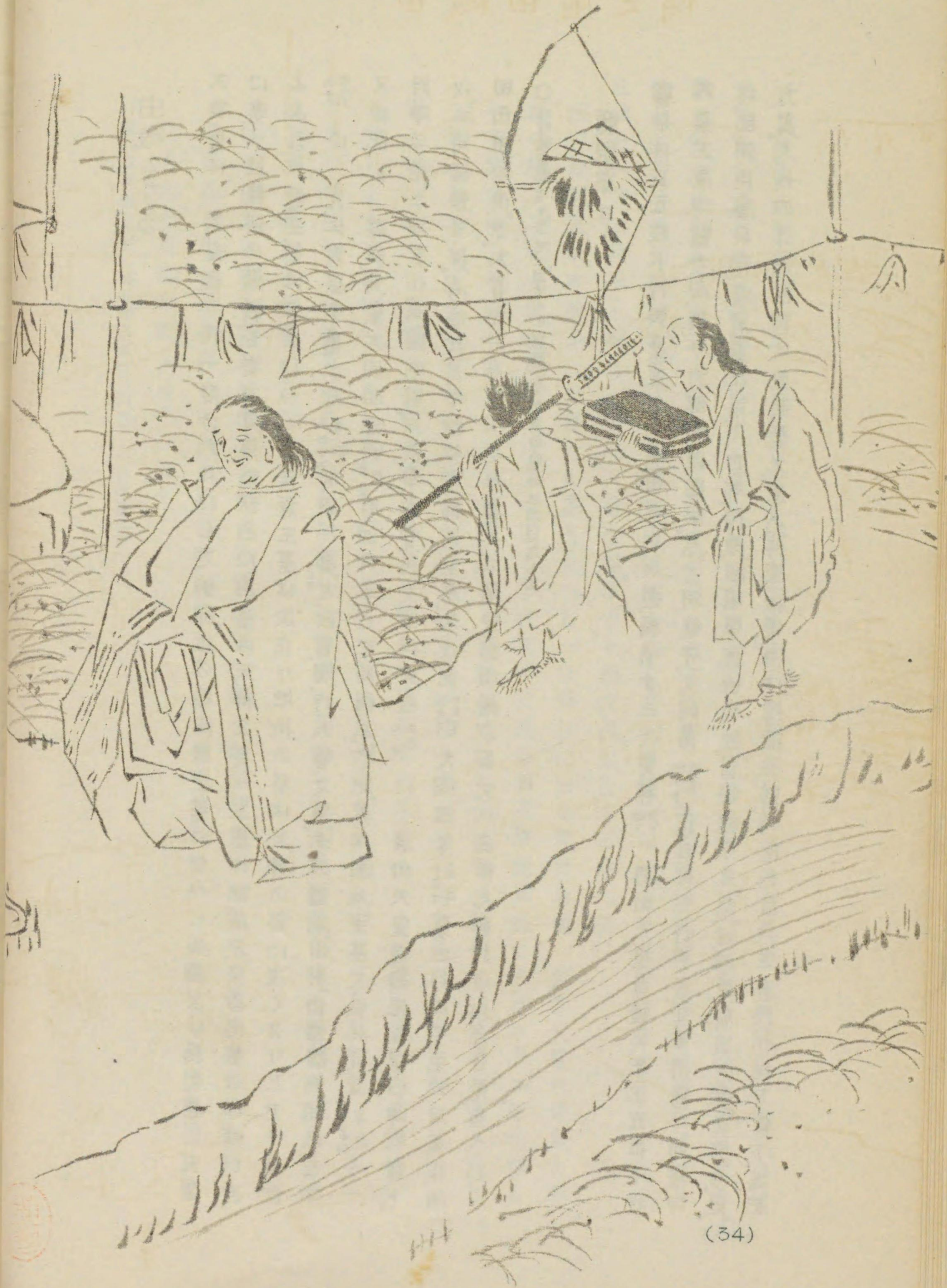
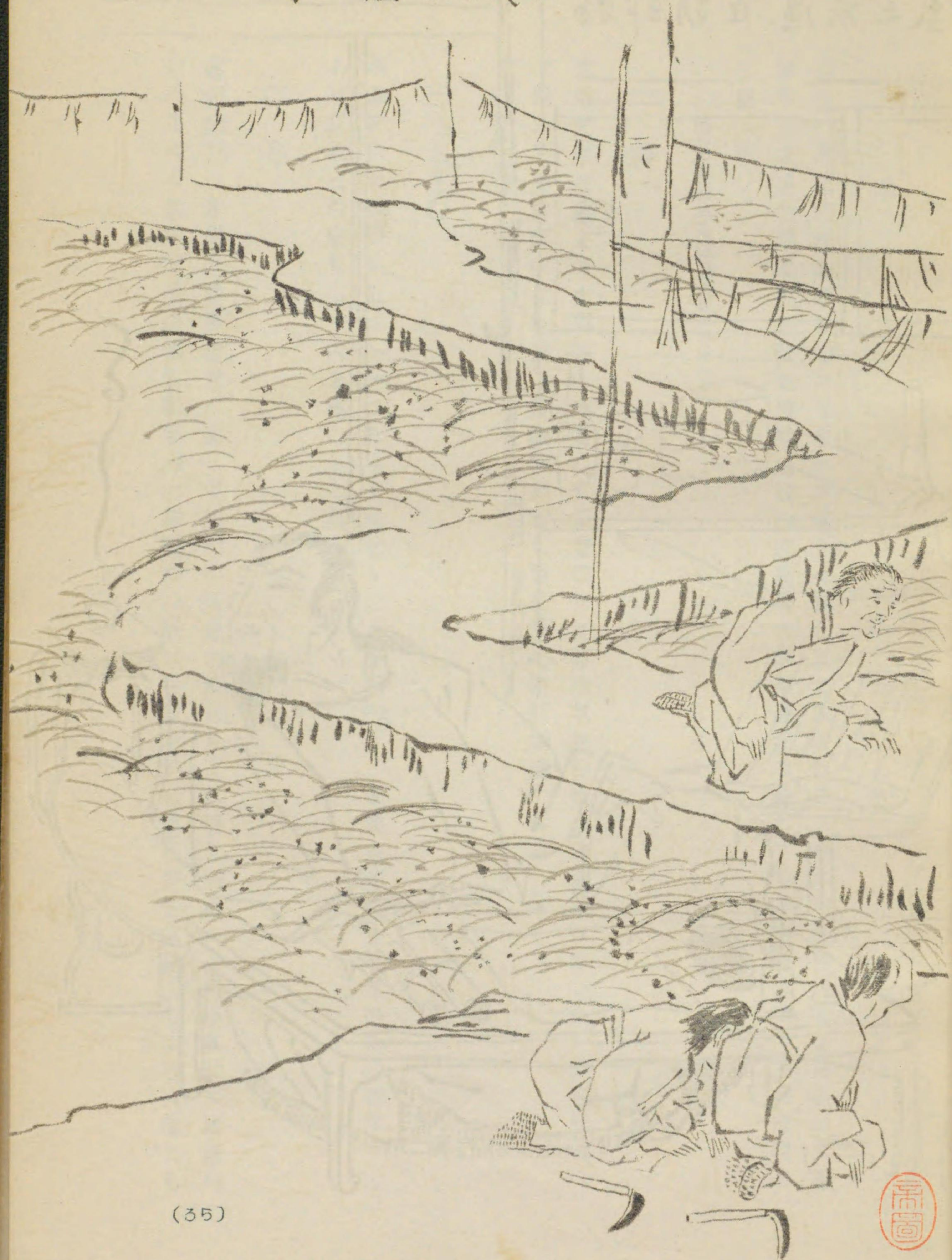
大嘗會は 天皇御一代一度の大祀にして御即位の後由機主基に定りし兩國より新穀を 天皇
に奉り且風俗の歌舞を奏す貝原翁狀名に由基は天神を祭り主基は地祇を祭る由基はゆはいき
よまるの意主基はゆきにつくと云意主基は次なり地祇の祭は天神の祭に次くなりとあり統記
三十一に 光仁天皇宝龜二年七十七癸卯 御太政官院行大嘗之事參河國為由機因幡國為須岐云々
又後記に 嵯峨天皇大同四年八十夏四月辛丑參河國為悠記美作國為主基又弘化元年十三十一月
月甲子免三河美作兩國田租以供奉大嘗也又三代實錄九十一に 清和天皇貞觀元年是日神祇官卜
以三河國幡豆郡為悠紀美作國英多郡為主基又後記三十一大同四年八十夏四月甲子免三河美作兩
國田租以供奉大嘗也云々見へたり委くは幡豆郡由機の条又八名郡長樂村の処合せ見るへし

○此後幡豆郡ゆきの処へ出すへし當郡にてゆきの場所此頃見出しぬ

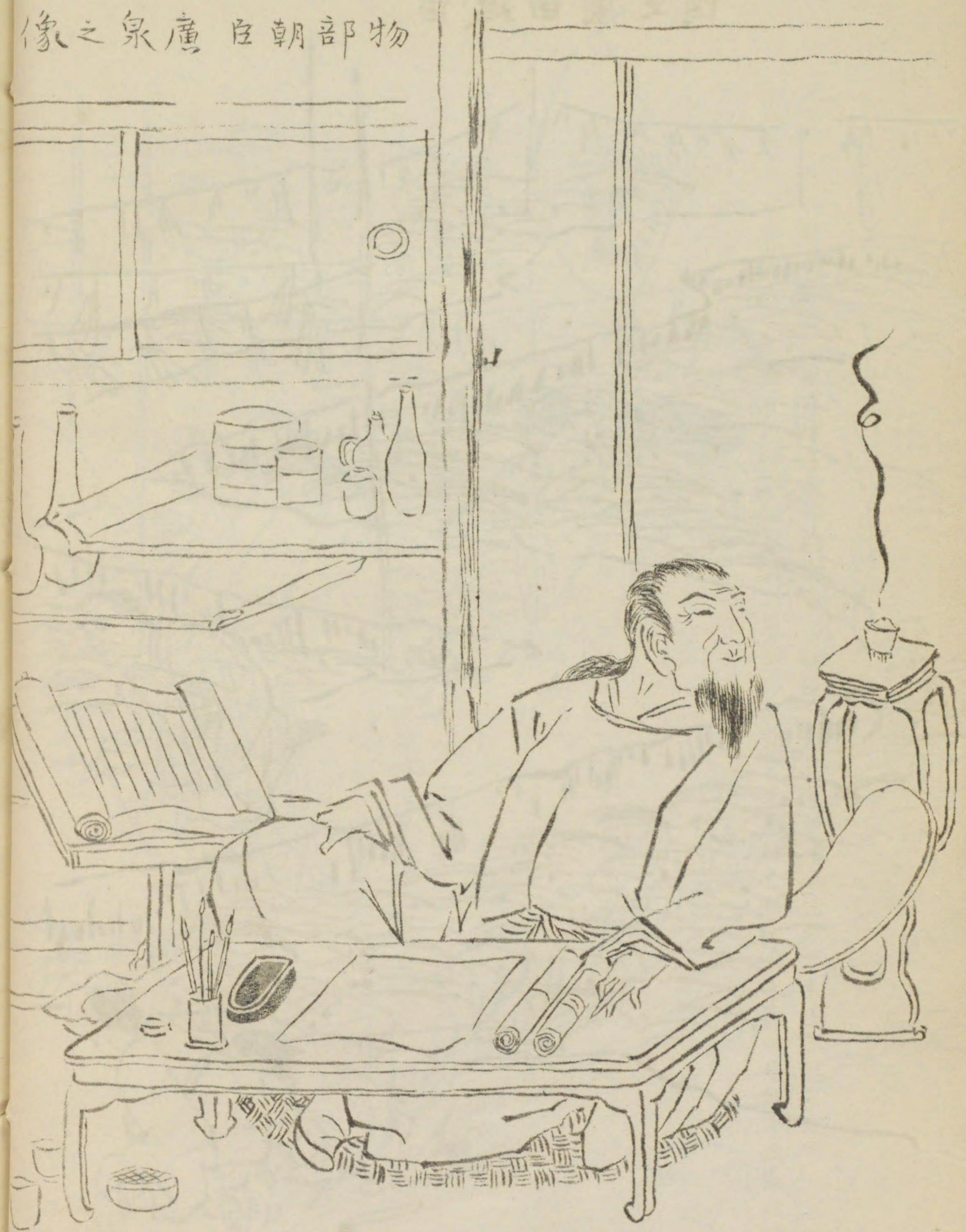
廣泉卒す

廣泉は正五位下行典藥正にて当世藥石の道獨歩す三代實錄四十一 清和天皇貞觀二年正五位下行
内藥正兼侍醫參河權少物部朝臣廣泉為三河權守又同書四十一正五位下行典藥正兼侍醫三河權守
物部朝臣廣泉卒廣泉者左京人也本伊豫國風早郡姓物部首後隸京兆賜姓朝臣廣泉少學醫術多見
方書天長四年為醫博士兼典藥允遷為侍醫後累遷伊豫讚岐椽侍醫如故六年春授外從五位下為肥

由機田圃之圖



物部朝臣廣泉之像



前介内業正侍医如故天安二年兼河権介貞觀元年冬授從五位下轉河権守内業正侍医如故廣泉兼石之道當時獨歩齡至老境鬚眉皎白皮膚悅沢氣猶強卒時七十六撰撰養要決廿卷行於世矣と見へたり

○開校の時節此条國府の末に加ふへし

地震

元明天皇靈龜元年本國大に地震して正倉四十七箇所其餘百姓の戸倉往々陥没せし事統紀廿六に見へ又文徳実録にも廿五東庫震動せし事を擧ぐれど地震にはあらず

○前条に同じ

三子を生む

海直王依女頼聚と云ふ女一に三子を産せしこと統記廿八孝謙天皇勝宝二年の条に見ゆ公より正統三百束乳母一人を賜ひしとなん

兵庫

書記三十三孝徳天皇の御世詔して諸國に兵庫を脩營して武具を納めしと見ゆ其所大概國府の内ならん鈴木忠侯の閑窓隨筆卷に諸國便に隨ひ兵器を納め置る是を武庫ともまた兵庫とも

獻牛馬之圖



云へり根津國武庫亦兵庫も此故なりと見へたり
○前条に同じ

牛馬を獻す

嘉祥二年 文徳天皇四十の御室算の時当國の国司從五位下安倍朝臣氏主白馬四十疋牛四十頭
支子四十斛を獻して賀し奉ると統後記十九ノ三に見へたり

○タカラ云和名抄に支子はクチナシとあり

○設楽郡名倉村亦同郡作手保の中多く牛馬を産すそこに加ふへし

御使連

譽田天皇の御世に御室稚使大王等遁逃仕へず 天皇使をつかはして尋ねたまふに並ひにまた
復命ありす此に於いて氣入彦命また 詔指を奉じて當國に追來りて是れを捕らへ獲てたてま
つりぬ 天皇嘉賜ひて使者に御使の連と云姓を賜ひしと新撰姓氏錄十一に見ゆ

編者 夏目可敬
補助 久田登高

參河國名所圖繪

寶飢郡之部

價那伎美耶地之耶
滿乃迤志喜乎波耶
波藝之以智乃名通
耳迦布迤伎

中山美石

參同圖名經圖卷

寶珠經之經

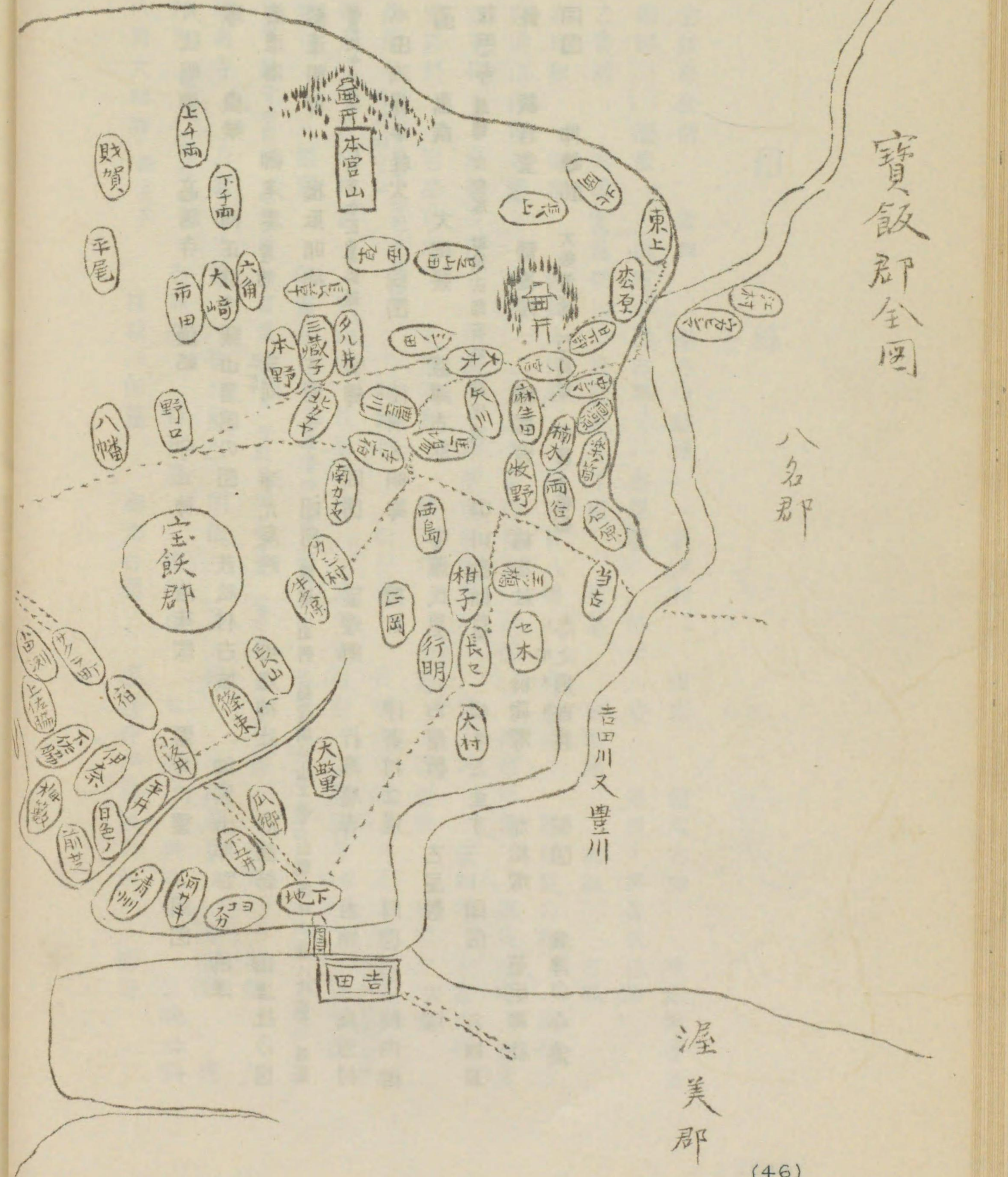
目録

宝飯郡全図 産物 郡名の起原 長沢村・同図 鱧塚古城 連歌師香清
 同図 関屋 鳥屋ヶ根古城 古屋敷 四十八渡 鳥屋ヶ根落城の図
 乙葉塚 三浦堂音羽川に馬蹄を冷す図 地菴 御殿場 城跡 古城
 赤坂駅 同図 朝鮮人夜泊 楯の杜八幡 宮道山 嶽眺望の図 師長公
 宮道山紅葉遊覽 同図 太上天皇行幸 同図 頼宮旧跡 群盜蜂起 古道
 五本松 烏帽子岩 切通 淨瑠璃姫腰懸石 客人沢 嶽明神 嶽古城
 宮路野 宮路の池 三葉乃楓 藤の花 黄龜みづあしのかめ 古屋敷 長沢十二家
 長福寺奥院観音堂 寂照法師の像 樓鐘鎮守社 女郎石 口髭君 長福寺の図 正法寺万巻廟所 鐘樓 熊野権現
 関河 萩村城跡 萩山 萩里の図 正法寺の図 龍源寺鎮守 古屋敷
 糠川 八幡宮 財賀寺 本堂 鐘樓廿三所 観音の像 山神祠 東照宮 石塔 弘法大師堂 天神洞 白山
 権現 鎮守権現祠 稻荷祠 護摩堂 厨方丈 年財天祠 仁王門 福泉坊 極楽寺旧跡 田祭 同図 古
 根座寺 力壽姫の碑 御油駅 同図 遠夫塚 主計殿墓 椿屋敷 東
 林寺 鐘樓 鎮守祠 古城跡 林氏墓 遠見山 七ツ塚 御油橋 又間、立場
 八面大明神 楠、大木 林孫八郎墓 御油合戦 渡邊守綱後殿の図 國府

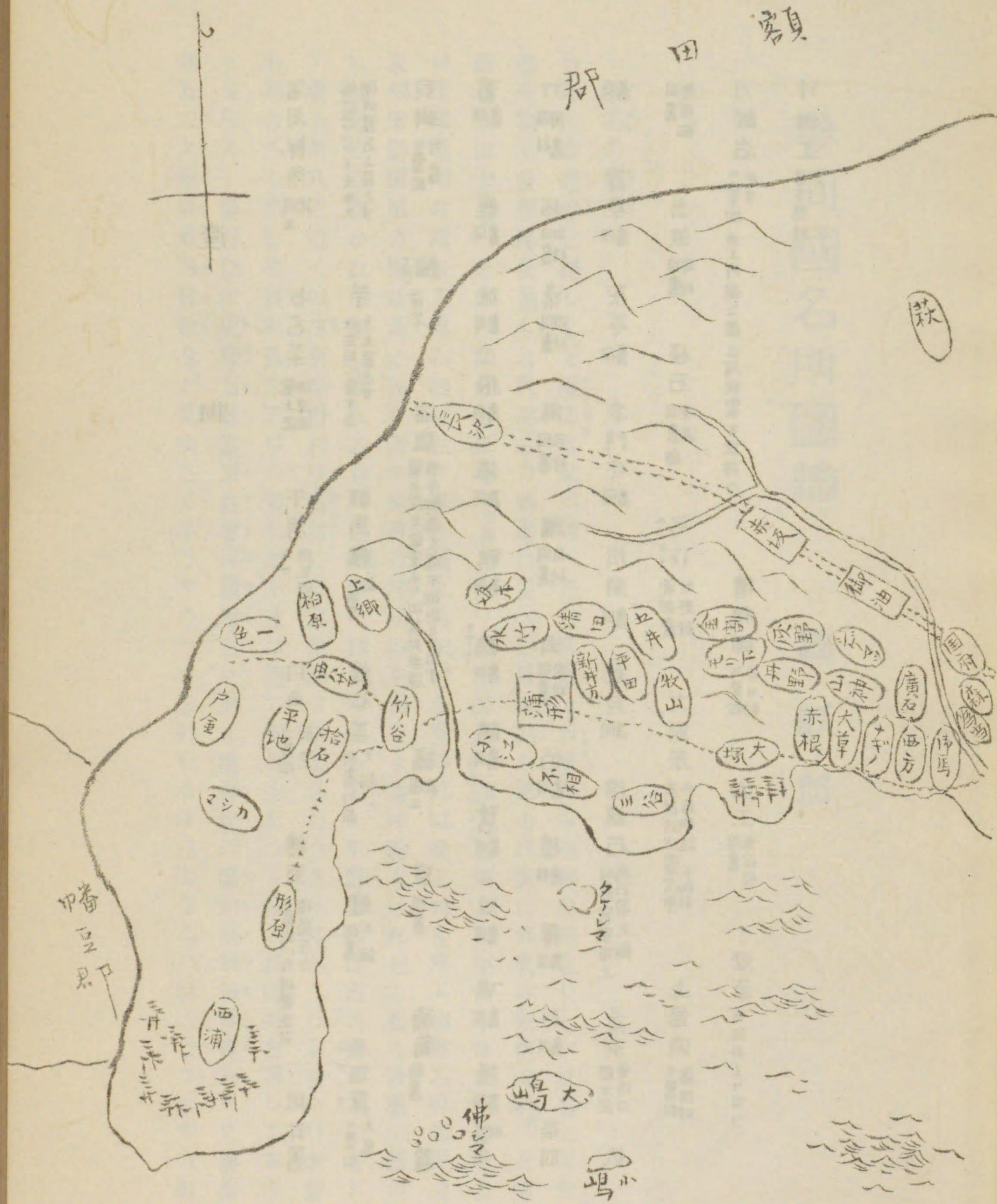
大社明神 高膳寺 鐘銘 守公神 芭蕉塚 雷井に墮 同図 クナナ
 塚 猿樂 楠正成猿樂山替居の図 茂松村古城 神宮山城跡 御津
 御津海 御津湊 産物 三河ミナト 淨光庵院 御津神社 同鐘銘 御津社の図
 船津明神 楯取明神 大恩寺 同図 鐘樓 山門 稻荷祠 山上堂 山縣高札 御八代墓 牧野
 黨代々の墓 戸田米女正墓塔頭 宝鐸 同図 望理郷 行徳庵寺 古城 為当村
 小田洲繩手怪火 同図 淡洲大明神アヲシメ 櫻町 伊奈村立場 同図 院内御
 菌 萬歳 大神樂 渡津古駅 安藤氏墓 古屋敷 古屋敷 火塚
 報恩寺 鐘樓 火穴塚 和泉式部石塔 鎮守祠 中川勘助墓 怪牛を産す 同図 名物温
 鮎 観音堂 龍徳院 糟塚岩 稻荷社 稻荷塚 赤松塚 菟足神社
 同図 神鐘銘 大般若経 石鳥居 年慶手植松 志之須香渡 同図 渡津の今道

設樂郡

寶飯郡全圖



真田郡



産物

海河鮮魚凡土記 奴名菜風土記 午房太サ 白魚二葉松 德蓼二葉松に云被總生芒 琉球薯
俗にサツマイモ牛久保の産を上品とす 芋麻生田に産する 御馬蠟二葉松 煙松菜同書竹島 蝗同書 小海羅コブアリ
貝蚶二葉松 鮓二葉松 海塩風土記大尾里より出其処未詳 橘風土記 橙同書 葡萄同書 蘿
葡萄同書 鹿同書 狐同書 狼同書 猪同書 鶴同書 鷓同書 雉同書 鳩同書 楊同書
竹同書 梅同書 桑同書 麻同書 繭同書 絹同書 柏同書 樟同書 櫻同書 杉同書 柴胡
書同書 黄芩同書 茯苓同書 麥門冬同書 松脂同書 粒貝同書 綿綿石同書官家取之 桑糸風土記 松
形原郷 当飯同書 怪石同書 弓同書 犬頭糸主計式江家次第 土器造二葉松
刀鍛治二葉松井上内理三郎三河政家も此所に住す 檜物師二葉松 冶工同書 煙草小坂井より出つ
竹細工日下部村

參河國名所圖繪

賈飫郡

郡名の起源

当郡上古徳國と謂しとぞ國造本紀に見へたり其頂は設樂郡も当郡の内なりしが延喜三年宝飯
郡を割て設樂郡を置しと民部式の頭書に見へたり又風土記の残缺に云東は寒陝河寒末を限り
西有岡山知未詳を限り南は宝飯寒末詳を限り北市師浦市師庄と云を限ると見ゆ今世を以て見る時
は東南豊川の流れを界ひ西は三ヶ峯の麓又長沢村を界ひ北は東上村を界ひ柳郡名の起源は我
友羽田野敬雄の官社考に云本宮は祇鹿の神社の本宮なる事は論なけれとも若くは徳の宮の意
にはあらざるか此山より流れ出る河を宝川と雖とも是も宝川本野原は中古の書どもにモトノ
ノ原とあれと旧くは本原本野村は徳村にて宝飲郡の本土なるへきか考ふへしと云へり此説さ
もあるへし然して其本義を云はし宝と云ふ意は惣て物の外をつゝみて其中央を指して云ふこ
とならん 景行記に夜摩昔波區瑠能摩保邏摩云々亦 應神記に區瑠能明母弥喻云々又萬葉集
卷五に久爾能麻保良叙など見ゆさてホラマのラマを約むれば八となるハはハヒフへのホの相通

にてホと轉すか、れはホラマと云ふ唯ホと云事を延言ひしなり
三字を一字に約め云ひし
 例萬葉集に見へたり 曰にホと指して云ふ言は譬へは稲穂堀頼帆洞臍など皆外を包まれて物の直中にある形を云ならん是等を以て考ふれば宝飲郡は東八名郡亦西北額田郡亦南渥美郡に包まれて本國の真中に配すと云ふ意の郡名ならん然して当郡に属する所の村数凡百四十三箇村惣高大概五万二千二百六十六石六斗六升七合となん

長澤村

榮木染凡三宝飲二字にてホと讀木の音を長(時)はオの音出るゑ飲は宝の餘音入飲字を飯字と書言は誤入紀伊國をさの國といふが如し
 宝飲民部式神名式拾芥抄和名抄民部式古本宝飲とあり

當村は東海路の内赤坂駅の西に隣る南北共に山嶽並ひ立て東西凡一里あまり左右の山の麓に民屋連れり往昔は最峻阻の地勢なりけん承久の頃は当村をも通行せしか又当村の内十五堂より右に折て宮路山中を通行せしか未詳末の乙葉塚の糸合せ見るへしさて四百年代永享の頃に至りては当村を通行せし趣歌詞に見へたりされど天正の頃までは道路も峻阻なりけん織田眞記卷一に信長公甲州平均歸路の糸に天正十年壬午夏四月十八日夙出吉田本坂長沢山路峻阻碎巖除石平坦如砥なと見へたり斯れは当時より道も平坦になりしと見ゆ

丙辰紀行

林道春

昔在轅門見玉鞍

豈因今日淚關干

林間鹿是甘棠意

遺愛歲寒千百辛

長沢村

空きむみ

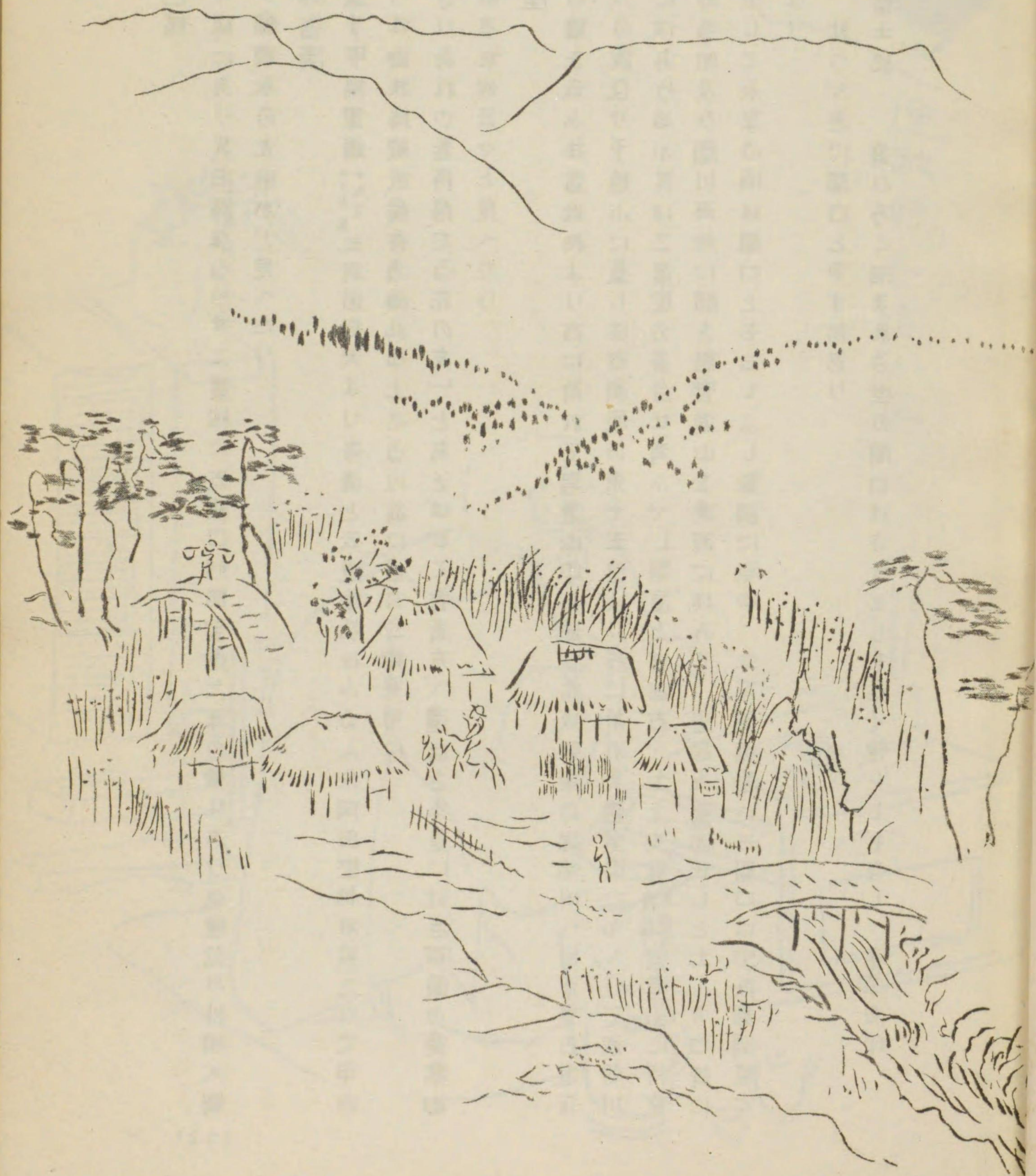
や、石のうらうら

赤坂やよるの

長沢何ゆゑ

了れり

植田孫方



鱧塚古城

同村西の端にあり其旧跡詳るらず二葉松に云関口刑部宝徳二年の棟札あり信康公の外祖父関

連歌師香清

同村に産す甲陽軍鑑十下五三河国長沢より香清と云連歌能仕ふる人を岡田堅桃肝煎を以て甲府へ召寄られ御扶持被成候香清御礼申上さる以前に信玄公御発句に

「ちぎりあれや春待得たる花の友」とあざばして香清方へ遣はさる是に付き百韻の連歌御前にて成され候云々と見へたり

関屋

同村面の端を云ふ往昔此処より右に折れて宮道山中を通り赤坂駅東の端関川へ出る是古道なりと土人の説なり予憶ふに蓋し往古関屋の東十王堂より右に折れて宮道山にかへりて彼関川へ出しにはあらぬか其は乙葉塚の糸合せ考ふべし関屋とは往古 太上天皇持統宮道山に行幸ませし時当所及び関川両所に関を居宮道山を東西に挟みて 皇居を警固せしと土人の口碑に存せり然して永享の頃は関口とも云しよし歌詞に見ゆ 三河藻塩草に云関口は宝徳郡関屋と云ふ処なり

此つゞきに関口と申す所あり

覽富士記

道ひろく治まれる世の関口はさすとしもなく守としもなし

堯孝法印

連歌師香清の図





鳥屋ヶ根城

同所の番場と云ふ処にあり二葉松に云関屋より宮道道に古屋敷あり是れ南城か又岩畧寺城
駿河方七頭籠る小原藤五郎鎮宗槽谷善兵衛とあり三河堤に云小原藤五郎鎮宗
槽谷善兵衛宗益と見ゆ又武徳編年集成(平)永祿
四年七月の条に長沢鳥屋ヶ根の砦に今川の臣槽谷善兵衛小原藤五郎植籠る 神君中山にか
附城を構へ石川日向守家成松平勘四郎信一を籠置かれ鳥屋ヶ根城を攻めさせ賜ふ敵強く
して其功を顯はし難し或時 神君三千余兵にて牛窪に働かせ賜ひ歸路長沢を過賜ふ敵吾を
遮らんか山中の峻阻殊に隘路なればとて総軍を二つに分賜ひ一手は山下の本道にかゝり一
手は御旗本にて山の南を歴て通り賜ふ処鳥屋ヶ根の城中失火し烟塵天を霞む山下を過る味
方の勢は 神君麾下の親兵を以て城廓に攻入り放火し賜ふと思惟して我劣らしと山上へ馳
登れは御旗本の軍士は殊に進て是を攻る信一家成弥競ひ攻むれば城兵多分逃散て城將槽谷
小原は突て出て死戦を爲す本多肥後守忠実敵を突殪し猶子平八郎忠勝に其首を得へしと云
忠勝笑て曰吾は人の力を借て功名すへからすと云捨て敵一人を槍付其首を得る渡辺半藏守
綱は小原藤五郎を討捕城廓遂に陥り槽谷は駿州に走る衆人皆曰当城峻阻にして守兵堅固な
る処に 神君は隘路の難を察し軍を二列となし賜ひ城攻の御心更になかりしに不慮に城内
火災起て落去すること純直に弓矢を取りせ賜ふ故天の感する所ならんと嘆息す然して本多
肥後守は姪平八郎十四歳の童なりと雖も今日の大膽誠に物になるべき其器たる由委細言上
せしかば 神君甚だ感激し賜小後 御当家干城の三傑本多中務大輔是なりと見へたり

古屋敷

二葉松鳥屋ヶ根城の下に云関屋より宮道道に古屋敷あり是南城か云々土人の説にこれは黒
太夫屋敷の跡なりとぞまた天正年中諸居住記に長沢村渡辺半藏同黒右工門とあり

四十八渡

当村の内を縦横して回流せる音羽川を云ふ故此音羽川の名目承久記にあり
乙葉塚の条を見るべし 此川水源宮路山中より流
出して赤坂御油兩駅の北裏を貫通し御油橋を流れ佐脇村に至て御所川と呼ぶ梅藪村と御馬
村境にて海に朝す蓋し此川往昔当村を幾瀬ともなく榮帯せし故四十八渡と称しけんさるを
天正の頃当村の峻阻を平かにせしこと長沢村の處を見るべし又思ふに当時は宮路山中を通
行せしもの軟彼山中今猶幾瀬ともなく流れを越て赤坂駅に出づ奥に四十八渡とも云ふべく
なん此道古道の名残なり海花無盡藏に万里居士朝に苅屋を立て同日三戸里御津な
らん 大昌寺御津な
らんに泊る其中間左の詩あり斯かれは四十八渡は此辺なること顯然なり

四十八渡 同日出生寺東敷里間有四十八渡其北

海花無盡藏

家々門戸石虹横

巧匠如磨掌様平

便是活蟠優鉢集

四十八渡水傳名

万里居士

乙葉塚

同村十王堂の北街道より一町余左の方に在二葉松に云昔松平上野介族矢部織部の古屋敷の

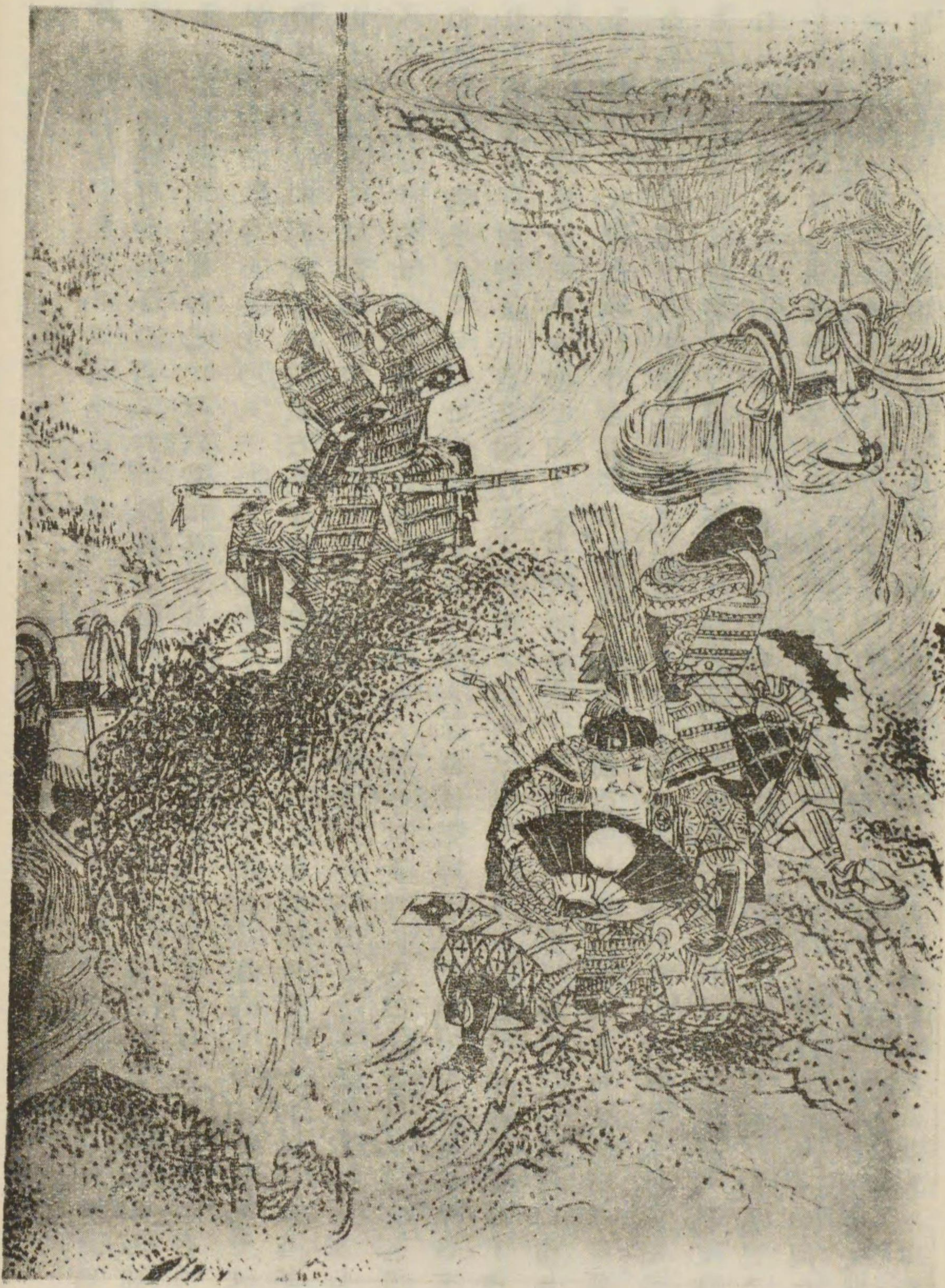
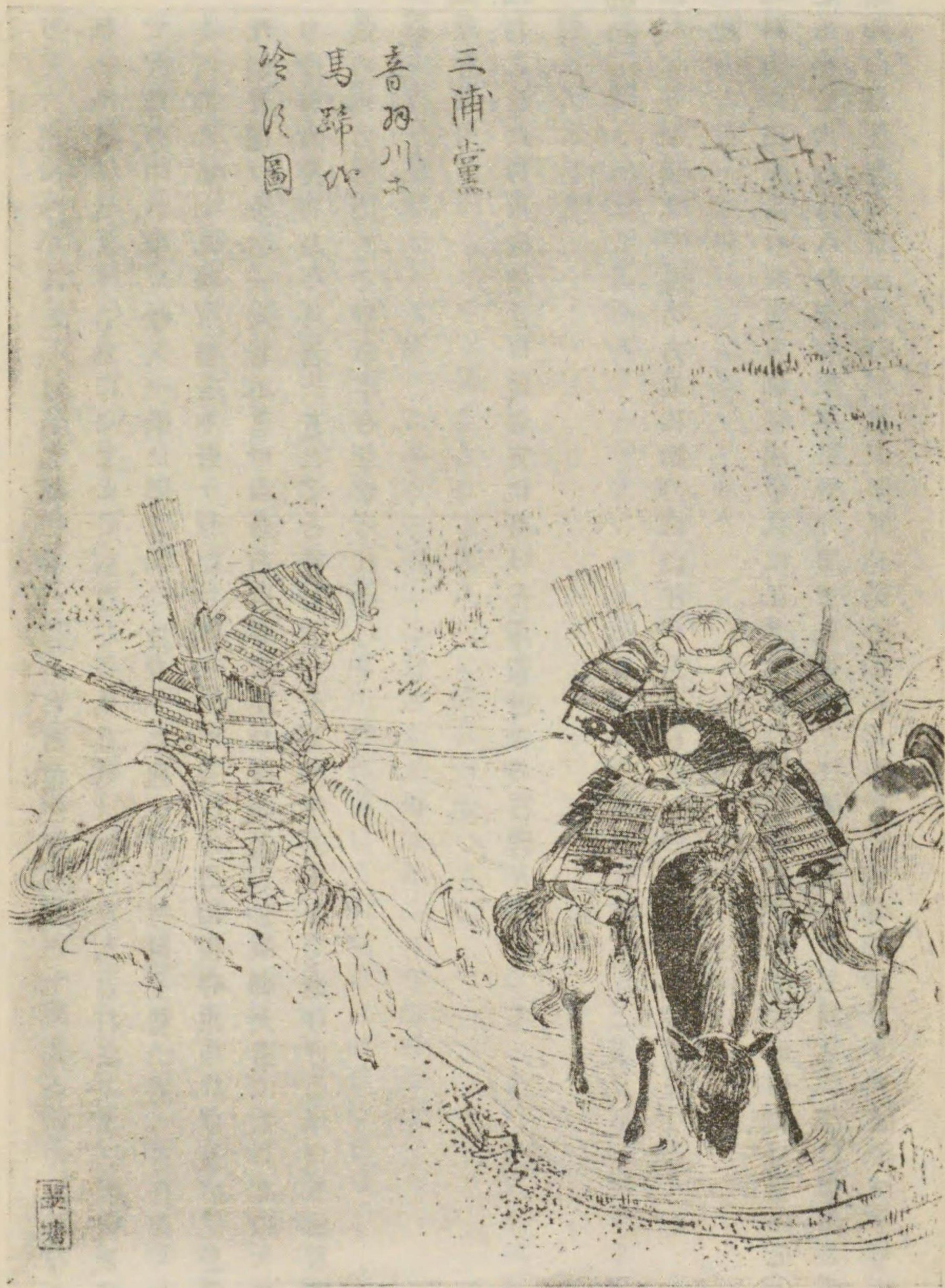
裏なり丸経リ八尺許の塚にて上に長四尺許の五輪塔あり世に犬塚と云ふ三河堤に云御系譜
に乙葉入道行増源頼信が三男從五位下井上掃部介頼委秀の事なりとあり三河堤の文意不明なり東原
氏の水碓岡志行頼信の孫從五
位下井上三郎頼本乙葉三郎とも云信濃国に住すと見ゆ又蒲生家の系に刑部大輔定秀入道智明の三男に乙葉右
馬允秀頼は細川家に仕へしむと見へたり考ふへしとあり又里俗の

説に往昔乙葉と云犬ありしが荆棘を踏分て今の往還を開き導きたる功ありけるに依り其犬
を葬る其を乙葉塚と云ふと渡辺政香の筆記二葉松に見ゆ可敬熟考ふるに此塚は往昔承久の
乱に下総前司盛綱の近親築井太郎高重党十九人京方の味方として上りけるが遠江国橋本宿
にて北條時房の陣を夜に紛れて潜に通り抜け宮道山に馳入音羽川に馬の蹄を冷して休息し
て居たるに北條の旗下に遠江国の住人内田四郎六十餘輩にて追懸來りて終に十九人を討捕
首を本野原に懸けるよし承久記に見へたりか、れは此十九人を埋葬せし塚にはあらずや塚
の形容アキ犬なと埋し姿にあらず五輪も承久の時代ならん其は三卷雜記に記し墓園等合せ考ふ
へしさて上に音羽川に云々なとあるを以て見るに彼川今世此塚より纔に一町許南を流る彼
是合せ見る時は大概彼十九人の塚ならん世に又乙葉塚と云へるは彼塚音羽川の辺にある故
自然世に音羽塚と呼しものならんさて右承久記の文に見今又爰に彼十九人の塚ありとする
時は当世塚の南十王堂の処より道を南に折れて宮路山へ掛り赤坂駅へ出しもの欵又当今の
街道を通行せし欵未だ詳にせず其は後人の考を俟つのみ

承久記に云承久三年五月二十一日由井濱藤沢清親が許より門出同廿二日被立ける一陣相
模守時房中畧十九万余騎亦官軍は以上一万七千五百余騎六月晦日都を出て尾張国瀬々に

陣す畧海道の先陣相模守遠江の橋本に着けるに十九騎連ねたる勢の高志山へ入りぬと申
ければ相模守如何なる者なれば先陣を越て先様に通るやらん遠江國の住人内田四郎が申
しけるは駿河守殿の已に敵大勢にまきれて如何様にも通る事もありんづると宣つるな
り相模守さる事もやあらんさらは各追懸て敵か味方か尋聞き敵ならば打て進らせよとそ
仰ける内田四郎同六郎新野右馬允是を初めとして六十餘騎追懸たり十九騎続たる勢高志
山をも馳過て宮路山へ打かゝり音羽川の端に下り立て今はさりとて続く敵もありじと
て馬の足ひやさせて片なる丘に扇開きつかふて休みける処に内田の者共馳來て谷を隔て
扣へつゝ使者を以て云はせけるは如何なる人なれば先陣を越て通り賜ふぞ敵か味方か承
れとて相模守殿御使に遠江國の住人内田の者共が参て候なりと云はすれば實は下總のや
からに三浦兼井四郎太郎と申す者にて候板東に用事の有て下り候ひつるが京に事出來た
ると奉りて大勢にかいまざれてや上候とて通り候ひつるに被見付進らせ候ひけり運の窮
る処力及ばず但一人もきたなき死はずまじ物を各相近によれよと被申ければ内田の者ど
も六十余騎にて押寄たり築井とある小家に走り入て四方の垣切て押立六人楯籠て矢たは
ねとひて推しくつろげ指攻々々是を射る内田の者共谷を隔てゝ控へたるが射落さるゝ者
もあり目の前に疵を蒙り命を失ふもの数多あり流井矢種少なく射なして今は如何にかす
べき打勝へき軍にもあらずさのみ罪つくりても詮なしいざや思ひ切らんとて後見安房郡
司と差違へてそ臥にける残る四人も親しう差違へてける十三騎の兵共とあるそばを打下

三浦黨
喜羽川
馬蹄代
冷次圖



りて大道につかんとしけるを敵におづるかと言葉を懸られて主の死る所にて死なで落る様やある軍せんずる爲にこそとて引立たる馬なればひた／＼と打乗て十三騎轡をならべて大勢の中へ喚て馳入一騎に四五騎に推双々々組ければ無勢多勢に勝へき様なくして皆々打捕れぬ十九騎が首を本野ヶ原に懸たりける次の日相模守通られけるが是を見て十九騎と聞つるが一人も亦落けるやあはれよかりける者ども哉御大事にもあひぬべかりかりける物をやあたり者共をとて各誉めおしみ弥陀佛と申して通りける六月五日辰時に尾張の一の宮に着て軍の手合をせられけり

地 菴

洞泉寺と号す

同村乙葉塚の東街道より左の方にあり長澤家世々の石碑を収む
本尊

○御殿場

同村に在街道より左の方並松樹の傍に在 將軍家御上洛の時の御殿場なり

城 趾

同村の中街道より左の方御殿場の北に在二葉松に云根元長沢四郎在城四郎は富田左近が子也信光公に攻落され云々松平上野介康忠先祖代々住居と見へ亦三河八代記に信光公或時暴兩頬に風荒き夜東山中長沢を長沢四郎を夜討して不意に乘取賜ひ是を源七郎殿に参らせけり

云々又三河堤に云此源七郎親則は幼名弥次郎後備中守初額田郡岩津に居城あり其後当城を築き移り賜ふ初めの城跡岩津村に一字を建法性山妙心寺と号す又三河雀に云親則法名妙心院前右少丞朝議太夫老中祥公大居士寛正二年辛巳十月朔日卒す同村地菴に石碑あり世に長沢松平と称するは此御家なりとあり

其子上野介益親三河雀に法殿院親益と在 法名正心三河雀に法殿院叟淨大居士と在

其子上野介近宗法名淨圓 三河雀に云兵庫頭始めは近宗後勝宗法名覺叟淨心居士永正六年三月十日卒す

其子上野介勝宗 三河国聞書に云永正六長沢城主松平兵庫勝宗卒すとありまた三河雀には近宗勝宗を同人とす上の条を合せ考ふべし法名淨心

其子上野介親廣法名淨賢 三河雀に明室淨賢居士元龜二年二月廿四日卒す
其子上野介政忠 永祿三年今川義元に隨て尾州桶狭間にて討死と三河堤に在り

其子上野介康忠 三河堤に云康忠は親則七代の後胤母は清康公の女市場の室は廣忠公の女暁のど大神君に奉仕し処々にて戦功あり元龜元二の聞甲州武田信玄属三州を伺ふと雖も康忠能く長沢城を守る故克たず天正三年五月長篠陣に功あり同年遠州高天神城攻の時櫓を落す同十二年尾州長久手小牧の役に軍忠を尽す同十八年八月關東御入国の時武州深谷城一万石を賜ふ其後関白秀次公十五石を以て招くと雖も何ぞ祿に耽りて二君に仕へんと云々元和四年八月十日卒す八十五歳法名光珠院雲洞元本居士可敬云康忠武州深谷入城の以前

は親則君より七代世々当所に住す武徳編年集成^{二五} 永祿五年八月六日康忠時に十七歳御諱の字を賜ひ又領地の印章を賜はる市田半方瀨八幡同西方同本所方光久方岡本方御津村赤根金破大草平井宿村小坂井府中篠田西原長草菱水野森原双方御馬の郷豊川若宮方中条方平尾稲塚篠田郷惣都合千八百拾貫と見へたり亦藩翰諸卷五に親則七代の孫長沢上野介康高は贈大納言家の御女 大御所の御妹君を迎へ源七郎康忠を設けらる康忠文祿二年の冬卒す賜ひ云々又武徳集成に云永祿五年十二月二十八日 大神君松平淨賢齊康忠へ領地の印章を賜ふ貝福駒場云々見へたり

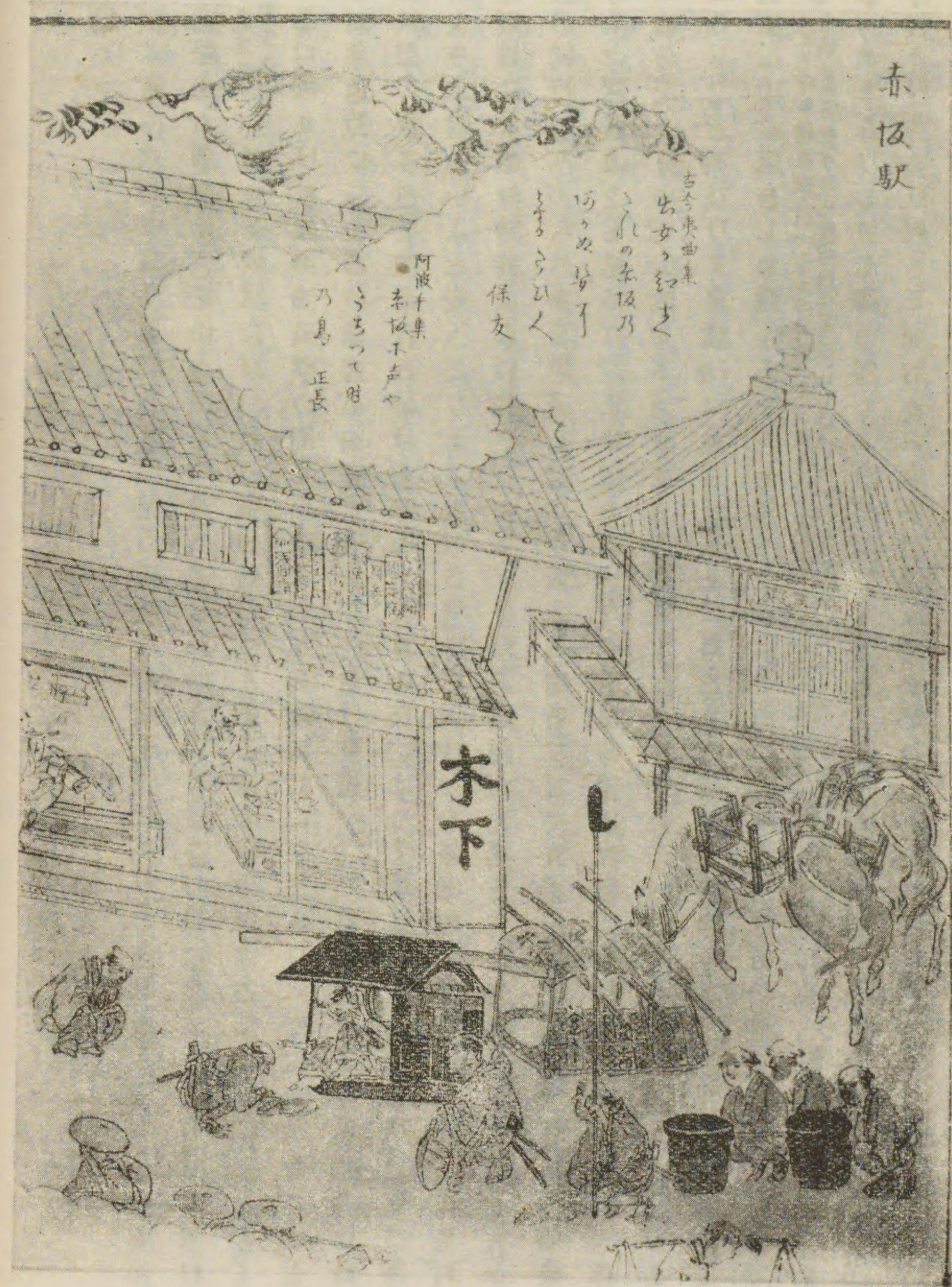
其子源七郎康直 三河堤に云康直家督を継ぐの処に文祿二年十月二十日早世す是に依て家断絶す然るに母君矢田殿の頼に依り 大神君の六男忠輝朝臣に其家を続かしめ賜ふ其嗣從四位下忠輝朝臣 越後国を領したまふ
其嗣從四位下忠明朝臣 三河堤に云忠明朝臣実は奥平信昌君の四男元和五年餉命に依て長沢松平の名跡となり十万石を賜ふ系傳三河船に委しと見へたり

古城

同村御殿場より東南の山に在二葉松に云南方山城云々細書に見ゆ又土人は此を夏城と云馬場の跡など今猶存せりとぞ憶ふに長沢家南の兩城を持て居住せしもの軟又三河堤に云大滝古城同村に在戸田彈正政光^{戸田彈正憲光の子戸田五郎の事軟戸田五郎は後左近とも云大神君をうばいし人なり}とあり蓋し大滝とは右西城の中を云ひしか以上にあぐる城趾の外其所未詳

赤坂驛

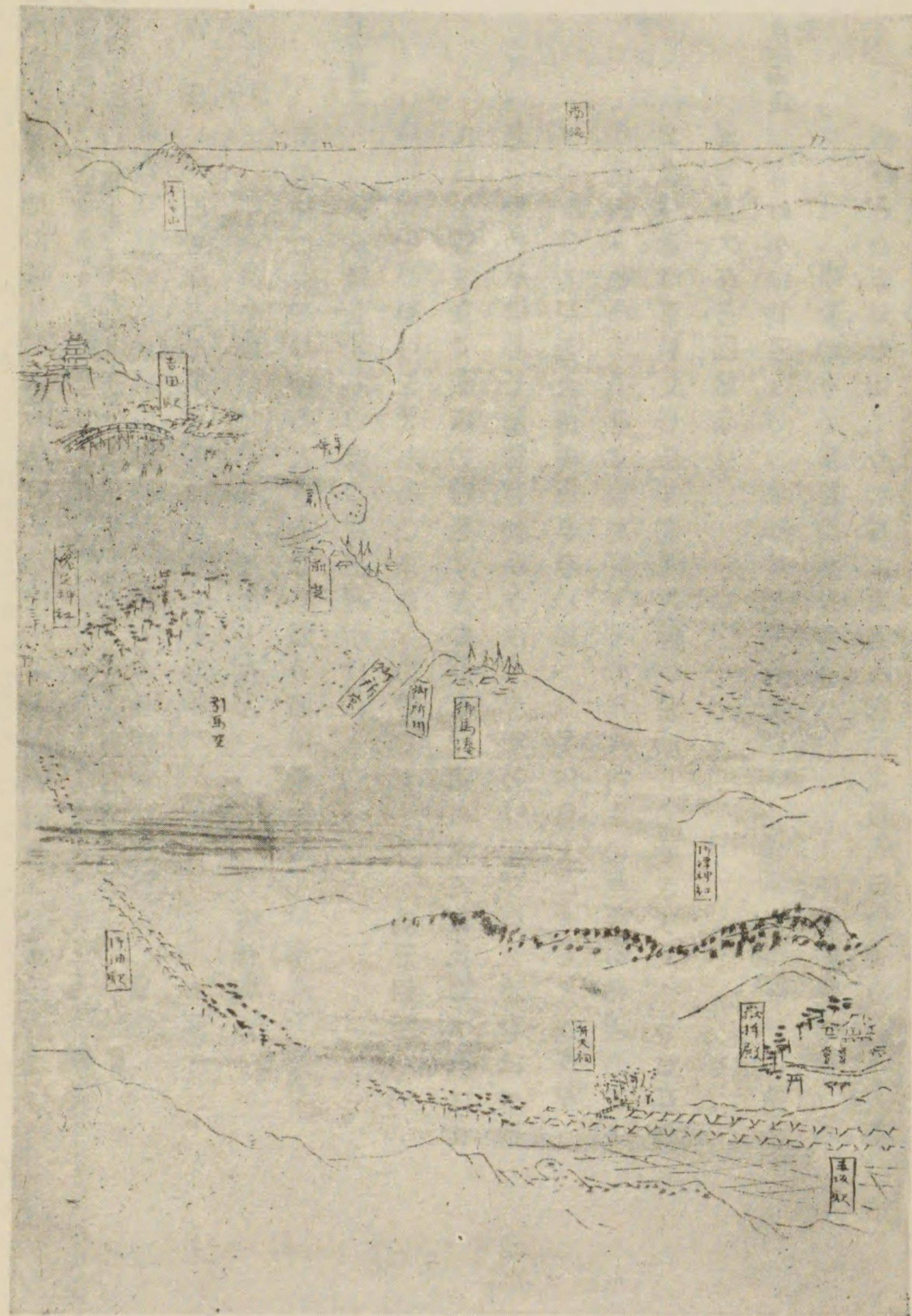
当駅は面長沢村に隣り東御油駅に至る兩駅の間十六町ありとぞ敬雄云安永の頃安部長解の宮路山古道図に宮路山を越て切通しあり此所赤土の坂なり故に赤坂の号あり本宿村^{額田郡の中なり}を古き赤坂宿なりと云ふ事如何あらん旧き赤坂宿の跡は古宿^{上宿と云地所あり}とて田地の字に残れり赤坂御油兩駅の間並松樹より左の方河北に在夫より八幡村西明寺へ出云々又三河藻塩草に云上古の赤坂の旧跡宮道山中にあり東鑑^{ナナ}に見ゆ亦世諺^{ナナ}に云 天武天皇の皇子草壁親王行在所は宮路山と云其山坂によつて明坂と稱す元藤川の東にある故所を今本宿といふと見へたりさて赤坂の号は神鳳抄に赤坂御園又拾芥抄に^中赤坂村主又赤坂首又本朝無題詩に赤坂傀儡女云々又貞応海道記に矢矯を立て赤坂の宿を過く云々又仁治の紀行にみやちやまを越過る程に赤坂と云宿あり云々又源平盛衰記^{四五}宗盛公關東下向の条に宮路山をも越ぬれば赤坂宿と聞へたり又謡曲逢坂物語に赤坂や松にかゝれる藤ヶへの梢の花をみやち山云々亦当駅正法寺建久二年の古記に赤坂と見へたれば古くより赤坂と云ひしこと明なり又東鑑^卷に文治六年十二月右大將家關東下向の条に十九日己亥夜に入て宮路山中に宿せしめ賜ふ云々とも見へたればそのよは元宿村などに旅人の館舎ありしと見ゆ^{八百年代本朝無題詩に赤坂の号見へて遊女もありしに七百年代右大將家上洛あり}夫より應仁の争乱起りて西海悉く鬪争の岐となりし故赤坂の宿も一旦衰微せしと見へて正法寺太子の像銘に赤坂村太子山正法寺云々見へたり然して御治世以來東街道は諸侯参勤の街道なる故日を追て繁昌せしかば彼



赤坂駅

古今東西
出女、紅き
くしの本坂乃
何れも歩み
とまらざらん
保友
阿波千集
赤坂千吉
うちつて時
乃身正長

木下



旧地より今の地に移りて再び宿駅となりしもの状其は後人の考をまつ
可敬云何宿と指して云處ありてもあながち古駅の跡とは定めがたし往昔繁華の地近き所には必ず汚穢の時引移りてものいみせし所ありて
其處を何宿といふ事ありかれば元宿また上宿の地名ありても古駅の跡とは定めがたくなん

家集

古もなみたをともちらしき

俊頼朝臣

三かはにくだりけるときおなし國の名所歌合に

夫木雜三

あか坂をすみのほる夜の月かけに

為忠朝臣

ひかりをさふるこまさゝの露

九日矢矯を立て赤坂の宿をすぎむかし此宿の遊くん花のかんはせ
春こまやかにして蘭質の秋かうはしき女ありたり貞を潘安仁が弟
妹にかりて契を三州史の妻妾に結へり妾は良人に先して世を早う
し良人は妾におくれて家をいづしらす利生の菩薩の化現して夫
を導びさけるか又しらず圓通大師の発心して妾をすくへるか互の
善智識大なる因縁なり

貞志海道記

いかにしてうつゝがみちを契らまじ

源朝臣光行

やはぎと云處を出てみやち山越過る程に赤坂と云宿ありこゝにあ

りける女ゆゑに大江の定基が家を出けるも哀れに思ひ出られて過
がたし人の発心する道その縁一にあらねともあかぬ別れをおし
しまよひの心をしもしるべとし誠の道におもむきけんありかた
かほゆ

仁治三年の記

別路にしけりもはてゞ葛の葉の
いかでかあらぬかたにかへりし

源朝臣親行

三かはに下りける時云々

夫木雜三

秋きてぞ見るへかりけるあかさかの

藤原盛忠卿

もみじのいろも月の光りも

海道宿次百首

夫木雜三

外山なる花はさなからあか坂の
名をあらはしてさくつゝじかな

参議為相卿

紀行

一夜あふゆきゝの人のうかれ妻
いくたびかはるちぎりなるらん

平時

赤坂のやとりもとめいれは日もくれぬ十五日の朝こゝを出

東関記

白たへの雪もうつまぬ赤坂や

澤菴和尚

名にさく花のつゝじならまじ

三河
藻塩草

ことのはに昔おほへてをりにあふ
名も赤坂のつゞじさくころ

同

紀行

赤坂の里に着つゞきの里を長沢と云ふ
雲はれて日はあか坂の里なれど
旅のゆくへの道のなかさば

小堀宗甫

御上洛
の記

寛永年中御上洛の時
草まくら露けき宿をたちいて
夜はほの／＼と赤坂のそら

源家光公

東海
紀行

赤坂にとまりぬうちとけぬられざりければ
ふしわびぬよみ／＼ごとのやどかりて
夢もむすばぬ草のまくらに

井上通女

紀行

赤坂のうまやにて
赤坂とき／＼つる里はもみぢにて

近衛関白基熙公

名所小鏡

夏の日御油から出て赤坂や
夕日かゞやく名にやありけん

はせを

傀儡子徒無礼儀
茅簷是近山林構
其中多女被人知
竹戸屢追水草移

中原廣俊

旅客來時心竊悦

行人過処眼相窺

歌心折柳是家産

業不採桑何土宜

宛轉娥眉殘月細

嬋妍蟬鬢暮雲垂

千年芳契誰夫婦

一夜宿縁忽別離

賣色丹州容忘醜

丹波國鹿野女容
白皆醜故云

得名赤坂口多髭

三河國赤坂地便女中有多
髭此者号口髭君云

施朱彩偏求婚

徵嬖幾祈神与祇

寛永五年於赤坂宿鷄旦偈

客舍坐成金玉樓

三光好是祝三州

江月和尚

傳聞東照生縁地

靄々韶光仰相攸

和前韻慶安四辛卯五月六日

赤坂村頭賣酒樓

容床既醉忘佗州

江雪和尚

家人相對傾尤瞻

正是老師投宿攸

赤坂古來声妓多

便思仲晦警黎過

山崎暗齋

彼哉千載大江氏

既溺倡家又出家

再遊紀行

三河
塩草

師長公
宮道山
紅葉遊
覧の圖



澄み秋
下りも
笑沖

想
中山美

御油より赤坂にゆく客亭いとにきわしくたちならひて家々の女と
も旅人を呼いれとむむる聲がしかましく小田の蛙の夕暮に啼心地
す

日 歸家
記

強呼旅客家々女
寓舍今宵何処好

粉面朱唇巧納交
共言有酒有嘉肴

井上通女

朝鮮人夜泊

朝鮮人來朝のとき当駅伊藤某の許に泊りけるが庭前の枯木を見て詩を賦す

明曆中朝鮮國上官於赤坂駅伊藤氏之亭

譽庭前枯木即作題壁上贈主人

君平乘世乘茲去

施作仙峯落此庭

最愛窓前春一色

瓊林珍樹雪中青

相

森 八幡宮
神明宮

当駅西の入口木下茶屋の向に鎮座有憶ふに当社は往古 太上天皇持統天皇のこと 当所宮道山行幸の
時の頓宮の跡にはあらぬ故當時当郡引馬野へ序に行幸ありしにその頓宮の跡を恐れて一
社を勸請して御所宮と称し奉ると老童子の統義考に見へたり又伊勢参宮名所図會に矢田村

八幡宮 桑名の町より二十町許西南矢田村に在俗に八幡社と云当所即天武天皇往昔皇后と俱に潜行ませし 又頓宮の跡へ勸
請なせし社なりとぞかれば餘國にも頓宮の跡へ八幡宮を勸請せしことあらん考ふべし当

所へ行幸は大室二年と續記に見ゆ年歴を考るに今世を去る事千百三十余年さて当社の棟札
始め二枚は文字磨滅して定かならず三枚目の棟札に寛和年中の年号見ゆ寛和より当今まで
年歴大概八百九十年許彼是替合するに当社は即ち 太上天皇頓宮の跡ならんかし亦相殿に
神明宮を祭れり是は往昔弘仁二年伊勢御遷宮の時 勅使より当社へ御鏡御奉納あり其を若
宮神明宮と祝ひ奉るとなん

○按るに弘仁三年にはありす正保四年九月十日とありて今年伊勢の神嘗祭御再興の時の事なり委しくは金沢氏藏書を
見るべし

宮道山

当山は赤坂駅より西南に当りて東西一里余りに立續きたる山を総云ふさて宮道の号の物に
見へしは旧事本記七ノ三に宮道別命と又景行紀に宮道別皇子又紹運録に景行天皇の皇子宮道
別命又古訓古事記八ノ五次建貝子王者宮道別又和名鈔宝飯郡宮道知美也又國內神名帳に正五位
下宮道天神宝飯郡に座す又群書類聚五ノ五雜部に左衛門尉宮道式光朝臣又拾芥抄に宮道朝臣
又源平盛衰記七ノアの太政大臣師長公当山の紅葉遊覽の事見へ又東鑑十六ノ六頼朝卿關東下向の
条に建久元年十二月十八日小熊十九日己亥入夜令宿宮路山中給又貞応海道記に宮路二村の
山中をはるかに過て云々又仁治紀行に矢はぎと云処をたちてみゆち山云々又貞原翁の吾妻

路の記に宮路山を今はたゞ山中とのみ云ふ昔 持統天皇行幸ならせ賜ひて頓宮ありし処な
れは宮路山と云ふとなん云々又三河藻塩草に云宮路山は宝飲郡西南に当りて高き山あり昔
は木立有て楓なと茂れり是紅葉の名所なり往古は長沢村関屋より入鳥屋ヶ根の城下を通り
嶽の城の麓に道あり是昔の海道なり云々又和漢三文図会楼に宮路山は在宝飲郡赤坂山不
甚高云々又渡辺氏の三河名所和歌集に宮路山は宝飲郡赤坂宿の上方の方に在又蘇爾雅に在
宝飲郡其餘松葉集類字名所補翼集名寄名所方角抄秋の寢覚等皆三河とせり憶ふに和名鈔に
宝飲郡宮路の郷名見へたれば往昔此江はすべて宮道郷にて今の嶽山赤坂宿南の嶽山を云ふより西へ立續きた
る山嶺亦東海路左右の山にかけて古くは宮路山と呼しならん坂宮道の号は太上天皇持統天皇当
山へ行幸ありしより起れる号にや又往古は嶽明神当山客人沢に鎮座在し由夫より起れる山
号にや其はいまだ詳にせず蓋古代は今の街道より南の方山中を通行爲しよし土人の口碑に
残れり今猶長沢村関屋より赤坂駅へ出る街道山中に一筋あり是則往古の海道なりとそ其は
雑部海道変革の条又当郡二見道の条なと合せ見るべしまた当山は往昔藤と紅葉の名所なる
よし歌辞を以て知るへくなん

後選
恋五

君があたり雲井に見つゝ宮方山
うち越へゆかん道もしらなく

あつまよりのほるとて参河国宮路山を十月つもごり過るに

讀人 爪知

もみぢまたさかりに見へければ

玉葉集
冬

嵐こそ吹きこざりけれみやぢ山
またもみぢばのちらでのこれる

菅原高標朝臣女

催馬楽

くつかはばちかひのほそしきをかへさし
はきてうはもえきてみやぢ通はん

右馬のかみの家にてみかほのかみのむまのはなわけせ
しによめる

家集

なにしおへはとほからぬとも宮方山
こへん手向のぬさにせよきみ

丸河内朝臣躬恒

夫木春

紫の雲と見つるはみやぢ山

なだかきふぢのさけるなりけり 増基法師

二十一日八橋をいでてゆくにいとよくはれたり山もとほ
き原野を分行ひるつかたになりてもみぢいとおほき山にむ
かいてゆく風につれなき所々くちはにそめかへてけりとき
は水とも立まじりてあをじのにしきを見る心地す人にと
へは宮路山と云ふ

十六夜
日記

時雨けり染る手入のはてはまた

もみちの錦色かはるまで

阿 佛 尼

此山までは昔みし心地するにころさへかわらぬば

待けりな昔もこへし宮路山

同

おなし時雨のめくりあふよを

山のすそ野にたけのある所にかやしの一見ゆるいかにして
なにのたよりにかくてすむらんと見ゆ

ぬしやそれ山のすそ野にやどしめて

同

あたりさびしき竹のひとむら

海道記

東路のおくはけふこそみやが山

くもりなはこそ雨はふるとも

師長公紅葉遊覽

妙音院太政大臣師長公尾張國井戸田へ配流の時配所の徒然慰めんとして此宮路山へ介け入賜ひ水々の紅葉を遊覽なし賜ひしとぞ此大臣の配流は治承三年の事にて此山へ來り賜ひし比は出家後の事ならん分脈系譜に治承三年十一月解官追却京洛外同年十二月十一日於配所尾張國出家法名理勞又一代要記に大政藤師長治承三年十一月十七日太政大臣出花洛於尾張國出家と見へたり亦源平盛衰記に治承三年入道四十二人の官職を止めて追籠らる云々

妙音院太政大臣師長公は三河國へとは被露ありけれとも奥には尾張國井戸田へ流罪とて都を出されけり又百練抄に治承三年十一月十七日被行除目太政大臣師長己以至干檢非違使信盛廿九人解官多是院中祇候の輩也此中大相國可追却關外之由被宣下同十八日前關白左遷太宰權帥前關白於路頭出家云々と見へたり

太上天皇行幸

此行幸は文武天皇帝二年にして持統天皇位をすへり賜ひ太上天皇になり給ひし時なり貝原先生あつま路の記にも此山へ行幸の由云へり其は宮路山の糸合せ見るへし統記大室二年九月の糸に癸未遣使伊賀伊勢美濃尾張五國營造行宮又丁酉(中略)鎮祭諸神為將幸三河國也又甲辰太上天皇幸三河國令諸國無出今年田租又同十一月丙子行至尾張國庚辰行至美濃國丁亥至伊賀國行所經過尾張美濃伊勢伊賀等國郡司及百姓叙位賜祿各有差戊子車駕至自三河免從駕騎士調と見へたり

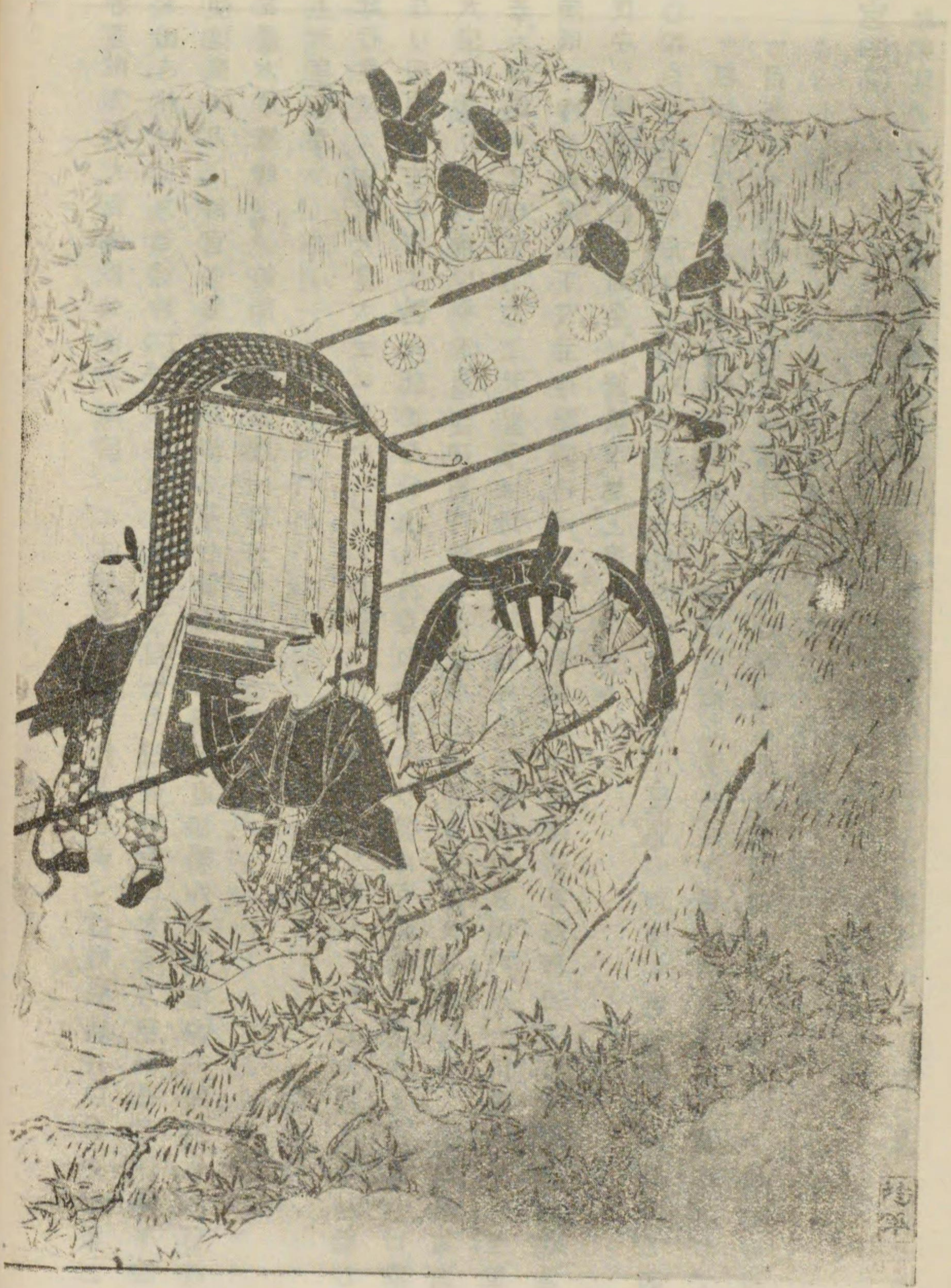
○按るに十月甲辰は十日に當り十一月丙子十二日に尾張に到まし庚辰十六日美濃乙酉二十一日伊勢丁亥二十三日伊賀戊子二十四日還御とあれば十月十日に當國へ着御として一月丙子十二日尾張に至りますとあれば當國に止まり居賜ひしは纔に三十日許の日数なるべし

頓宮旧跡

此頓宮の旧跡は嶽の西嶺に在土人二の丸の跡なりと云ふ可敬此山上に登り見るに二の丸の

持統天皇
吉道山
行幸乃園

沙野
ツラミ
小波蓋
為家卿



跡にあらず其は如何と云ふに分内最狭くして二ノ丸と謂ふへき備にあらず熟その形容を見るに山上より別に高きこと六尺余新に土を設て円形に築きし一堆の岡なり是は大槪 太上天皇行幸ませし頓宮の跡ならん貝原先生の東路の記に昔 持統天皇行幸ならせ賜ひて頓宮ありし所なれば宮路山と云ふとあり当山南海を直下に臨みて最勝景の処になん

丙辰
紀行

先王若_レ要_レ慰_レ民生_ヲ
遺翠翼_ヲ華_ヲ巡狩跡

定有_レ壺_ヲ嘗_レ簞_ヲ食_レ迎_テ
未聞行在頓宮名

林 道春

群盜蜂起

室平四郎と云ふ賊黨を結ひて當國の路駅に出て武威を振ひし由そは東鑑_{六卷十} 正治元年七月の条に十日庚子晴及晩參河國より飛脚參申云室平四郎重廣率若干強竊盜人等於當國_{東路} 武威武田謀計之間路次往反庶民爲之有煩不被_レ加_レ治罰者國中難_レ靜謐云々又七月十六日丙午安達藤九郎景盛爲使節進發三河國爲_レ糾斬重廣之横法景盛日頃頻以固_レ辭使節是若去春の頃自京師所_レ招下妓女愁片時別離之故欵云々而參河國既爲父奉行國者無_レ所干道避之旨有其沙汰遂以首途云々又云八月十八日戊寅陰安達藤九郎盛長自三河國歸參申云教日令_レ逗留彼國迴_レ遠慮分遣郎從等於方々_レ里搜_レ重廣横行所々兼以逐電之間依不知其行方歸參云々と

古道

安永八年安部長解の宮路山古道圖には長沢村の関屋と云ふより右に入て淨瑠璃_ノ姫の腰掛石

赤土坂なと云処を経て関川と云処へ出るとあり可敬云宮道山の峠に切通しと云ふ処ありて夫より西の方へ下る道は一条なれと東の方へ下る道は五条あり一は五本松_{此山中東の}の辺より道左にとりて下れば内山へ出る_{此内山は赤坂駅より少西にあり} 二は五本松の辺より木下と云ふ茶屋の西へ下る道あり三には五本松の辺より赤坂駅南裏峯続きに関川へ下る_{此道に車引と云あり} 道あり四には赤坂南裏なる麓の南面に道あり是又関川へ出る道なり五には嶽へ掛りて峯續きに國府の南裏痕樂と云処へ降る道あり右五条の道何れか是なることを知らずされと強て云はし五に云処の五本松より車引にかゝりて関川へ出る道是古道ならん車引なと云ふ名由縁あり氣なり抑此街道は千年代より六百年代までの街道と見ゆ延喜式に載る処當國の宿駅は鳥捕山綱渡津の三駅なり彼山綱より渡津へ掛る往還なりけん催馬樂にうはもとりきてみやちかよはん又玉葉集にみやちの山を十月つもごり過るにもみちまださかりに云々又躬恒朝臣家集に名にしおへはとほからね_すとも宮路山こへん手向のぬさにせよ君又十六夜日記に待けりな昔もこへし宮路山云々又仁治紀行にやはきと云処を出てみやち山こへ過るほとに云々など見ゆれば其頃は今の街道より南なる山中を越し梯見ゆ亦承久の頃に至ては今の街道を通りし欵又東海路長沢村十王堂より南に折れて宮路山中へ掛りし欵未だ詳ならず又永祿の頃に至りても山中の道を通りせしと見へて武徳集成_{五丁} 神君三千餘兵にて牛窪に働かせ賜ふ歸路長沢を過ぎ賜ふ敵吾を遮らん欵山中の嶮阻殊に隘路なればとて総軍を二つに分て一手は山下の本道に掛り一手は御旗本にて山の南を歴て通り賜ふ云々

五本松

赤坂より宮道山に登るにふもとより五六町登りて此松あり

烏帽子岩

赤坂より宮道山に登るに麓より拾町許登りて右の方に見ゆ

切通

安永八年安部長解の宮道山古道図に宮路山を越て切通しあり此所赤土の坂なり故に赤坂の名ありなり未だ詳にせず

淨瑠璃姫懸石

宮路山古道図に長沢村関屋と云より右に折れて淨瑠璃姫の懸腰石あり此姫は矢作長者の娘にて源義経奥州下向の時借老の契り淺からず終恋慕の情止み難く河水に投して死けるとも又鳳來寺笹谷に栖みけるとも其説いまた詳らかならずこの姫のこと碧海郡矢作の糸を見るへし

客人澤

宮道山中に在長沢村関屋より廿町許過て左の方に松樹生立し所を云嶽明神往古此所に鎮座在しとぞ其後今の処に遷坐ありしは四百年前の事なるよし神主金沢氏言へり今嶽明神の相殿に客人神在とん

嶽大明神

神名帳集説に云國內神名帳に正五位下宮道天神は室飲郡に坐赤坂産土神嶽明神例祭七月二十日神主金沢氏は宮路山の続きにタケノゼウと云山あり其嶺に在社説に云右宮路大明神中嶽大明神右客人大明神三座を合殿に祭ると云へれば宮路天神は即此社なるへしと見へたり

嶽城

赤坂駅南の高山を云二葉松に云或云古代草壁皇子皇居の地なりと云 天武天皇の皇子なり大友の乱に遠州鹿沼に赴き信州へ移るまた三河宮路山に御座を移され軍勢を催と云又世諺并畧トにも草壁親王行坊所と見ゆ又加茂郡射徳神社の縁起に 天武天皇壬申の歳の御軍に勢州桑名に行幸の時射徳に御社を定めて祀り始め賜へる云々なとあれば草壁皇子も由縁ありげに見ゆれと 天武記に白鳳元年六月遣山背部小田安計連阿加布菴東海道軍云々此時草壁皇子は 天武天皇に従ひ奉りて桑名の郡家におりと記に見へて三河に來り賜ひし事を載せず最不審になん

三河堤には草鹿砦公宣卿の居したまふゆへ曰嶽城と云へり

宮路野

其處未詳

夫木 家集三河

うちひさすみゆちのへのあさがすみ

つかへし道をなとへだつらん

民部卿為家

宮路池

藻塩草秋の寢覚等当国とせり蘇爾雅に在宝飲郡とあり所未詳

夫木 水鳥のうきて心のまとふかな
寸三

宮路の池にとしはふぬれど

紀朝臣貫之

三ッ葉楓

宮路山の楓は一葉にとかり三ッ出て貝原翁の大和本草に云へる小楓におなじ当山紅葉の名所なること歌詞に見へたれば此に除くされど昔紅葉をよめるは楓樹にかぎらず廣く諸木の紅葉を讀しと見ゆ

藤の花

宮道山の藤花は釈増基の歌に見へて九百年代より名高き事は着るし沢に藤の棚と云ふ処あり往昔藤花の競ひ咲し処ならん

漬亀

宮路山にあり樵者稀に見ることありとそ和漢三文函會に云山海経に云狂水は西方伊水の中に注ぐ三足亀多と見へたり

古屋敷

二葉松に云或今正法寺境内松平備中守久親長沢組衆とあり三河堤に云按するに松平太郎左工門尉泰親の末子和泉守信光公の弟なり赤坂堀江に住とあり

長澤十二家

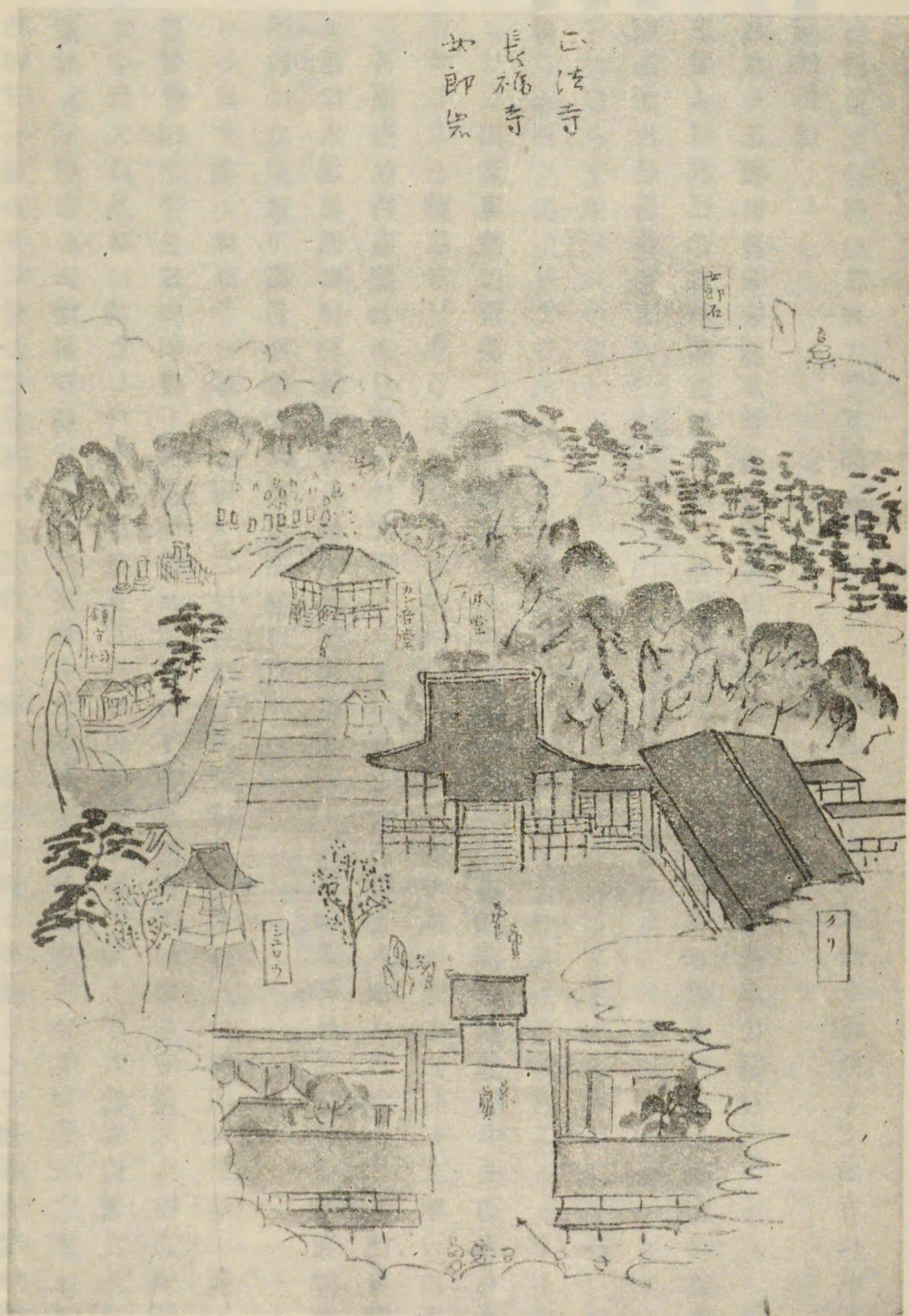
三河雀に云長沢十二家松平右京松平左京松平彦四郎松平伊賀守松平忠兵衛松平彦右工門松平越中守松平基三郎小野淺之助矢部織部近藤兵部山田忠兵衛越後糸魚川城主長門守とも云三河堤に云ふこの忠兵衛は後ち長門守に仕ふ是は赤坂に御住居の御一族なりと見へたり
三頭山妙壽院長福寺

赤坂駅南側に在寺領二石五斗浄土宗鎮西派当郡御津庄大恩寺末
十 番

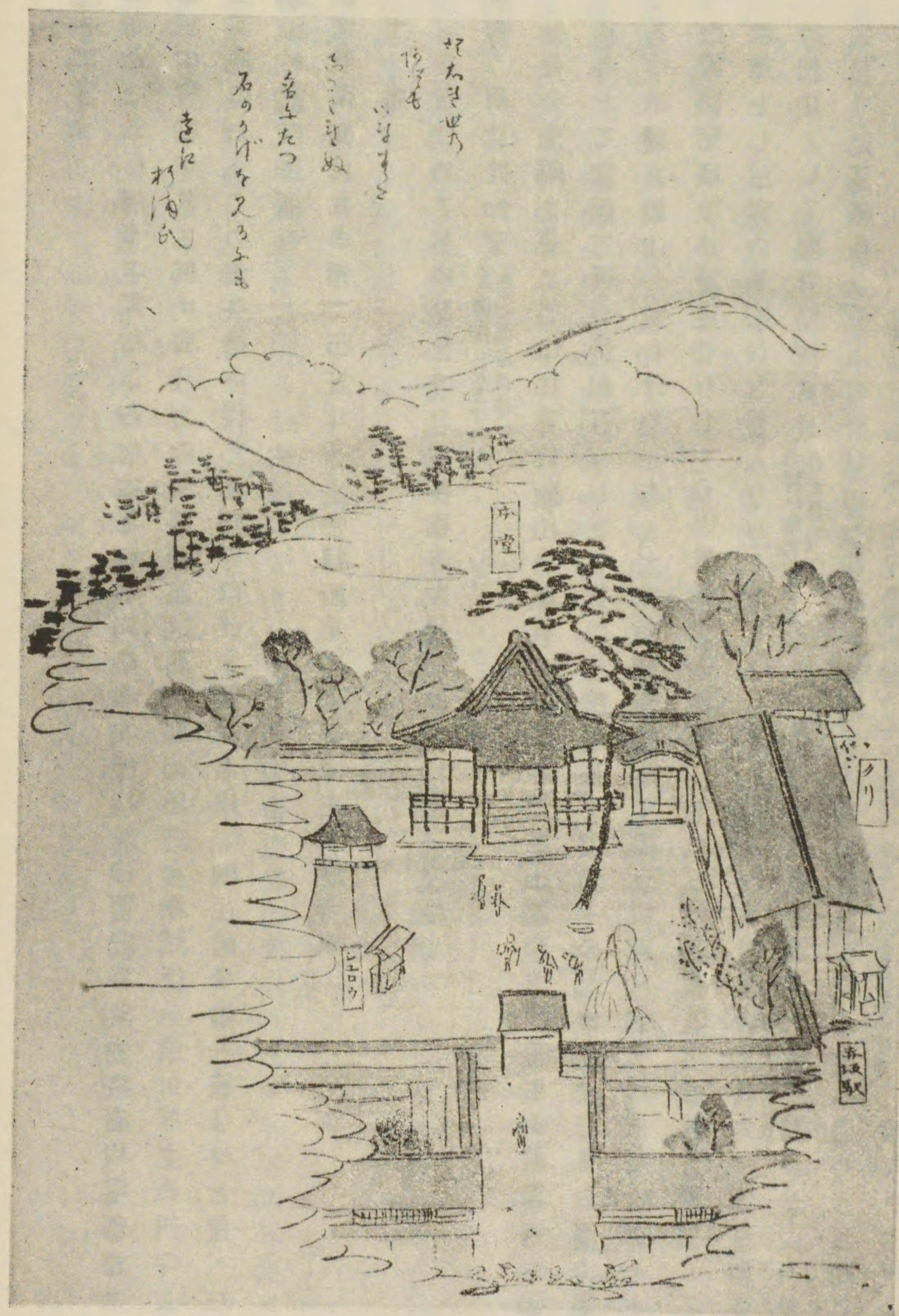
夜をこめてあゆみをはこぶ長福寺大悲のひかり出て赤坂
本尊 阿弥陀如来 立像長三尺五寸 惠心僧都の作

當寺の盪觸を尋ぬるに往昔比叡山の輪番寺にして煙巖山鳳來寺陀羅尼山財賀寺三頭山長福寺とて當國三箇の梵刹なりしと之殊に当院は其か中第一の大伽藍にして三箇の隨一なるに依即三頭山と稱しけるとなん大学頭妙壽院小学頭立松院を始め其余房舎三十余箇所台家顯密兩派の靈地なりしとかや其後惠心僧都長五尺五寸正觀音の尊体を彫刻して是を本尊とし台家の法燈いと盛んなりし然して六十六代 一条天皇の御代大江定基朝臣當國の刺史として國府に住せり 当郡八幡村舟山の処 合せ見るべし 爰に赤坂の長者宮路弥太郎長富福の女に力壽姫と云あり定基朝臣と巫山の契り細かなりしを朝臣任畢て歸京の別を怨み自ら舌を断て黄泉の旅に赴きしかば 力壽姫の死病に依て死ともあり当郡九壽山舌根寺の条又八幡村舟山の処 合せ見るべし 此には當寺の縁起に隨ふ 彼朝臣は更らにも

正法寺
長福寺
女即宗



打木寺
石のうけを又るふま
まは
打木氏



云はず長福ふかく憂ひて是か爲に菩提心を発し眞遠法師を開基として僧房を営み寺領を寄付して復古の法燈再び輝ける当時長福寺を改称して長富寺と称しけるとぞ然して承久年中兵火の爲めに焼亡しけるを其後五百余年の星霜を経て浄土宗大雲寺曉善上人の弟子善譽慶印一宇を茲に創建して長福寺と亦改称す本尊阿弥陀如来を安置し今猶法燈明かりと云々委くは当寺の縁起に見へたり当時の旧地は当駅東の入口関川の東南に在しとそ門前に立る処の標名今畑中に在り

因に云渥美郡和地村醫福寺大般若經奥書に文明十六年甲辰三月三日修福檀那河合信光長福寺住持看聖とあり憶ふに文明十六年は今を去ること大概三百六十年其比当院存在せしこと顯然なり然る則は承久年中元年より凡六百二十余年兵燹の爲に焼亡せしも文明以前造営なりしに又廢院に及ひしが其を亦大永二年元年より凡三百廿余年彼慶印法師創建せしものならん

鐘樓

鎮守

興院正觀世音菩薩

本堂より辰己の方小高き処に在り熊野谷と云ふとぞ立像長五尺五寸惠心僧都の作なり御前立も正觀世音を安置す当時の旧地にも熊野谷と云ふところ今にあり
寂照法師像

右觀音堂の内に在大江定基朝臣入道して寂照と云ふ自ら木像を彫刻して当寺に收む此法

女郎石

師の傳当郡舟山の処を見るべし

當寺後の山に在長四尺七八寸厚三寸許巾尺八九寸許に見ゆ又傍に五輪の石塔あり二葉松に云長福寺境内に力主姫石塔あり世に女郎石と云ふ又力壽石とも執念石とも云とぞ林自見の雜說裏話上ノ下に力壽石大江定基愛妾力壽が化とあり亦渡辺政香の三河雜錄に執念石と云ふ其故なきにあらざり里民此石碑を掘る事数度なり動くと虽も取り得ず享保年中土人此石を掘かりけるが日夕陽にかたむきぬれば明日を期して止まりけるに其夜発頭の土人二人まで瘧疾をうけて脳乱す尔來諸人これを掘らすとぞ当寺縁起に力壽が舌根を陀羅尼山におさめ残骨を爰におさむ云々

情郎石

西遊 江公踏海向吳門 棄妾精誠千古存
紀行 霜露不侵苔鮮色 点然猶似未銷魂 熊坂台州

力壽が塚にて

與羽笠 淡雪の白粉ちるやまつのかせ 六名 呂 楸

口髭君

当駅往昔は名妓ありしと見へて貞心海道記に大江定基朝臣当駅の遊君の爲に出家せしこと見へまた本朝無題詩に赤坂の傀儡女口髭者多しなど見ゆ斯かれは八百年前当駅に名妓のあ

リしことを知るべし

正法寺

当駅南側にあり境内除地東本願寺派入

本尊阿弥陀如来

立像長二尺二寸安阿弥作

満卷和尚廟所

當寺は往昔弘仁八年 嵯峨天皇の 勅願に依りて創建する処の靈場なり傳燈絶さること此千有余年實に尊き梵刹になん然して文曆年中親鸞聖人伊豆の國府を立て箱根山金剛王院に逗留の時自影を彫刻して頓て當院に立寄けるとぞ當時當寺の範曰法師と云へるは頼朝卿の忠臣なりしとなん此範曰法師と箱根山金剛王院の別當とは交り深かりけん彼山より當院に來りし古記に見ゆ憶ふに往古は比叡が高野の末山なりしを此に至りて一向門徒に改宗せしと見へたり

建久二年箱根山金剛王院の古記を写して當院へおくらる其記に云 元正天皇養老歲中洛邑有沙弥智仁不知其氏口嫌葷腥身辞錦綉父母大奇之年李歲入秋門至満廿而受具剃髮日課方廣經誦一万余故林万卷高野天王天平勝宝元年己丑万卷詣常州鹿島靈社建神宮寺經八秋蒙鹿島神勅移箱根山鹿島明神箱根権現之被蒙神勅事数多詔宣未委仕 嵯峨天皇弘仁七年丙申万卷聖代祈願之邑速達天聽即應參朝勅而半途至三州十月廿四

熊野権現

日九十七歳示寂弘仁八年十月廿四日 九五有奇夢万卷詔曰我是文殊而化生縁無尽濟度有情群口而長奉衛護室祚帝夢醒有勅言令築靈場赤坂 三河雀に云何の頃にや三河に熊野山と称し那智は夏山村新宮は國府村にあり熊野谷は赤坂に在りと見へたり

関河

当駅東の入口を云前の長沢村関屋の処に挙る如く土人傳へ云 太上天皇宮道山行幸のとき西は関屋東は当所に関を居て皇居を警固なしけるとぞ

玄玉集 関河やおりえてさける郊の花に 法 師
み遊きめつらしのへのふるみち
文安十一年毎日一首中
夫 木 せきがはのなかれのすへのさとつゞき
夏 一 水をたよりのさなへとるなり 民部卿為家

萩村城跡

赤坂より志里許左の方上萩村字シロノコシと云処にあり往昔熱田大宮司の流派当村に居住せしと見へて分脈系譜に 武智麻呂の裔孫季兼より八代の遠孫大宮司萩左京亮忠廣と見へ又清羽子の厚田道記に萩大宮司は按るに季範の男範忠の一男忠季の孫大宮司忠成は大江廣元

の男血脈を以養子とす其子刑部少輔忠氏の子孫萩の大宮司云々又群書類從五百 永享御番帳
に三荆又次郎又萩小太郎萩弥五郎と見へ又同書五百 康正二年造内裏段茂並に國役引付に三
百貫文三荆掃部介殿三河國荒井並
萩分枝文と見へ又二葉松に清家右馬允嘉吉二年の棟札あり次に内藤十
郎市次與平周防守是與平七族七人の内と見へ又與平家畧譜にも與平周防守萩村居住とあり
林氏系譜に林孫八郎光正同國萩村の合戦に敵は與平美作守と戦ひ勝利を得云々又天正年中
諸士住居の記に當村には内藤法善同息十郎市小野新平大森与八郎と見へたりさて大宮司の
ことは設楽郡野田大宮司のところ照し見るべし

○東海路赤坂駅より左の方云々とするか西四郡とも海道より左右を云へり
身延鏡に云波木井三河守義與同淨大永七丁亥年十二月廿三日逝去とあり

萩山

御集

野へそむる雁の涙は色もなし
物おもふ露の萩の里には

後鳥羽天皇

為忠朝臣家三河國名所歌合

夫木

いろ／＼のにしきとぞ見る萩の山
しからむしかや秋はたつらん

藤原朝臣道隆

同雑

白露は萩の山辺におきつれど
すゝきくれば玉とこそしれ

然法師

同 ちりぬへき花のをしさにいつとなく
をりもやられぬ萩の山かな

中納言盛忠卿

虎岳山竜源寺

同村に在寺領十石禪曹洞派開山周興和尚尾州緒川乾坤院末
本尊中釈伽如來右弥勒菩薩
左阿彌陀如來各長一尺八寸許

当寺は在昔伊豆國住人河津次郎祐親の次男伊東九郎祐清の末子六郎某時変によりて当山
に來りて蟄居す夫れより萩原を以て姓とす是則當時の開基也当比は萩山寺又萩原寺とも
謂しとぞ六郎某の遠孫或は伊東或は鈴木或は平野と分流して今に当寺の檀越なり其後明
応年中周興和尚尾州より來り萩原古院を再興して此に住す彼和尚は乾坤院二世逆翁宗順
和尚に業を受け法を三世芝岡宗田和尚に受くと当寺の縁起に見へたり

鐘樓
鎮守

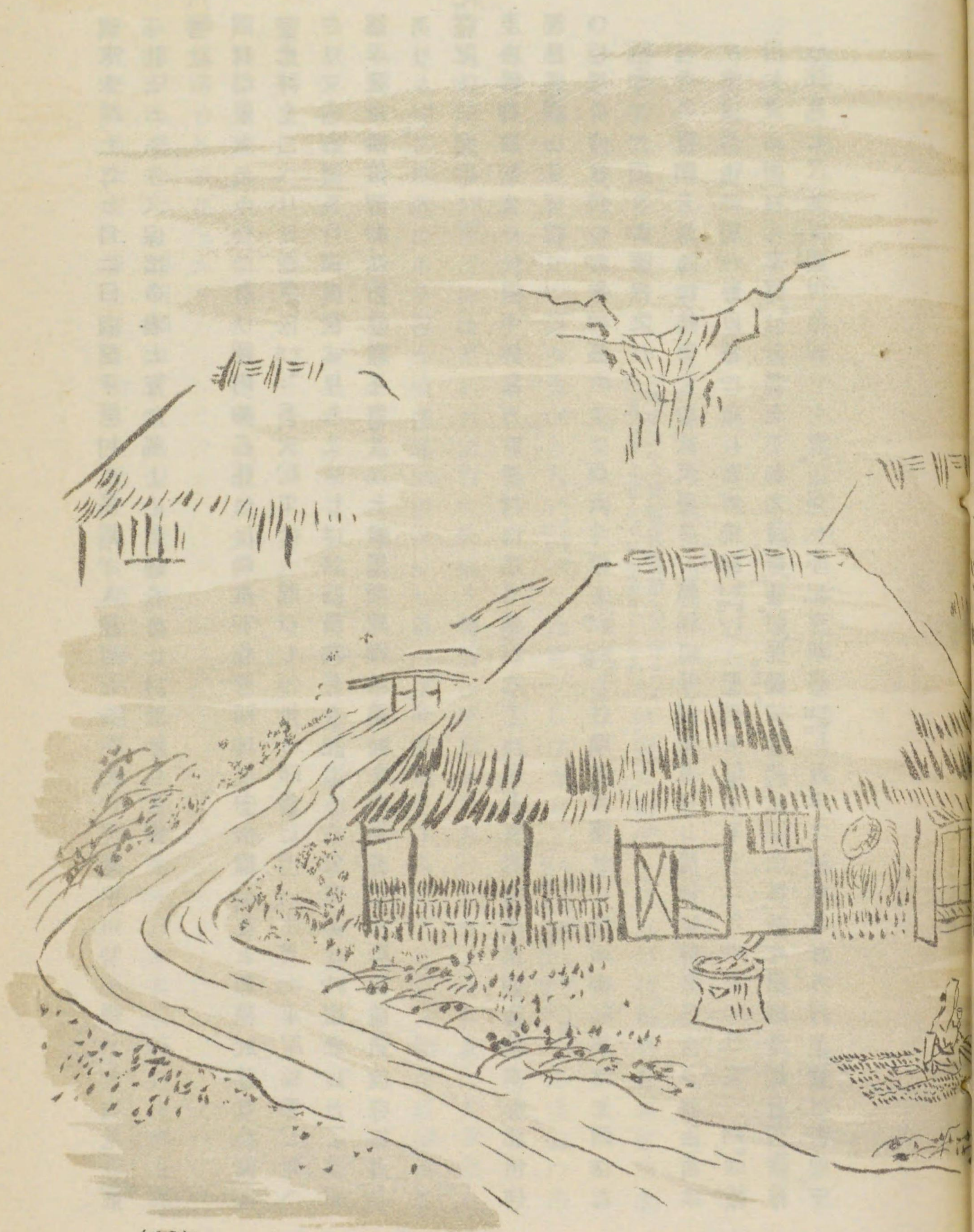
古屋敷

平尾村にあり御油駅より二十町ばかり北にあり二葉松に云ふ平野氏片桐氏また永祿五年の
比は當村長沢家の領地なりしこと稲束明神のところを合せ見るべし

糠川

同村にあり林氏系譜に云ふ林光正法名永壽の長男林孫八郎正次初名楠之助は 大神君の御

萩の里



あまのついでに
 さくらをよめ
 をれはこゝろりや
 衣をまくりまわす
 ちかみのり

旗本永祿七年二月二日同國平尾村小馬場が入糠川と云ふ処にて敵甲州勢山縣が大物見近藤平助と云ふ牛久保出の者と互に馬上にて鎗を合せ討取けると擧ぐ

同村稻束と云ふ処にあり國內神名帳に従四位下稻束明神は室歛郡に在とあり此社ならんと宣光神主云へり武徳集成十五長沢松平侯へ賜ひし領地の印章に百八十貫文平尾稻束と見へたり又名古屋人片桐儀臣よりおこせしは諸國貢物等を記し古字本より抄出せしとて三河國平尾社同雉鯉鮒社藤原家子寄進以上惣富門院御祈禱所永十五年八月日前筑後守益直とありしとぞ

陀羅尼山財賀寺

東海路御油駅より一里半許左方財賀村に在寺領百六十二石眞言古義院辨觀音院本寺紀州伊都郡高野山平等院

○梅園の寺社鏡に御朱印高六十一石六斗献上卷不敬住職弟子讓り○住職御礼無之年頭御礼回御次一回○御暇無之

当寺の権輿を尋るに往古 聖武天皇の 勅願にて創業ありし梵刹にはあらざる故往昔は本堂は当山の頂ハ形の峯に在しとぞ統記十三 聖武天皇天平十二年の条に己亥 勅四畿内七道諸國曰比來緣筑紫境有不軌之臣命軍討罪願依聖祐欲安百姓故今國別造觀音菩薩像一軀高七尺並寫觀世音經一十卷と見へ亦元亨釈書十三天平十有六年秋九月造觀世音像干

諸州とあり授するに天平十二年より千百余年の星霜を経たり其後八百年代長保年中の頃に至りて當國の刺史三河守大江定基朝臣愛妾力壽姫の舌を以て當寺の前なる孤峯に埋め力壽山舌根寺と稱す當時當山の靈場たるをさとるべし

然して右源二位賴朝御安達藤九郎盛長當國七御堂を造立せし時梶原景時奉行して當山本堂を建ると三河雀に見ゆ又刪補には蒲冠者兼頼三河守たりし時藤九郎を監として造立せしとあり所謂七御堂とは五井村長泉寺丹野の御堂吉良金蓮寺雲谷寺財賀寺鳳來寺阿弥陀堂赤岩堂なりと三河堤に見へたり其後文明四年再建ありしと寺記に見ゆ當世今宮今の堂地へ遷堂なしけるとぞ今の堂地へ遷堂三度目なりと寺記に見ゆ 極當山に古

寫の大般若經を所持す與書に當國八名郡下墨村右工門太夫茂鎮永十一年寄附之とあり毎歲小坂井村兎足神社祭礼の前日に此經を轉讀なす事例格たりとなん三河雀に云永祿七年三州一の宮に本多百介信俊菴城危かりし時 東照神祖三千人にて一の宮御後詰御勝利世御飯陣の時今川勢御跡を慕んかと御思慮深く千両村より財賀村へ横道を押赤坂山手長沢へ出賜是を一の宮御退口と申せ當寺僧中御祈念御嚮導は此時財賀村御寄附也と見へたり

斯る千歳の古梵刹今に法燈明に読經の聲絶ざることひとへに觀音大士の廣大無辺の利益に依るものならん
可敬云惜むべし賴朝卿の建立ありし堂は再建して古昔の姿を失ふされと當時仁王門を再建せざるは実に幸と云ふべし此門まさに賴朝卿の建賜ひしならん

可敬云源二位頼朝卿寄附ありし本園なる七御堂は或は梶原源太奉行せしとも又藤九郎盛長なりとも云されど財賀寺の奉行は梶原氏ならん近頃聞くに財賀寺農家に大小の刀剣を所持すとの由縁を聞くに往昔梶原氏当村に來り農家の娘に忍ひあひし其別れに望みて彼刀剣を賜ひしとぞ其こしうへ奥に鎌倉時代の品なりしと予知己かたれり殊に梶原自筆の書も相添ありとぞいまだ実見はせされと実事と思ふことあり行て見るへし

本尊千手觀世音

立像長六尺余行基菩薩の作即当國三十三所第八番詠歌に

財賀寺の千手のちかひたのもしとなへてのぼるだらに山かな

本堂

堂地を今宮と云ふ当國七御堂の一也惜むへし新に造立して古の姿を失ふ南面に向ふて山の中復に在り

鐘樓

本堂の傍に在

廿三所石佛

鐘樓堂の傍に在り

山神詞

鐘樓堂の傍に在

東照宮社

石塔

弘法堂の傍に在

弘法大師堂

本堂の南に在

天神詞

本堂乾の方に在

白山権現

本堂乾の方に在

鎮守八所権現祠

本堂乾の方に在棟札に云奉造立社頭一宇大檀那牧野古白明應四乙卯七月十日本願舜成阿闍梨鍛治太郎左衛門則正大工左衛門七郎助光とあり

稻荷祠

本堂乾の方に在

護摩堂

本堂より西の方玄関の傍に在

厨方丈

本堂より西の方に在

辨財天祠

護摩堂の傍に在

仁王門

麓に在て南面に向ふ此門は往昔右大將頼朝御造立なし賜ひしか其形容鎌倉時代の備見ゆ
塔頭福泉坊

仁王門の傍に在

極楽寺旧跡

当山の峰に多光山極楽寺の旧跡ありと三河堤に云へり新家千足云賤賀寺の僧に問ふに峯の旧跡は当寺の跡にて極楽寺の旧跡は山下にて今千両村の山なりと云へりされと彼寺は当国風土記に出て八名郡極楽寺とす斯れは風土記に出づる極楽寺にはあらて別に同名の寺のありしと見ゆ

田祭

田祭は毎歳正月五日賤賀村中の者観音堂に於て是を行ふ其形容祠を司る者一人又田俊一人田夫三人太鼓を打つ者一人樽を携ふる者一人饅者一人兜木を以て造る行を負者一人燿燿をすする者一人牛を驅る者一人其具は木を鋳て耜となし藁を結て笠とし木の葉を苗に象り素衣を藁とし既に太鼓を撃響をなして後に三面に列り役夫耜を杖とし藁を肩にかけてうたふ其歌に曰

善 哉 作 田 作 前 田 善 哉 自 前 田 入
ヨウシンヤ タラツウクル カドタンラツウクル ヨウシンヤ カドタンヨリ イリマン
速 田 善 哉 所 租 善 哉 善 哉 桑 麻 奥 種
スルトホモニ ヨウシンヤ ユクトコロ ヨウシンヤ ヨウシンヤ クハサウノコダン
滋 善 哉 南 手 麻 麻 藁 可 藏 善 哉 善 哉 田 衣 藁 可
子ラヒロメ ヨウシンヤ マイモマイ マイモキヌウンナ ヨウシンヤ タゴロモニキヌ
織 善 哉 陳 銀 壺 善 哉 善 哉 水 刺 水 俱
ウンナ ヨウシンヤ シロカネノッポヲナラベ ヨウシンヤ ミヅクウメハ ミヅモツト
ウモニ ヨウシンヤ トミゾアルンナ

色々所爲ありて又

下 春 田 稻 苗 其 葉 摘 入 手 手 話 社
ハルタニヲリルナラ トウミヤウサノハラ シマウテニツミレテノ ミヤヘマイルヨノ
自 壟 上 者 裏 田 稻 苗 彼 面 所 滋 蔓
ルスモトヨリモ ウラヲミヤレバノ トウミヤウカツラノナ 子ザストコロノ

猶祝言所爲種々あれど畧す

○按るに田遊祭は砥鹿社には正月三日晚鬼足神社には正月七日ありて古雅なる祭なり委くは其条に云ふへし



財賀ち田並り物

力壽山舌根廢寺

敗賀寺より南の方に當りて孤立せし山あり即舌根寺の旧地なり往昔大江定基朝臣愛妾力壽
姫に別れし時愛情ゆるかたなく表儀なども執行はすをりしが文殊菩薩の夢想の靈告を蒙り
則力壽が舌根を以て敗賀寺の境内に至り聳立せる孤山の頂に彼舌根を埋め且力壽が在世信
仰せし文殊の尊像を其上に安置し又其傍に道場を創立して力壽山舌根寺と号す其寺に弥陀
の尊像を安置して彼力壽が菩提を祈りけるとなん猶委しくは当山縁起に見へたり又八幡舟
山の処合せ見るへし

力壽姫の碑

敗賀寺より南の方孤立せし山の麓とに在碑の長凡四尺五寸巾式尺許になん

力壽者三州赤坂邑長福氏某之女也色美善歌舞刺史大江定基取為妾甚愛之一旦罹病死矣定基
悲哀痛哭無意埋葬茫然七日而夢中有文殊大士之告因乃截力壽之舌以登陀羅尼山峯而埋其舌
造樓其所而安置文殊之像且建一寺而樓之文殊樓寺名舌根寺峯名力壽山定基遂登獻山為僧
名寂照業成林中通大師長保中西飛錫宋而從南胡智礼師而學々增進宋大臣丁晋公尊信之遂留
住杭州吳門寺名高異域宋景祐元年寂焉樓寺之始主距今七百餘歲其樓寺皆毀亡失而今之棟
者小堂也己而現住祖如者即余弟世哀其衰瘵而後亡遂無知者而清書之石以傳不朽因作銘以
之銘曰

舌与樓寺朽矣唯不朽者名也力壽何其大矣永斯遺哀情也寂照亦已逝矣長斯慈月明也

安永五丙申秋七月望

豐後州岡臣故近侍隊長

加治光輔 □ □ 志

三河州陀羅尼山敗賀寺現住

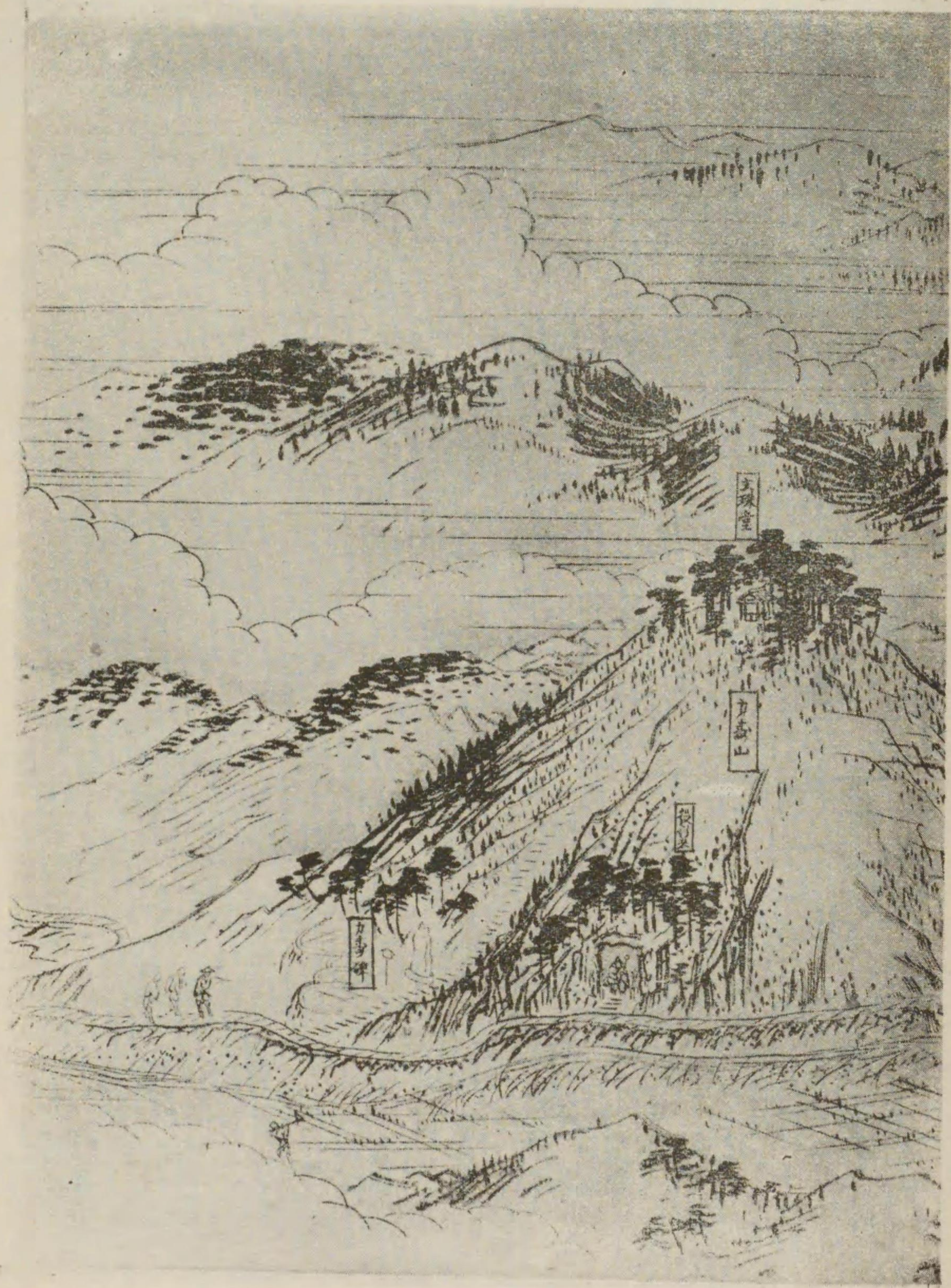
權大僧都傳燈大阿闍黎法師 祖如自筆以植

御油驛

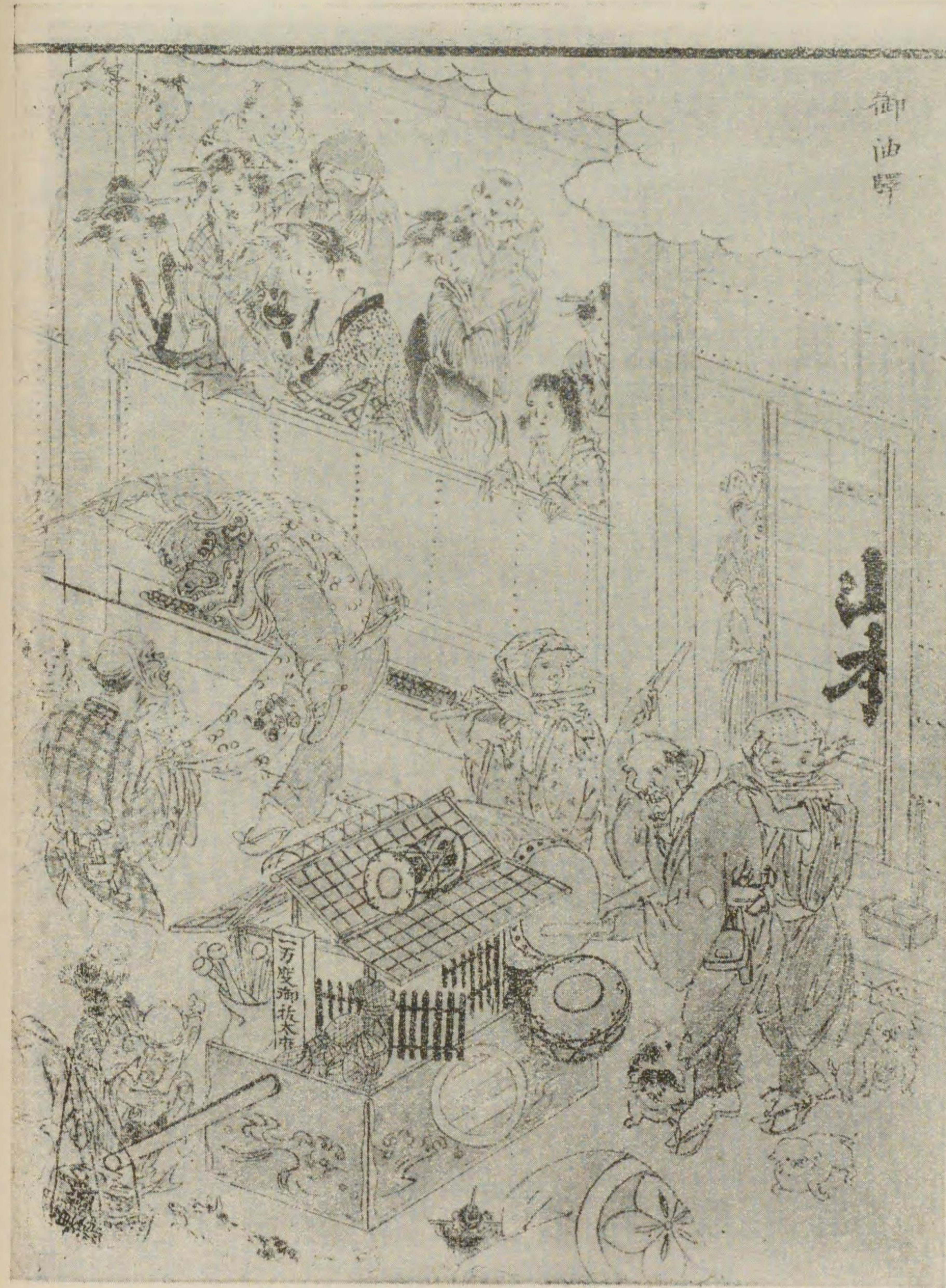
吉田へ里 半四丁 当駅は東海路の中西赤坂駅を去事十六町又東国府を距事十町餘り其中間民家連々立
続きて人家瓦を並へ軒を接へて左右に列居す然て關東の道者遠州懸川駅より別れて一は秋
葉山亦鳳來寺又豊川へ掛り一は浜松新居吉田へかゝる岐道の旅人当駅に於て出會す故に朝
に別離の酒宴を設くるあれば暮に會合の壽宴を開くありて其繁昌なる事云ふ計りなし抑当
所は往昔中五井と呼しが当郡同名の村三箇所あり所謂上五井中五井下五井の三邑なり然る
に乱雜するを以上五井の上を除きて五井と稱し中五井改名して御油と云下五井は今に以同
稱す世諺年畧ニテニに往昔当所より草壁親王行坊所へ油を獻統義考には持統天皇 行在所とあり故に後代駅号
とすと見へたれと如何あらん予は前説に隨ふ三河雀及米山の諸國里人談には油を禁中に奉
るとあり其油造家吉田へ居を移すと見へたり

○慈雲山觀音寺 千手觀音行基作

○九番へ御油なはて二筋にたのみ觀世音救この度を助け玉へと



貝賀寺
観音堂
力壽山の



東關記

あふごいつと定めなけれどさためあり

沢菴和尚

小堀宗甫紀行

五位と云ふ里にいたる東路に名おほけれどかくくらの高き里の名はなしといへは又ある人のいふ鳥にも似たる里の名かなといろくにおかしきことども下ひとのいふを聞てあか坂の里に着く

御油に着く本名五井と書くよしなれば五つの井やあると尋ぬるに取ても村ぬ事のやうに所の人不審がる然らば井田方里司馬法に依て名付るものかと思へは又五井の地に当らずさらば名佐伊古橋の下行水流の古事を以て分別替て論して見ん抑赤坂とは昔時遊女の紅のこ染の小袖うへにきし光りかやく名なるへし又五井とはいつもはまりといふ事ならん人を迷はす赤坂狐と云ふ古語にもかなふべし御油と書替たるは遊君の爲に賣弘る油屋の看板より

然らしむる欵其証據にはかけまの里のまへに繩手なるを以て知るべしまことに海陸千里をへだつと雖も情欲氣象を同ふする理りなり只遊里の縁は有なは今さなから比丘尼の化物に毛のはへたるがごとし

東行説話

遊女とは赤さかさまに偽りに今の体とは

從三位泰邦卿

御油なされませ

遠夫塚

当駅と赤坂の間並に松樹の南半町許にあり由縁未だ詳ならず

主計殿墓

同所並松樹の傍竹藪の中に在重松村城主主計と号す此人欵と三河堤に見ゆ土人カズヘドと云ふ

椿屋敷

当駅にあり統叢考に云ふ御油椿屋敷と云処あり往昔油を禁中に献しけるとなん揆るに持統天皇の行在所へ献せしならん其例にや享保年中まで当國吉田のものなりとて京師に居て禁中へ油を献せしとぞ前の当駅の条照見るべし

招賢山東林寺

当駅右側に在黒印五石浄土宗面山派本寺額田郡山中村法藏寺關山

本尊阿弥陀如来

立像高三尺二寸淨瑠璃姫念誦佛と云

鐘樓

鎮守

古城跡

二葉松に云山下源助林孫八始め長澤組衆後 神君へ仕官とあり林氏系圖に云大職冠鎌足公
十代遠孫從五位下加賀介忠頼是林富樫齋藤氏の祖なり夫れよりまた十四代の後孫祐石五郎
三光朝 後林園天皇永享の末紀州本宮より三州西郡蒲形へ来る文安元年亦同國御油へ移る
光朝の孫林孫八郎光衡法名淨空今川義元の旗本御油屋敷城イハノ屋敷に住居す櫓上に取立る其子林
次郎兵衛光清法名道清御油白鳥大村下条氏幡五ヶ所を領し今川家に属す永禄三年今川義元
桶狭間討死の後 神祖に從ふ其子林孫八郎光政法名永壽当所に於て討死 当所より東北の方モチキと云
外に墓あり御油どのの上の
日記慶長三年正月十九日はやし孫八郎
やくしんへ御代官まいり云々 其子孫今当駅に存せり猶林氏墳墓の条を合せ見るべし

林氏墓碑

林道清の石碑同駅下町裏に在今川義元の麾下林次郎兵衛道清の石碑なり法名大極院岩相道
清居士又林道定の石碑同所に在林氏系譜に云林孫八郎永壽が次男林孫右工門入道道貞法名
可樂又林正次は同駅栗毛山ホに在林氏普譜に云林孫八郎永壽の長男林孫八郎正次初名楠之助
法名天学院雲誉今西居士元和九癸亥歳二月廿二日七十七歳にて病死 大神君に奉仕し当所

に居住奉祿父と回しまた林三郎左工門墓同所に在林氏系譜に云林三郎左衛門法名法樹院林
空叡西居士元禄十四辛巳歳五月廿二日行年七十歳にして病死又林宗直墓林氏系譜に云ふ
林茂右衛門宗直法名夏月宗隣居士正徳二壬辰五月六日法名光樹院

遠見山

御油橋より右の方の山なり林氏系譜に云林道清長男孫八郎永壽父道清に知行居屋敷替るこ
となし 大神君孫八郎に東三河の御洗手を 仰付らる孫八郎常に同所の高山に遠見の者を
附置岡崎まで行程四里半のうちに鐘を九つ釣し置蓋敵の寄るを見る時は彼鐘をつきて岡崎
へ知らせ奉る是に依て数度御勝利になりたまひぬとぞ土人のいま遠見山と称すとぞ

七ツ塚

同駅東の入口茶屋町の右裏にあり田縁いまた詳かならず

御油橋

同駅東の入口なり此川水源宮路山より出て長沢村を逕流し赤坂御油両駅の北裏を流れ東海
路をこゝに西南に折て梅藪村御馬との間に至て海に入此川惣名音羽川と云ふ扱当所にては
幾瀬川と云ふよし刪補松に見へ又佐脇村に至りて御所川と云ふ林氏系譜には眞砂川と云ふ
と見へたり織田眞記巻織田信長公甲州平均の歸路の条に天正十年壬午夏四月十八日夙出吉
田中暑造亭及浴室於御油亭前架橋最容美麗陳珍勸酒云々と見ゆ其比当所に橋を架し初めた
ると見へたり又刪補松には当橋をマサイコ橋と云ふ内見へ亦白雪の続柳蔭には河原橋とあ

欠間^{カケマ}立^リ場

同駅東の入口橋より東の方を云ふ当所は白酒の名物なりしと見へて旅雀に^ツしひてもれ御油にとまりの一夜酒と見へたりさて当所より海道二つに分る右は東海道左は豊川当古巢山など経て本坂峠を越へ瀧松に至る又豊川大木新城など経て鳳來寺に至り秋葉山をかけた遠州懸川駅に出る東海道名所図繪には此追分を以て二見道なりとすれど大に違へり此追分は古道の追分にはあらずそは末に出す二見道の糸合せ見るへし又此近辺八幡久保辺の今此に除く末の●此印を目驗にして尋ぬべし再ひ末に欠間を出して夫道順に名所を記すはなん

八面大明神

同駅東の入口欠間の北裏にあり

楠大樹

八面明神の社地にあり此楠天明六年の大災に焼亡すといへとも幹は朽ちたるまゝにして今猶存せり

○按るに今焼残りたる朽木根廻り六丈五寸中のウツ口差渡し東西二丈一尺余南北一丈六尺余焼け残りの木の高二丈四尺余あり

林孫八郎墳墓

同駅欠間の北裏字犬モチノキと云処にあり当郡長沢村松平上野介親久の家臣にして御油村

を領す後 大神君に属す一宮合戦の後此所に今川氏其の勢と酒井忠次君と戦ふ先年数多討れ味方危きに所の案内者故に林孫八郎討死して酒井侯を救ひしと白雪の続柳蔭に見へたり林氏系図に云永禄六年今川氏真と御油の台にて合戦の時御油衆既に押崩されんとせしとき林光正行年四十四歳御油玉林寺前犬モチノ木の根にて討死右の古木今に在とぞ五月十二日なり光正の首敵の手にわたさず御油六ヶ谷にて火葬にせし由見へたり

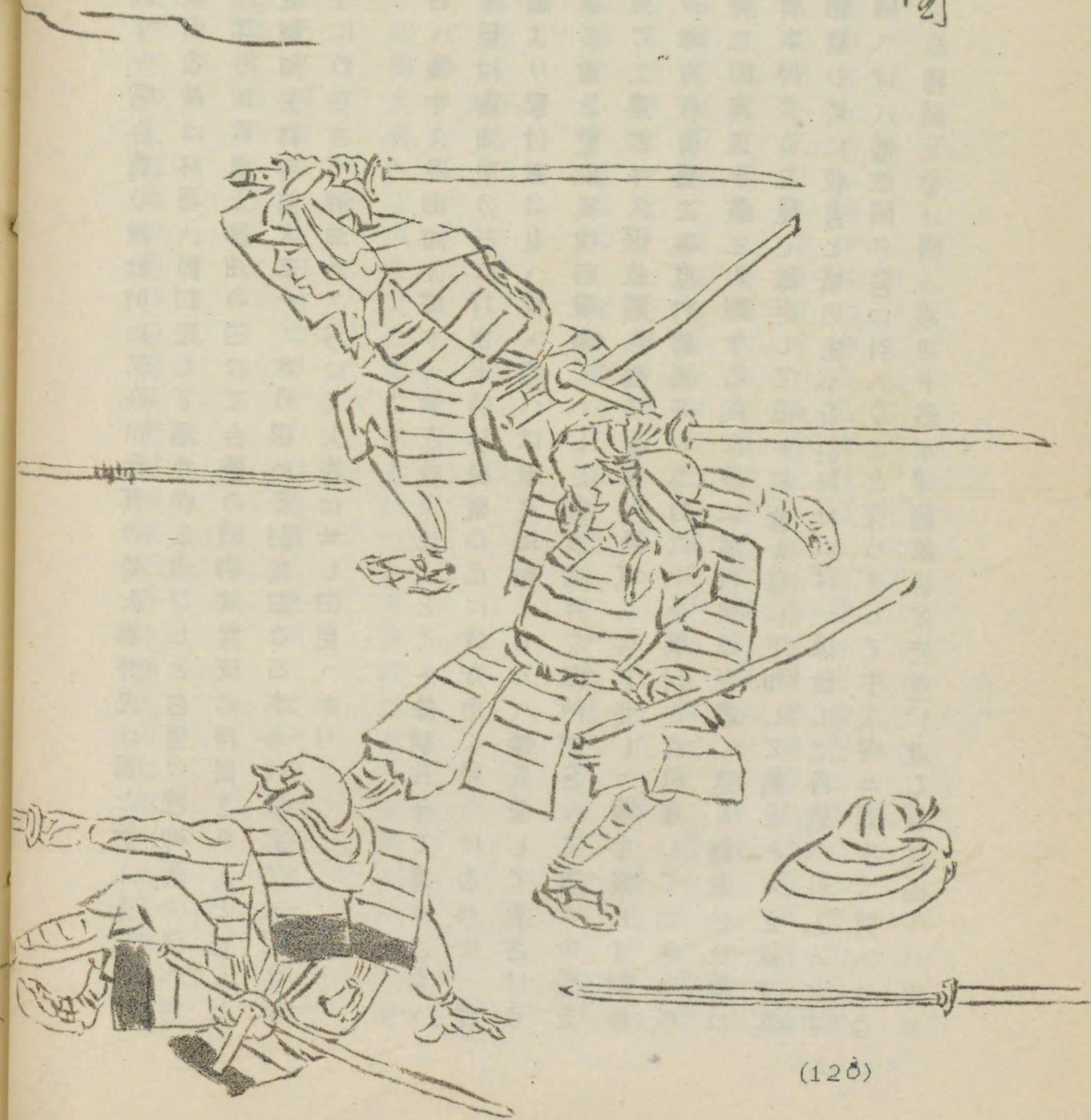
御油合戦

当代記に上畧 大神君八幡牛久保御油の城下へ働き放火せよとて千餘騎を介て遣はさるゝを八幡牛久保にて是を見付御油東の台に打出半時許相戦ひ已に味方危く見へける処に 家康公千餘騎を率し岡崎より馳付敵の屯へ乗入賜へは城兵拒難くして八幡を差して退きける処を則追入放火して数多敵を撃取其後自身衝くへしと宣ひ酒井左衛門尉を以て道々の砦を見せ賜ふ敵此形容を見て二連木牛久保佐脇八幡の砦より片坂へ兵を発し一騎も残らず討取へしと攻め戦ふ駿河の味方板倉彈正每度打勝酒井が与力六十餘騎討たれ敗軍して二手に成て引入石川新次郎同新九郎渡辺半藏三人殿する処に急に追付来る半藏 返し鎗を合せ静に引取ける 家康の御旗本押来るを見て敵返して返し板倉士卒に下知して馬を入んと欲す其内に御旗本より馳付相戦ひ終に板倉と婿の主水を討取れば一陣敗して各砦へ引入んとする処を急に攻め詰め賜へは八幡佐脇の砦に引入ることならずして牛久保二連木へ引入けるを即時に佐脇八幡も攻取勝開を挙げ賜ふ渡辺半藏米津藤藏每度先登に進む駿兵山下八郎三

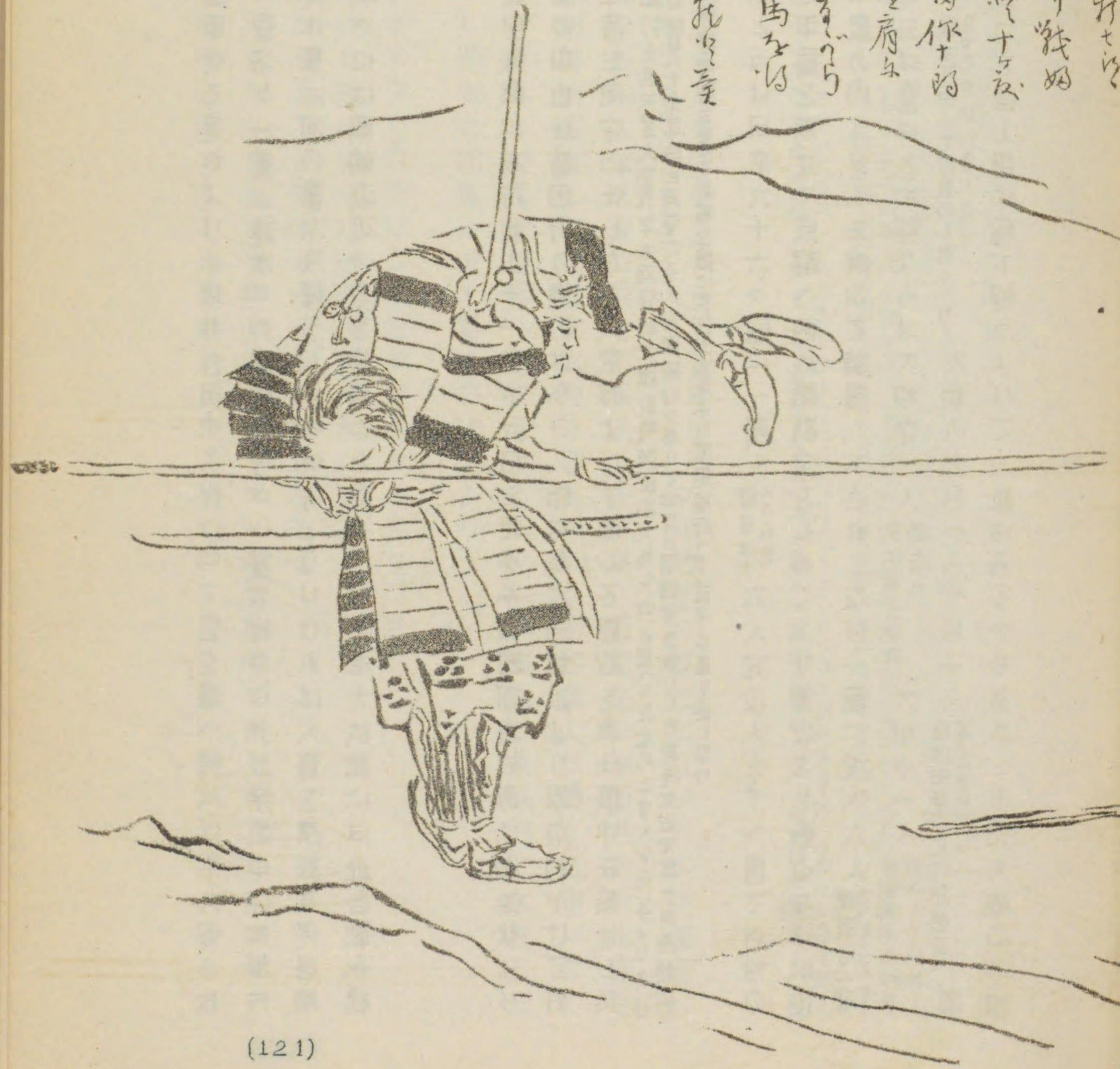
浪邊守綱後殿圖

武文物語云

三河遠州の在家三子
 一可引歌士後川根
 ハ少人者トト復
 部事能ハ鬼事能
 浪邊守綱ハ鏡
 才氣派美深茂
 ハ有取海能歌
 ぬえ



ハ晴の軍中後守綱石川村セシ
 同新九郎後嗣ハ三子三後踏止リ戦母
 後ハ浪邊一人後殿一ノ戦母ハ三子
 鏡ハ命ハ三子三後一ノ割ハ矢田作
 臣ハ痛久引至大右左浪邊是を肩
 介ハて此由毒坂ハ名敵ハ防キ有ハ
 正々味方一騎モ討キ片矢田ハ馬ハ
 下切多兵より三子三後ハ鏡ハ
 移ル



郎と云者を渡辺半藏討取ける是れより小坂井吉田牛久保に向て砦を横へ賜へば牛久保の牧野新次郎が一黨野田の菅沼が一黨二連木の戸田因幡守が一黨下祥の白井設樂越中守西郡片の原竹の谷西郷櫻井其外東三河の輩不殘降参して御味方となりければ人質を請取其終居城に差置る退散したる城々には岡崎近辺の衆を指置ると見へたり武徳大成記には此合戦永祿五年の条にあり

國府

和名抄に云三河國府宝飯郡に在行程上十一日下六日と見ゆ今当郡國府村あり御油駅より東の方に在て即東海路の中世往昔國府の境内は今の八幡白鳥久保村近より國府村かけて府中の地ならん此地は往昔三河守に任したる人京師より下向して國政を執任限中在職せし処になん三河守の名は早く統記云文武天皇大元元年三河守大津守勢朝臣祖父爲大位と見へしを始めとす大元元年より文治の頃まで其中間年歴凡四百八十年許三河守たる人當國府に参りて四年の間國役を取りし也其後文治元年十月源賴朝日本總追捕使の職を蒙り諸國に守護地頭を置て武職を禮にせしかは是より國司國府へ交替する事も絶しなり

貞丈雅記四十五に云國司と云は日本六十六ヶ國に一國に郡司は六人の外也六人宛役人をすへ置て百姓の諸願訴訟等を取さばき年貢を取立て京都へ納め諸勘定をしめくゝり軍役をも勤るなり此役人は天子より仰付て公家の内より人を撰ひて諸國へ下されしなり一國に役人六人職員令に守椽一人少椽一人大目一人少目二人史生三人つゝと云は譬は大和國ならば大和守一人守は五人の中大和介一人介は守の手代也大和太掾一人太掾は肝煎にて役義のしめくゝり大和の大目一人少目一人目は祐筆にて日記帳面司一人郡司は郡奉行なり國に大國上國中國下國によりて人数は各多少もあれとも先大概右の如

し諸國に右の役人の居る役屋敷あり其処を國府國府ともいふと云也右の役人四ヶ年つゝにて交替する也遠國は五年にて交替也統記五ノ四丁に元明天皇和銅六年五月制夫郡司大小領以終身為限非近代之任又後記行四ノ四嵯峨天皇弘仁六年是日復諸國司遷替以四年為限又同書云五ノ五諸國司等各期

本年之任不慮血歳之替又三代実録云 清和天皇貞觀十二年諸國非受業之博士醫師以四年為限但在出初及大宰府管内諸國五年為限又高田友清の棟梁集にひなのみよこと云ふは諸國の國府は田舎にとりてのみよこと云ふはひなのみよこと云ふべしとへは君にまをすも王者をわねと申せともまた分々にしてがいて五位にいたるまでもまうろ君と云はるゝがごとく也又詞林采葉抄六の卷にひなの都とは諸國の國府これ田舎の都也國司の在所なる故にまをす也又言塵集二の卷に夷の都とは諸國の國府を云ふ也又代匠記卷十八に越中國府はひなにての都なればかく云へりなと見へたり

可敬云仙覺抄云 みやこととは王城を云ふ然るにひなのみよこと云は諸國の國府は田舎にとりての都なればひなのみよこと云ふべし云々 又叙増基の遠江紀行に云其夜國府に

とまる云々又東鑑卷五に養和二年壬寅四月十九日戊子十郎藏人行家在三河國爲追討平家令上洛之由云々勸告文相副幣物等奉二所大神宮又源平盛衰記廿に十郎藏人は諸々の軍に負て參河の國府に息つき居て是より伊勢大神宮へ祭文を進る云々又武徳編年集成十五永祿五年長沢松平康忠君へ賜ひし領地の印章に五十貫文府中とあり

その夜こふにとまるこのをりしのをかに人々とまりてきたるといふへきにもあらずかしは木の下にまくひきてやとり侍て人しれずおもふことおほく侍にあかつきかたに

遠江紀行

ねらるやとふしみつれとも草まくら 増基法師 有明の月も袖に見へけり

三州国府白井梅花方へ文とゞくる事ありてかけ寄たればつ
よくとめられて

鬘剃てまた見にこうそかきつはた
風すゝしかれすゝしかれ風
うす月にうすうなる茶をいれかへて

轆士
梅可
夜白

大社大明神

同村海道の左の方に在り祭大己貴命例祭十一月十五日神主富田氏当村の産土神なり二百年
以来の棟札ありて古きことは知れずとなん

天神山高善寺

同村右側町裏に在

本尊

地藏菩薩 座像長九寸許

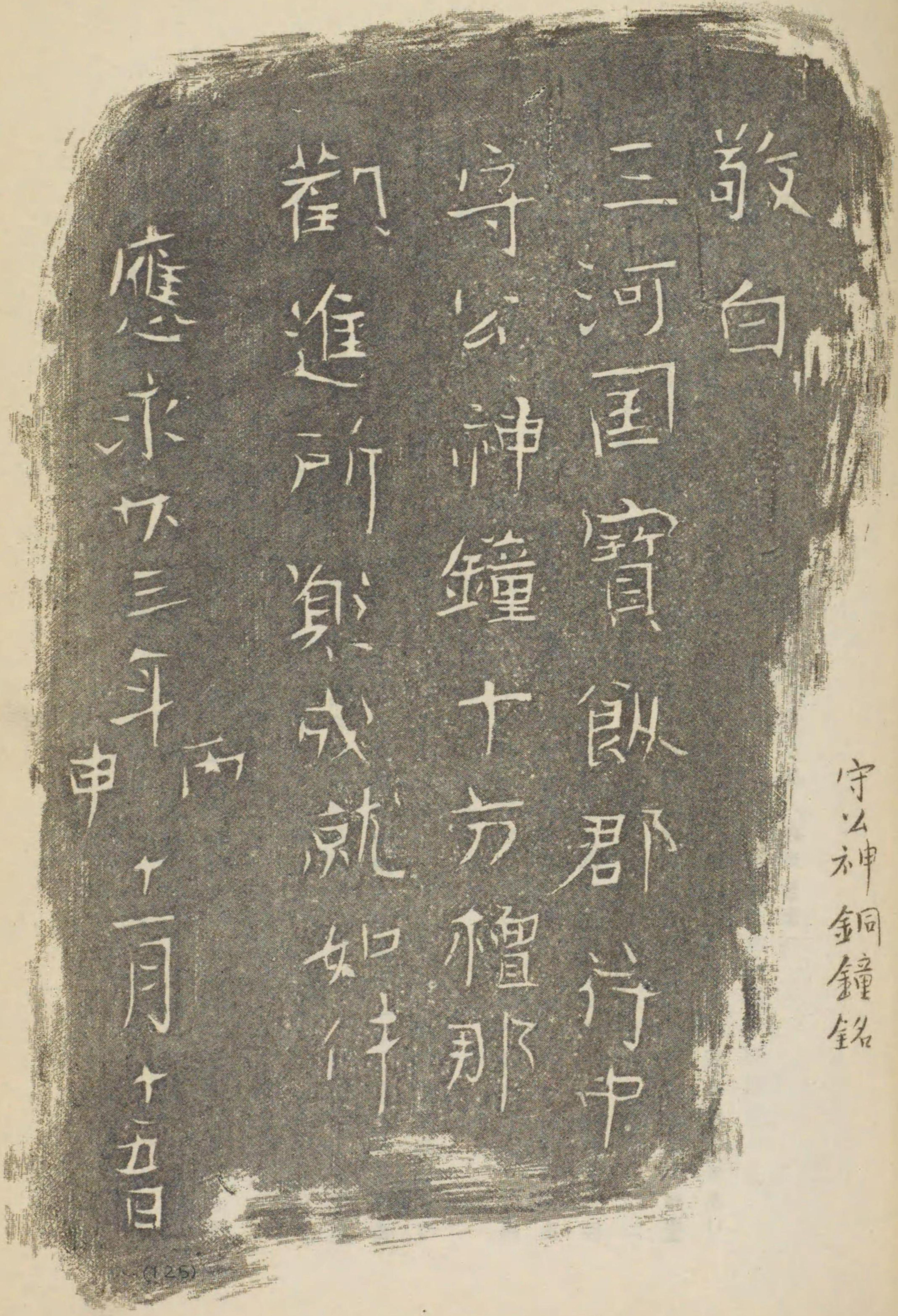
半鐘

本堂東の隅に懸く往昔守公神の鐘と見ゆ長竜頭まで三尺五寸余径尺四寸五分許に見へたり
銘に曰三河国宝飯郡中守公神鐘十方檀那勸進諸願成就如件

應永廿三年丙申十一月十五日

守公神

守公神銅鐘銘



同村仲町の西裏に在祭神未詳ならず例祭

可敬謹て考ふるに守公神の神祇いと珍らし蓋安倍朝臣三河守にて当所に卒す此人俊傑にして騎射を善くし又頗る愉兎を捕ふるに妙なり故に土人其勇猛と又賊をよく捕ふることを追慕して國守の守を取りまた公と尊仰して若守公神と崇め祭るにはあらずやこは試に云ふのみ文徳実録十天安二年三河國言從五位下安倍朝臣氏主卒氏主父散位正二位上少爲遊俠交友博徒氏主願善騎射輕捷如飛夜追捕愉兎還被傷胸明日尋逐捕賊山眞山仁明天皇在東宮徵爲帶刀舍人承和十一年二月叙從五位下爲遠江守被官使勸責辭却仁壽三年正月爲三河守秩滿後天安元年更復三河守卒時年六十五と見へたり又姓氏錄十に云守公景行天皇四十年の条に大碓皇子云々遂封美濃國此身毛津君守公二族之始祖也

足利家の記録一の九丁に云あくれば應永十八年七月二十九日御評定始ありこれは去年七月廿二日勝光院殿滿兼逝去ありしかば鎌倉中重服の儀にて萬機停廢あり御家に今日廿二日第一周の法會遂行はれて何事も昔に偲る吉例の始なれとも御所は御元服以前なれば御出座なし政所にて守公神の祭籠口にて死話杖祭等を行はるゝ事すべて先々の例の如し云々

○姓氏錄十守公は景行天皇皇子大碓命之後也とあり日本紀十景行天皇四十年の条に大碓皇子云々遂に封美濃國仍如封地此身毛津君守君二族之始祖也とあり狹投社被命陵と云あり近村森村あり恐くは彼命を祀れるなるか

○守公神の事 足利家の記録の中に在しことを思ふ後人の考をまつ

芭蕉塚

同村右側観音堂境内に在平松喜春建之紅梅や見ぬ恋作る玉すたれの句を彫刻せり

雷井に墮

三河藻塩草に云往昔芭蕉翁我國國府の邑白井梅可の許にしばし客たりし時此里の何某が井の中へ鳴神落下りしを人々集りてあやしき麩板様の物にて蓋して置ぬ此事を近きあたりに隠れなく雷を生捕にせしと聞へければ翁も梅可の衆内にて此に來り彼井の元に立寄主に乞て蓋を除て見るに一物もなし主と共に三人手をうちて笑ひ俳諧歌一首をつらぬて歸りける

あがるべきたよりなければ鳴神の

井戸のそこにて相はてにけり

右の事翁筆を取りて言葉書して主の許に置れしとも又梅可か方に在しと云へりなれともい

ク子ナ塚

同村西南の方二里松村へ越る道の側に在とぞ由縁いまた詳ならず

猿樂

同村より西南の方に重松村へ越る道也統叢考に云猿樂山は御戸郷古城山の北に在廣石と國府との地境なり元亨元年楠正成赤坂城没落の後軍謀の爲此所に來り關東の武威を窺ひけり家臣恩地左近太郎滿一猿を舞し正成は袋を被き猿樂をして往來の人に見せしむ夫より再ひ

芭蕉翁井中の
雷を見る図



赤坂城に入しとなん可敬椽るに正成本國に來り加茂郡高橋庄に塾居すること水戸本太平記
 にありと太田白雪の春兩話に挙く白雪又云高橋庄楠氏の旧地を尋るに楠と云ふ処ありそこ
 に多門寺と云ふ道場ありしも今は畑の字に其名のみを存せりと云々又元弘元年楠氏恩地と
 二人本國に來り鎌倉の事實を窺ひ同二年河内國に歸ると太平記綱目に見へたり又加茂郡足
 助の猿引楠氏由縁ありと聞く彼是合せ考ふるに楠氏本國へ來り猿引となりてありしこと左
 もあらんされとも未だ此猿樂山に居りしこと其証を見ずとは後人の考をまつのみ
 又三河雀に云御津大恩寺近に猿樂と云ふ取手の跡あり昔日延命権兵衛と云ふ猿樂大恩寺へ
 塩瀨寄付の事ありと見ゆ是等を以て見る時は蓋し延命権兵衛など猿樂せし由縁より猿樂山
 と呼しを楠氏に附會せしにはあらずや其は後人の考を俟つ猶楠氏の事跡は加茂郡高橋庄に
 云ふへし

茂松村古城

東海路より右の方國府より西南廿町許に在白雪の続柳陰に云三河双紙に云蒲冠者範頼三河
 守に成て居城とあり三河堤に云細川兵部少輔勝久或書に云文明長享の頃今川義忠の爲に亡
 小云々又二葉松に云茂松村古城牧主計と在御油赤坂の間並松樹の傍にカズドと云知あり其処に
 小き五輪の石塔あり此牧主計の墓なりん
 柳当城は足利將軍義滿の時執事細川武藏守細川右馬頭頼有をして城を築き是に居らしむ
 安年中の事ならん又永和明德の頃は同舍弟頼頭頼長次に兵部太夫時氏等是に居す又永享享
 徳の頃は細川讀岐守成之入道道空幕下の士細川治部太夫に命して在城せしむ統義考
 に出可敬椽



捕らぬ猿聖山潜居の図

るに群書類從三十七卷三河は讃州拜領云々同書三十七卷讃岐守成之阿波三河兩國を將て八千余騎とあり諺に宝飮郡三細川と云は兵部少輔勝久御津郷に居し治部太輔政信此城に居し民部太輔敬春居所詳ならず是を林して三細川と云又応仁二年山名細川確執に及びし時外戚酒辺河内守時重此を守る又文明擾乱の時今川治部太輔善忠謀之時重出奔して壘陷る尔來荒墟にして数十年邑里の稅地と爲寛永中に至て長沢家の庶流松平淨感某嫡孫松平彦石工門尉居館をなししも幾許ならずして松平越州定綱に属す其頃庶民少時居を此城地に占然るを元禄中再城邑となる因て稻荷地へ配す宝永元三月塹を埋阡陌を毀ち竹樹を伐て田圃となす

新宮山城趾

東海路より石の方廣石村の内也國府と廣石との間の山也山上に熊野新宮を祭る三河雀に云いつの頃にや三河國に熊野山を移し那智は夏山村新宮は國府村にあり熊野谷は赤坂にありと見ゆ又二葉松に云山田長門守晴政此に居住す晴政は長沢家祖衆也忠輝朝臣長沢家相統によりて後越後國糸魚川の城主となり二万石を領す故有て息因幡守と共に自殺す往昔大恩寺も此山の麓にありて新宮山大恩寺と云ひしとぞ然るを二代肇營上人の代に今の地に移して大恩寺といふとなん

御津

敬雄の風土記考に云按るに和名抄当郡御津美今廣石村を御津と称す其外御津七郷と云ふは

西方平野森下茂松灰野金割丹野赤根大草廣石大塚山神十二ヶ村を総て御津庄と云ふ又武徳編年集成五五永禄五年長沢松平康忠君へ賜ひし領地の印章に四百廿貫文御津村とあり

御津海

風土記の殘缺に云御津海眞諸鮮魚とあり今彼地の形容を見るに海岸を距ること廿町許あらん是則蒼海変して桑土となりしなりさて御津神社より東南へかけて田圃に一段低き所あり昔蒼海なりし遺跡ならん又御津神社の末社に船津大明神又國內神名帳に磯の宮明神あり此地に坐せり

御津湊

風土記の殘缺に御津湊亦二葉松に云始 孝元帝行幸當國之日奉寄鷗首於此津因是号御津湊とありされと此天皇行幸の事物に見へず憶ふに書記景行天皇の御卷に五十有三年八月是月乘輿幸伊勢転入東海道と見ゆ蓋 景行天皇伊勢より此津に着御在て東海道へ行幸ありしにあらざや土人 孝元天皇と称し奉るは 景行天皇を誤り傳ふるにはあらぬか

産物

怪石風土記 奴名菜同書に云其色緑にして是を服すれば味甚美にして是を服すれば

三河

御油橋の糸に挙る音羽川水源宮路山より出て御油橋に至りて西南に流る此川往昔は当所に至りて海に入しにはあらざや之を三河としも称しけるか考ふへし藻塩草に三河又同名近江

にありと見ゆ万葉畧解に三河は地名にや近江國滋賀郡に在と云へり勅撰名所集又名寄又松葉集又秋の寢覚又蘇尔雅等皆當國とせり憶ふに当所は往昔入海にてありしごと風土記の殘缺に見へて御津湊又御津海などあるを見て知るへき也今当地に至りて地形を見るに当村東南の方一段ひさく往古入海なりけん俛見へたり

萬葉集九

三河之洲瀨物不落左提刺爾衣手湖干兒波無爾

春 日

夫木雜三

思ひかねそのこのもとにゆふかけて

慈鎮和尚

いのりぞわたるみつかはのはし

家 集

落たきついはせをこゆる三河の

民部卿為家

枕をあらふあかつきのゆめ

淨光院

風土記の殘缺に御津庄の外にあり寄田二十八束三毛田敏達天皇二年癸巳百濟惠灌開基之地也と見ゆ惠灌は書記セキシ推古天皇三十三年正月戊寅高麗王僧惠灌を貢すとあり敏達天皇二年は推古天皇三十三年よりは五十四年前なり敏達天皇二年は恐らくは誤ならん

御津神社

御津庄廣石村に在船洲御津明神と称す祭神大己貴命と社説に云へり風土記には下照比咩を

祭るとあり例祭九月十六日又四月初申の日を勸請曰とて祭れり按るに船洲とあるは誤なるべし今末社に船津大明神と称するあり是と混れたるなるべし都の字万葉集又和名抄にツの訓に填めぬれとも伊登内親王を統紀に伊都内親王と記すと敬雄の官社考に云へり可敬云書記通證キトウに重遠曰水門神主港私記曰水門美延佳曰入皇記水門訓美那登水門守也漢書傳とありなど憶ふに御津は美止と訓か今土人も亦美登と称す風土記殘缺に云御津神社圭田五十六束云々天武天皇四年乙亥二月始奉圭田加神礼又文德實錄キトウ云仁壽元年冬十月乙巳參河國御津神授從五位下又國內神名帳に云正三位御津大明神式室飲郡に座と見ゆ又官社考に云村老の説に当社の神は御鎮座の時伊勢より船にて上り賜ふ御船の着し処を船津と云其処に船津大明神と云あり又磯宮指取大明神と号るありこは其時に楫を取賜ひし御供の神也と云へり又茂松村の産土神を御軸玉大明神と称ふ是も御供の神なりと云傳ふ今其御社に其時の御船なりとて操坂の古き木船ありさて御津の神社は古くは神領七十五石ありしと云傳ふ今も田地の字に被田ネコ田神子田など云字殘れりと官社考に見へたり又三河國圖書に云永廿二年造立棟札刺史源義範又同書永亨十一年の棟札に中家八郎左近とあり当社は即御津七郷の産土神とす御津七郷十二ヶ村の名御津のところに出神主は神道氏と云ふ

○当社棟札に永廿二乙未八月十八日御津大明神宝殿大檀那当州刺史源朝臣茂範祢宣正國とあり

按るに菟足神社永廿二年の棟札に大檀那左京大夫源茂範とありて同人なり

御津神社銅鐘の銘

日本國三川州御津庄

大明神社洪鐘也述一偈而銘之
洪鐘一脫體圓成河津龍宮釣得
華鯨聲音忽發殷鏗：河處湛深
群有睡驚馬一根統脫六莖盞清沙界

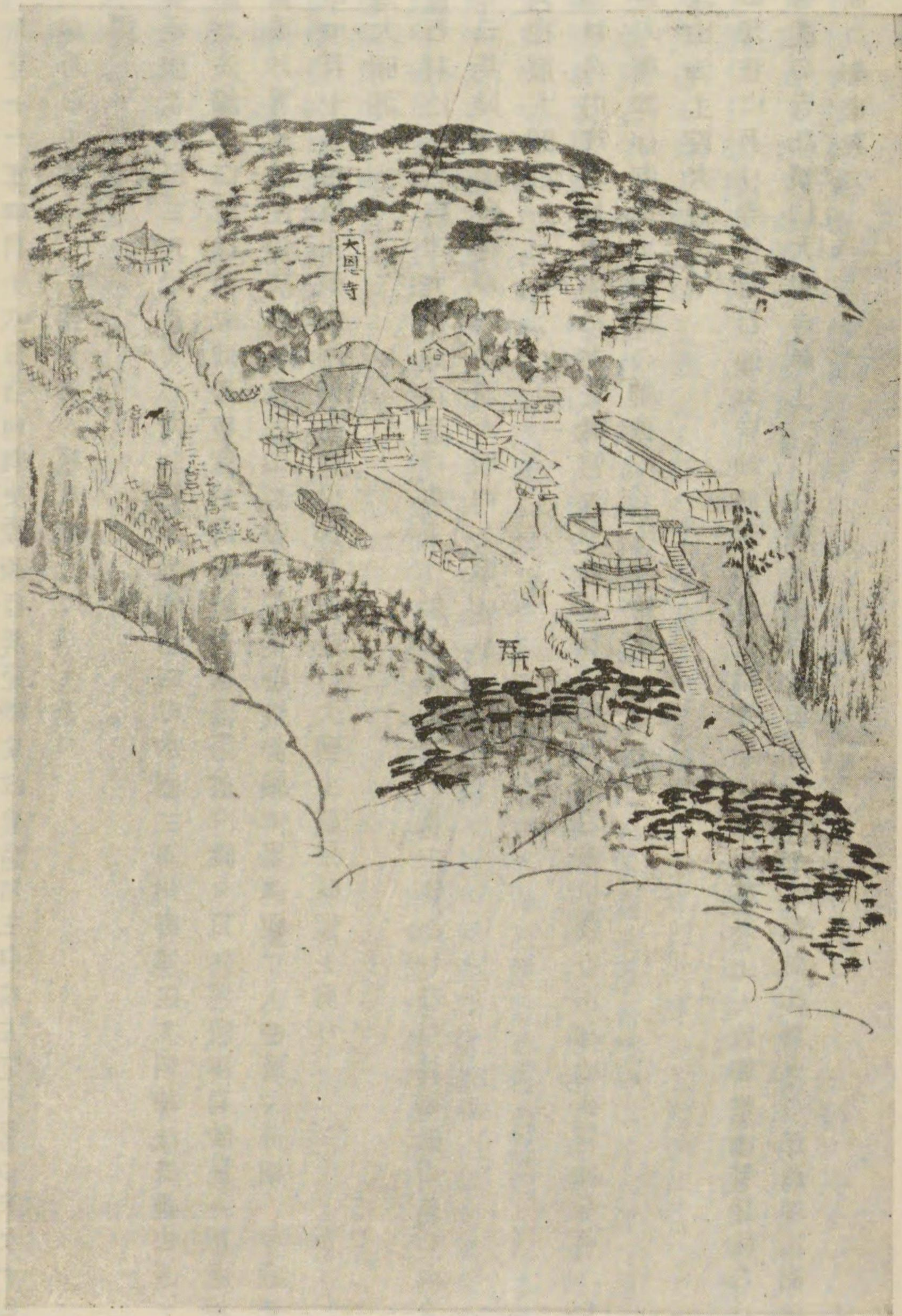
聳聽庄境誇榮民長民伯政家平
寅昏絕許願心呈誠塵之入理歷々

分明

享德元年壬申十月十五日

當田庄刺史細川兵部少補源朝臣

大願王藤原政家 大工



永享十一年四月十六日当州刺史源朝臣義範頼主政貞造功主中家左近下畧○天文十五丙午
卯月○天文八 霜月等の棟札此次々のもあり

神 鐘

長竜頭まで凡三尺径壹尺八寸許厚二寸程銘曰日本國三河州御津庄大明神社洪鐘也述一偈而
銘之洪鐘一口脫休田成河津竜宮釣得華鯨邑音忽落般々鏗々耳処甚寂群有睡驚一根譚稅六華
蓋清沙畧聳聽庄境誇崇民長民伯政家々平寅昏幾許願心呈誠塵々入理歷々分明 亨徳元年壬
申十月十五日当州刺史細川兵部少輔源朝臣 大頼主藤原政家とあり

船津大明神

廣石村にあり御津大明神往昔伊勢より船にて此津に着たまひしなり其御船の着し處を舟津
と云其所に鎮座神ゆへ船津大明神と申す小

磯宮指取大明神

同村の内茂松村の境に在て磯宮大明神と称す國內神名帳に載る小初位磯宮神なるへし此指
取大明神は御津大明神の御供にて來り給ひしとぞ

御津山浄土院大恩寺

御津庄にあり寺領百石浄土宗鎮西派本寺京都知恩院開山肇誉上人牧野黨御菩提所なり
梅園の寺社鏡に大恩寺献上一本 住職於知恩院申渡有之○住職御礼無之○年頭御礼固御次一
同○御暇無之

大恩寺は御津山北の麓御津神社の南に在往昔肇誉上人勢州白子より此郷に遊歴して淨願寺
を建立す次年大恩寺を草創あり時に文明十年なり上人御津大明神を信仰して当山を開辟な
し賜ひし故御津を以て山号とすと統叢考に見へたり又一説に往昔当寺は新宮山の麓に在て
大運寺と云ふ開山は了曉上人なり然るを二代肇誉上人の世に大運寺を当地に移して大恩寺
と改むとそ又浄土傳統記に云御津大恩寺開山了曉上人靈蓮社慶善は和州の人なり増上寺の
開祖西營聖總上人の門侶にして飯沼弘経寺第二世住職たり後に大恩寺を建立す文明十五年
五月廿七日寂すとあり又三河雀に云当寺本堂は当郡牛久保村牧野右馬丞書院を以て建ると
見ゆ又三河國圖書に天文廿二癸丑五月十三日御津郷大恩寺阿弥陀堂棟札に云大檀那牧野出
羽守保成息傳三郎成元牧野右馬允成守岩瀬和泉守善生(爲当寺)竹本四郎右衛門とあり
本尊阿弥陀如來

立像長三尺許安阿弥作

鐘 樓

山 門

鎮守稻荷祠

本堂より未申の方に在

塔 頭

山上堂

本堂左の方に在

高札

当手甲乙軍勢於彼寺中不可濫防狼藉若背此旨者可被行嚴科者也仍如件

元龜四年正月三日

山縣三郎兵衛尉

御当家御八代の墓

当寺境内に在善徳院殿瑞雲院殿浄眞院殿盛徳院殿

牧野古伯之墓

当寺境内にあり後人其顕名を慕ひて之を建しか

牧野黨代々墓

当寺境内に在

牧野頼成の位碑

当寺に収む過去帳に

戸田永女正墓

当寺境内に在

第石雜色

上二日画宿三戸里大昌寺
待古伯之消息也

梅花無

路人例日踏三河

尽藏

第店蕭々月成雨

難聲夢破短於簑

万里居士

寶鐸

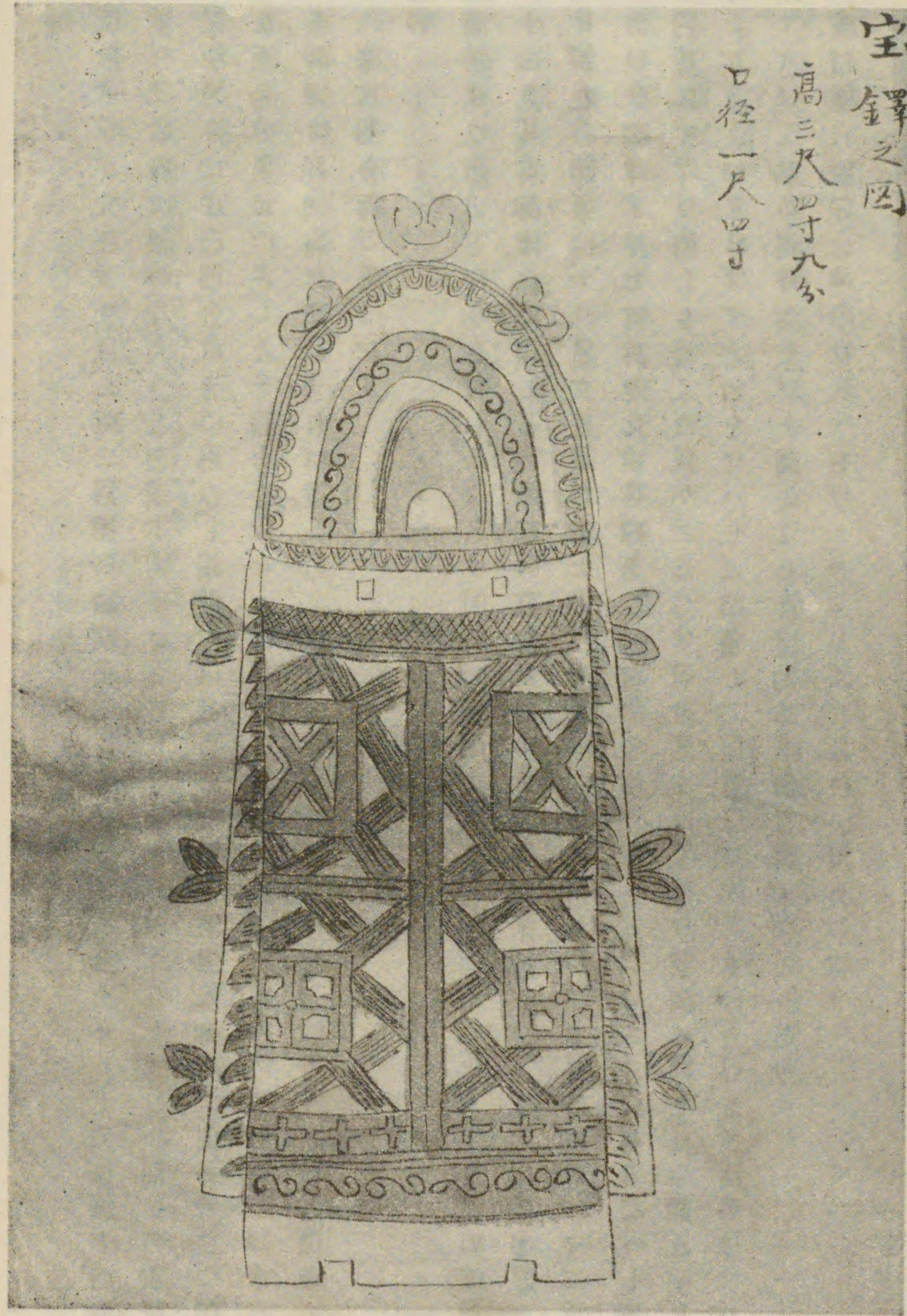
楹尻に云予が父在世なりし時三河国御油駅南水戸山にて村民掘出せしとて銅鐘を名府に携へ来りて公府に納めなんことを請ふ依て之を啓して奉り民は銀なと賜りし瑞公の御時なりと見ゆ憶ふに往古国分尼寺に用ひし銅鐘にはあらぬか聖武天皇の御代に国分寺並に国分尼寺を國府の東面に建しとぞ國分寺は今八幡村に在て府の東に在尼寺の旧地は未詳ならずと雖も御津は即國府の西に当れば疑はらなくは尼寺の旧跡にてはなき歟考ふへし猶尼寺の事当那八幡村国分寺の糸に記す

望理郷

東海路より右の方に今森村と云ふあり國府に西南に当る公穀七百六十二束三宇田假粟六百九十三丸其貢御津庄に同しと風土記の残缺に見ゆ又武徳編年集成註に長次松平康忠君へ賜ひし領地の印章に十八貫文森原双方とあり郡郷考に云和名抄に当郡望理郷ありマガリと傍訓あり今御津より七町許東北に森村あり其貢御津庄に同しと有は決く此村なるべし斯れば和名抄にマガリ訓しも後人の誤かと云へり可敬思ふにマガリの訓は即モリの訓と同じからんマガを反切すればマと約かマハモと相通して同音なりかゞればモリを延謂時はマガリと謂マガリを約め謂時はモリと謂ふならん延約めの例万葉集に見へたり
○隣村國府に守公神の社ありモリノキミとよむ森村に由ある歟

宝鐸之図

高三尺七寸九分
口径一尺四寸



行徳庵寺

森村天王社鐘銘に寛政五甲十一月十五日佐竹清安入道とあり

風土記の残缺に望理郷の次に在寄田三十九束三畝田又以假粟為寄田二十六丸道眼和尚開基の地なりとあり未だ寺跡を稽へず後人の考へまつ

古城

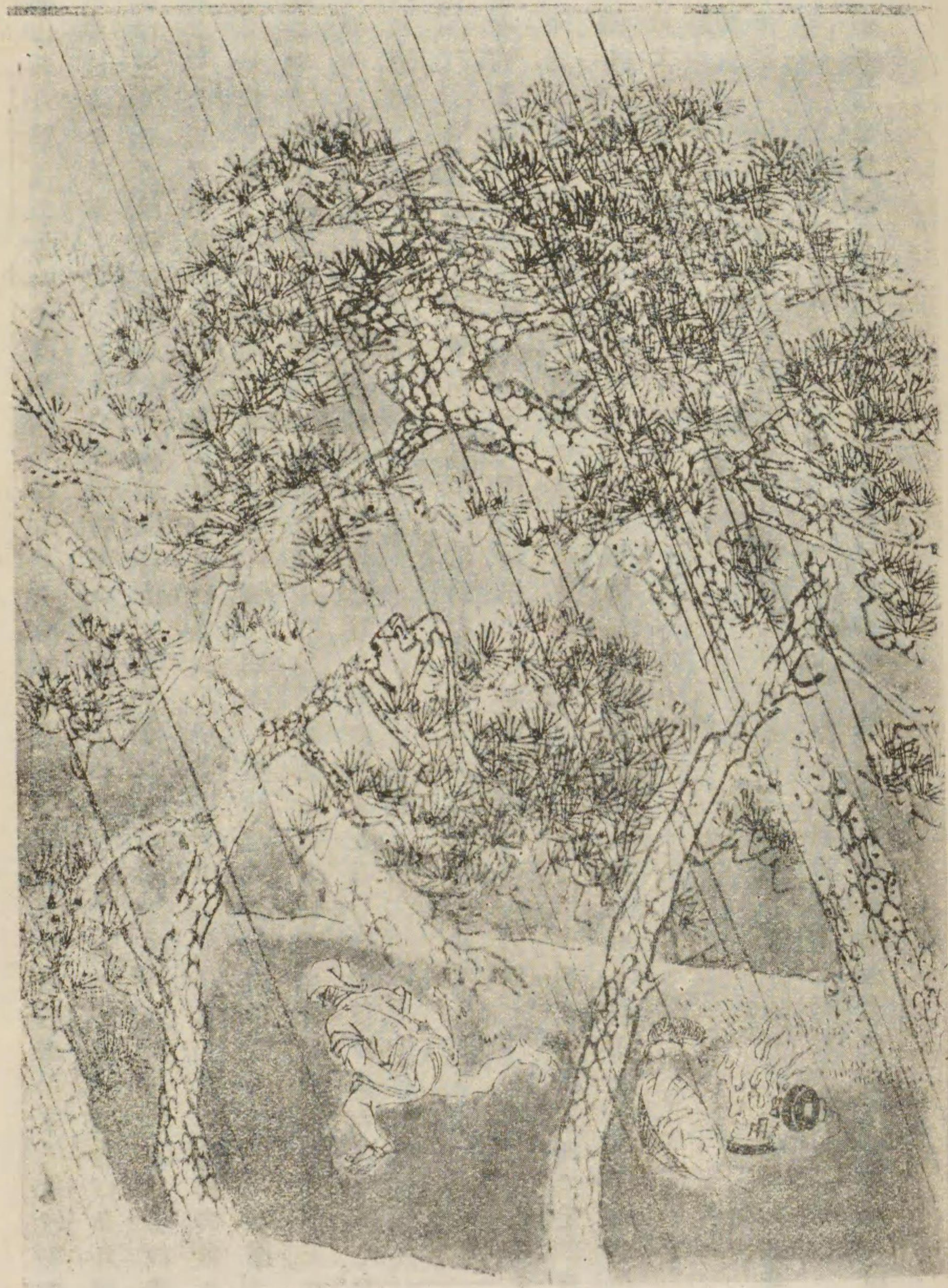
二葉松に古屋敷とあり佐竹刑部大夫寛政元年の棟札ありと見ゆ又天正年中諸士住居の記に森伊賀居住今川十八騎の内なりと挙く又群書類従五百長享元年着到の條に三州毛利宮内少輔又武徳編年集成九十三天正元年五月廿八日の條に此時三州森郷にて逍遙軒徳川勢と合戦し敗北す山縣之を救ひ本田廣孝が兵を追撃して首三十二級を得る而して翌日二股に至り甲州に歸と云ふは非也森の軍は当秋九月なりと見へたり

為當村

國府村西南の方に在康正年中茂倉左京と云し人居住せしと見へて群書類従五百康正二年造内裏役録並に國役割付に志貴文朝倉左京助殿三河國守飯部為住郷後と見へたり

小田洲繩手の怪火

小田洲村は櫻町村より西南に当り東海道より少し許右手に見ゆ其わたりの並木を小田洲繩手と云ふ林自見の市井雜談録に三州御油と吉田の間小田洲と云処あり此所より三里程北に本宮と云



(147)



小田原の怪火

(146)

高山あり夏月に至れば間々彼本宮山より小堤灯程なる火いでて小田洲に來て飛行す往來の人間近くまで來て燃へ夫より三里程南の方藏王山に至り又小田洲へ歸り曉方になれば本宮山に至て消失ぬ或は時として彼火數百に分るゝ事もあり夏夜雨天の節は大方出る故諸人の物語を見る吉田町裏に長助と云卑賤者あり毎夜火の番を渡世とす這等の火は金銀の精なりと諷と鳴て地に落ちるかと思へしが元の如くなつて本宮山の方へ飛去りぬ時に長助何とかしけん仰向にたをれて不覺骸を打損し坐行となり竟に乞児となりて果たりと云と見へたり

淡洲大明神

土俗はアノスと稱へり
アハシマなるへし

國府より東南の方に小田洲村あり当村中の産土神なり例祭

神主

神名帳集説に云從五位下小田天神宇飲郡に座とあり按るに淡洲はアハシマと訓べし書記卷に淡洲とあるを古事記に淡島仁徳記に阿波志摩とあり書記に少名彦名命淡洲に至て粟の茎に彈れて常世國に出ますとあり紀伊國加太粟島社は少名彦名命を祀るといへればこの社もその大神を祀れるなるへしと云へり

櫻町

東海路の中小田洲繩手を終れば頓て当村なり在名に櫻町の名目いと珍らし憶ふに往昔櫻村と云ひしを漸く家居立続きていつしか町並となりし故自然櫻町と呼しならん

余去若櫻村者十年于慈世檀越定利公虛惠曰文室以詩余來去歸去歲之冬以書謀之於檀越請

岱雲老人以補其席々老人有書告去冬入寺副書以青銅三百仁人之贈不可辭以摺疊扇一柄以致祝義云

翰林五 一去櫻村送十春 素衣染尽馬蹄塵

鳳集 溪壺山色付君後 白髮羞林旧人

東紀行 散殘る花もやあると櫻村あをほの

冷泉爲村郷

木かげ立ぞやすらふ

○櫻町は北側は白鳥地南側は小田洲地なり

伊奈村立場

東海路の中御油と吉田との間の立場也御油へ一里四町吉田へ一里半良香散の薬店あり世人伊奈の立場と云はずして良香散と云へり

院内御園

神鳳抄に院内の御園とあり此所ならん海道より少許左の方也斯れば当村はそのかみ皇太神宮の神領なり

萬歳

○院内御園は渥美郡の院内なるへし其村つゞき皆いせの神領なればなり

同村より出る定家卿の明月記に元仁二年正月三日臨昏千壽万歳來秉燭之後初月出雲間とあ

伊奈村立場

題加藤山人畫

青松落葉帶風

地接風未仙路通

歲歲主人能負重

也知市上有慶公

水戸立水



リ柳万歳の濫觴は昔正月十四日十五日京中の遊士月に乘りて彼方此方歌ひ舞ひ歩行し遺風
 男踏歌となりて正月十四日殿上地下の四位以下の輩しかるへき夙々をめぐりて催馬樂を唱
 ひ舞かなづることあり夫より足利殿の營中には正月七日参りしなり恒例記に云正月七日千
 秋万歳参る松の御庭にてこれを舞せらる其頃は千秋萬歳と云けるを後世略して萬歳と計り
 云ふ也そも萬歳と云は造宅の祝ひ鳥追は田毎の祝ひ春駒は蚕桑の壽也世に衣食住の三つを
 重しとす故に年始にこれを壽き興を催すになんと岷江入楚貞夫雜記塩尻等に見へたり又一
 説に六十六代 一條天皇の御宇長徳の頃大江定基三河守に任して本國に來りぬ當國の人民
 毎歳々首に千歳樂万歳樂と舞かなでけり彼定基朝臣は佛乘に寄して横川の源信僧都に法を
 受て一向釈氏の學ひに深かりければ佛敎傳來の因縁を述て苅谷郷の庄司吉良太夫と云者に
 興へて歳の旦に舞せけり是三河萬歳の初めなり故に三河國より來ると崔下菴の本朝世事談
 又艶道通鑑等に見ゆ三河雀に云院内村作太夫以前淺草御藏にて米十五俵賜る近年は御勘定
 御部屋にて正月十一日萬歳を相勤め御金を拜領すと見へたり

大神樂

当村より出毎歳正月より二月にかゝりて市中に出舞ひ歩行其黨凡五六人神樂堂と唱へて長
 櫃に覆布を懸け其中央に屋形を作り中に獅子頭を納め屋形の前に天照皇太神の一万度の袂
 を実すさて彼櫃を差荷ひ文傍笛を吹き太鼓を敲て市中を縦横す所望の門に至れば彼屋形よ
 り獅子頭を出して打被り左右の手に幣と鈴とを持て舞ふに傍祝言を唱ふて之を囃す世俗呼

て大神樂と云是天照皇太神天の石窟に幽居ます時八十万神天安河辺に會して謀神謀なした
まひて天の細女命手に茅纏の稍を待天の石窟戸の前に立て巧に俳優すなど神代巻に見ゆ又
太平記^{十卷三}持明院殿吉野へ遷幸の条に獅子田樂を召れ日夜に舞歌はせ給ひし事あり又垂実
年浪草に云獅子頭の神事は伊勢國度會郡山田の郷に祭る前七社或は八社中畧八箇所の町々
の氏子籠の如く長き獅子を出し松明をともし舞なり上人傳云人皇百五代 後柏原天皇永正
の頃飢饉にて疫病はやりし頃獅子頭を作り山田上の在家より次第に下の町に追遣りし事あ
り其頭を町々の疫神に祝祭て則産土神と崇む毎年正月中旬社より取出して鼓吹して舞歩行
世云々

因に云新見翁の八十翁昔語に云延宝の頃より七十年前の昔は大神樂とて毎日江戸中俵
徊して歩行有様先規式正しくまつ先へ鼻高き面を被りたる者ひたゞれを着白袴を着け御
幣さげて立其次に十四五歳計の男子を美しく作り瓔珞を被り長縮を着せ白袴を着中啓の
扇子右の手に鈴を持三十番目に麻上下着たる男箱を持四番目に布衣の裝束を着たる男其
次に四つ足付たる大長持蓋をとりてあふのけになし置其次に獅子の頭を直し中に大太鼓
を置き一萬度の御杖真中に立御幣を立て此長持四人か六人にてかづく者ども皆烏帽子白
丁白きく、り袴を着囃子方は左右に付き笛小太鼓大太鼓とひやうし打合せたる時右の瓔
珞被りたる舞子神に舞ふ序破急のひやうし次第して誠にしん／＼として感に堪る計りな
り其中の興に人を笑はしむる爲め大太鼓打鳥帽子を左右に筋違に被り時々ばちを持あげ

なとする是を大きなうけにして見物興に入るにぞありける

大神樂 皆三尺のおぬかヌトト通のさをもて悪魔をはらふ
壽詞歌 太平樂よとあらたまる

同 めでたく、のわかまつさまよ
枝もさかえて葉もしげる

同 このまやかたはめでたいやかた
鶴がおにはにすをかける

路上見獅子舞有感

谷口山 形見金毛心虎狼 紅塵深処日搏遑 深草元政
詩集 動頭揺尾巧為熊 不覺此身百獸王

渡津古驛

古驛の旧地は東海路の中伊奈立場の東宿村小坂井村と云あり右の両村渡津驛の遺跡ならん
此驛は延喜式に載る所當國三驛鳥禰山綱の其一にして千年以前よりありし古驛と見ゆ和名
抄に渡津和津また扶桑略記廿九室飲郡渡津郷云々又小坂井村菟足神社の銅鐘に室飲郡渡津
郷とありさて上古は二見道当郡牛久保に在より此驛に掛リシガス力の渡を經て遠江國楮鼻取に

至りしものならん然るを大概九百年代しがすかの渡絶しより旅人皆二見道より豊川へかゝりて通行せしゆへ此海道往來の旅人絶行しかば終に渡津も衰微せし事大略三百年の間なり爰に仁治三年の紀行を見るに当時渡津の今道小坂井より吉田までと云ふ開けしより当駅再ひ繁昌せしと見ゆそは阿佛尼のいさよひ日記に日はいりはてしなほ物のあやめも分ぬほどにわたうどとかや云ふにとじまりぬ又東鑑五十四建長四年三月宗尊親王關東御下向の条に廿四日昼は渡津夜は橋本又文宝三年の奥書沙弥明空の作鄧曲撰要に宮路の山中なか／＼に問ははるけき東路を渡津かけて見はたせは新今橋の是結と云今更に云々とあり斯れは当時此海道を通行せし餘見ゆ今当村東海路の中に在と云へとも人家減少して上古の十ヶ一ならん憶ふに正長の頃一色刑部少輔時家上杉憲実と争戦して不勝逃れて宝飢郡宮島長山に來て堡障を築く土人一色殿と称し又其館舎の辺を一色村と謂其後亨祿二年牧野氏長山の岸に一城を築き牛久保城と号し一色村をも牛久保に改め毎月六齊日の市を開く夫より彼地繁昌して民衆此に集ふ然して当駅彼地に近きをもて人民大半此地を去りて牛久保に居を移せしものならん

日はいりはてし中畧わたうどとかやいふ所にとじまりぬ廿二日
あかつき夜ぶかくあり明のかけに出て行くいつよりも物がなし

十六夜 住わびて月の都をいでしかどうき身 阿佛尼
はなれぬあり明の月

とぞおもひつゞくるともなる人あり明の目さへ笠きたりと
云を聞て

同 たび人のおなし道にや出つらん 同
笠うちきたるあり明の月

たかしの山もこへつ

○宿のことは前の赤坂駅の処に云へり合せ見るへし

安藤氏墓

二葉松に云安藤弥兵衛墓伊奈村東漸寺近所の野辺に在御代官役なりしとぞ

古屋敷

三河堤に云小坂井凶書の屋敷跡なり此子孫駿州に赴き 大神君に奉仕すとあり

古屋敷

同書に云伊奈熊藏忠次後任備前守伊奈半左工門の先祖なり地理田圃の厚薄善悪を考ふ依之
大神君の御旨に叶ふ今諸國に御黒印を被下皆此備前守の印章也御年譜十卷天正十八年三月十日秀吉至吉田自八日至此日十一日秀吉欲出吉田公臣伊奈熊藏忠次來告秀吉云暫止于此地待雨
晴而行不晚秀吉云吾間軍行川在前而雨降不涉之則後必不能涉之故吾欲涉之汝何止吾哉忠次
云川在前而雨降小軍涉之則可也大軍涉之則兵多溺死乎秀吉大美其言而留于此三日と見へた

リ

火塚

古墳記に云当村に多しとあり

大同山報恩寺

同村に在無縁本寺同郡伊奈村東漸寺開山未だ詳ならず大同年中開基の寺なりとぞゆへに大同を以て山号とす

七番 弘法作

立のほる月をし峯の薬師にもおとらぬ

慈悲の観世音かな

本尊 千手観世音

立像長一尺五寸当国三十三所第六番咏歌に月も日ももらさでてらす報恩寺かげもす、し

き小坂井の水」とあり

鐘樓

本堂の前に在

火穴塚

大石ありしが今はあらず天正年中吉田城中矢倉下の置石に多く用ゆと二葉松に見へたり

和泉式部石塔

境内に在未詳と二葉松に見へたり我友佐野蓬記の筆記に云小野小町は伊勢国土田の浦より舟に乗りて当国小坂井郷に渡れりと云傳ふこれを三河小町と云彼土田里は古へ風残りて小町庭また小町おとりなと今猶残り又小町の墓と云ふもありとぞ渡辺政香本の古墳記には右の石塔小町が休塚とて往昔小町が腰をかけし事跡なりと云々又古今集雜部に文屋のやすみでがみかわのぞうに成てあが左見には取出たしじやといひやれりける返事によめり小町小町、説ぬれば身をうきくさの根をたへてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」と見へ又群書類從三百八十五ノ和歌部に文屋康秀貞觀二年三月任刑部中判事年月任三河橋とあり右等をもて見る時は小町の当國へ來りしと云説もたへて據なきことにもあらずされと斯る歌の贈答は歌人一時の洒落にして強て來りしとも言難くなん殊に歌の意も來りしにあらす

中川勘助墓

同村に在御代官なりしとぞ

怪牛を産す

百練抄八丁十治曆三年七月廿七日三河国進國解續牛繪様相副三頭八足云々晋大興元年有此例又扶桑畧記十一長久四年癸未産兩頭續こは当所にあづからす又同書十三後冷泉天皇治曆三年八月十六日参河国解狀備管守飲郡渡津郷住人土生眞世所領牝牛以去七月廿七日辰一点所産續牛其軀長三尺許毛色赤斑額腫少白有兩牙有二尻二尾七足其四足如例自余三足相添前後足裡後二足有腹際前一足有腹下自膝下相分己生二蹄凡有七足八蹄又一尻有臍下股裡具四其体相副



進上但彼牛領主眞世恐其奇怪不申子細打斃了老者令神祇官陰陽寮占申云自怪所及良坤方非
萎口舌鬪諍事有天下疾疫憂歎祈禱无其咎乎者正三位行權中納言兼治部卿皇右宮權大夫源朝
臣際俊宣奉勅仰五畿七道諸国符到之後擇定吉日奉幣神社轉經佛寺拂兵革於未萌消疾疫於
方來仍須長官以下共致潔齊自詣諸社奉幣禱祠又於國分二寺及定額寺囑請淨行僧侶三箇日間
轉讀仁王般若經薰修間禁斷殺生殊致精誠必顯冥感者諸國承知依宣行之符到奉行者
名物鑑鈍

享保印本東海道濱の砂子にうどん町小坂井の内茶屋有うんどん名物故名とす

観音堂

同村に在疑りくは往昔如意輪寺旧跡にはあらめか伊呂波字類抄に如意輪寺伴寺保胤入道法
名寂心居住三河国入道寂照以寂心為師同住此寺

元々集

如意輪や軒もかすずはる日かけ

其角

古城山竜徳院

禪宗曹洞派本寺同郡夙鄉村万光寺中興開山万光寺九世万輝和尚開基川出氏先祖

石地藏

一尺許

本尊

阿弥陀如来

長五寸許

左十一面観音 六寸許

当院は往昔永祿六年大神君吉田城を攻んため当时に砦を築き賜ふ委しくは下の条合せ見
るへし其後天正年中川出氏当院を創建して古城山龍徳院と号すとん

糟塚砦

二葉松に云糟塚塞と号く今龍徳院の境内なり小笠原新九郎長景是を守る武徳編年集成持
永祿五年六月に神君又吉田の城を窺ひ謀り賜ひ小坂井に砦を築き牛窪の城を壓ん爲に兵を
籠らる又同書六丁永祿六年三月大神君宇飲郡小坂井牛窪に向て砦を築き敵を壓へ且數回岡
崎より御動座有て巡視し賜ひ渥美郡吉田の城將小原肥前守鎮実相謀て小坂井の堤の下に兵
を伏して軍を始む渡辺半藏守綱魁出せんとす蜂屋半之丞貞次曰敵多勢にして其鋒強し暫く
是を避へしと渡辺は吾を欺き貞次一番鎗を欲すと怒り直に進んで鎗を敵兵横に之を突半藏
劊を蒙りて退く勝に乗る時に蜂屋鎗を合せ小林勝之助正次敵を討取る松山久内馬上より火
砲を發し敵の胸に中る本多廣孝先鋒として敵五十許討取ければ敵軍僻易す平岩七之助親吉
兵を率ゐ來り闘ふ敵敗して吉田城に走る中貞源記に小坂井の敵
當胃味方に降ると云々同書七丁永祿七年牧野出羽同八
太夫同民部は未だ今川方たりと雖も成定則岡崎方の色を立牛窪小坂井の両砦に神君の勢を
引入ければ云々同書七丁永祿七年糟塚にも砦を築き小笠原新九郎長景安元を籠置る御年譜も是
に同じ太田白雪云糟塚砦は羽田村と云処小笠原太久保戸田等籠るとあり後人の考をまつ

稻荷社

同村の中菟足社の北に在近頃村中の人に付て社壇を造立せんことを望む故に社祠を立て是

を祭る

稻荷塚

小坂井と篠束の地境に大塚二つ有小坂井の方を稻荷塚と云篠束の方を糟塚と云と二葉松に見ゆ

赤松塚

同村に在五輪五石塔二基善住寺境内にあり由縁未詳かならず

菟足神社

同村に在社領九十五石祭神社説に云又八幡宮を合せ祭る例祭四月十一日宿村小坂井平井下五井横須賀下地以上七ヶ村の産土神なり神主川出氏

当社は延喜式に載る所の宮社也今菟足八幡宮と云社説に云祭神開化天皇の皇孫ウチカミ天武天皇白鳳年中神告によりて八幡宮を合せ祀る草鹿祇官隆云此社に詣て神主川出氏に祭神を問に往古は品多別命を祭りしに白鳳年中神説により平井村より菟上足尼を迎へ奉りて相殿にと云といへり祭りてより菟足八幡宮古事記中開化天皇の祭に云崇神天皇皇子大睨王之子菟上王者比賣陀今

按るに古事記傳セリハ此王を祭れりと云ふこと心得ぬことなりと謂はれたり社説は古事記の菟上王と國造本紀の菟上足尼とを混へて傳へたる致考ふへし又神名式に伊勢國朝倉郡に菟上の神社あり又古事記中に云日子坐王御子丹波比古朝廷別王者三川之祖旧事記五三川國造美已止直とありミコトミカド能く似たれば若くは同人には非る致と古事記傳三に云はれたり國造本紀野國造伯頼朝倉朝以生江臣祖葛城襲津彦命四世孫菟上足尼定賜國造按るに社説

四年五月辛未
足尼爲宿禰

天野信景の塩尻に云三河國宝飲郡菟足神社は國造本紀に菟上足尼云々菟足とは文字を略きて書然ればウソコと称ふへきを今はウタリの神社と呼傳る諸神祠の号其称号を正し其元を知るへき世ウカミの力とタと横音通し又ミトリと通へり谷をタリと訓に似たり然ればウタリはウカミの音便欵三代實錄ハに云清和天皇貞觀六年二月十九日丙子授三河國正六位上菟足神從五位下和漢三文函會六四月十一日祭礼其上旬射取雀十二羽爲祭牲

谷川氏の和訓栞六生贄の条に三河小坂井村の菟足神社の祭にも雀十二羽を献すとあり又吉田綜銘に云祭礼四月十一日なり風の祭と号す雀拾二羽を射取て贄となす往古は小田の橋にて旅人の児女を待受て人身御供と爲せしと云中比は猪鹿を献りしとも云り又人を生ながら捕て生贄と爲せし事今昔物語五宇治拾遺物語十などに見ゆ宇治拾遺のは人の生贄を留めて後猪鹿を生贄になせしとあれば似たることなり又續紀廿五淡路慶帝天平宝字八年の条に云又諸國進御贄雜完魚等類悉停云々宇治拾遺四云三河入道いまた俗にてありける杵もとの妻をば去りつゝ若きかたちよき女に思ひつきてそれを妻にて三河へぬてくたりけるほどに中三河國に風祭と云ことをしけるにいけにへと云ふことに猪をいけながらおろしけるを見てこの國のきなんと思ふ心付てけけ云々又三河雀に云四月十一日毎年風祭あり四月上旬より十日限に雀十二羽を射取雀矢に中りて血流れぬれば氏子に災難ありと云へりなと敬雄の官社考に云へり

○按に御津神社応永廿二乙未八月の棟札にも大檀那當州刺史源朝臣義範とあり同人なり

○当社棟札

應永廿四年丁十一月三日菟足大明神大檀那左京太輔義範代平沙弥玄永衿宜菅原定永大工

平則光
按るに御津神社應永廿二乙未八月の棟札にも大檀那当州刺史源朝臣義範とあり同人な

○天文十二年乙十一月三日菟足大明神願主藤原朝臣兼光願主藤原利政祿宜藤原良政靖徳家
次信頼利清

○元龜元年庚十二月六日菟足大明神願主松平上野守康忠代官小野道正神主宮内大輔良政とあ

り
○当社に家康公の制札あり

禁 制

小坂井

八 幡

一於当社軍勢濫妨狼藉之事

一林木伐採之事

一当宮放火の事

右条々堅令停止訖若於違犯之輩者早速可處罪科者也依而如件

永祿七年甲子五月

松平藏人

家 康 御判

神 鐘

とありこは吉田城攻の時拜殿に於て神主と碁を打賜ひし時古き縁板を切て自筆にて記し賜へる由云傳へたり

外に松平甚太郎石川伯耆守酒井与三郎の制札もあり

元和三年二月二日の社△の朱印章に八幡神主とのへとあり

本社の前に在長龍頭まで

徑

三河雀に云今橋の竜神此宮の釣鐘を

奪ひ取んとて時々雲を起し風砂をまきて目を驚すことあり吉田線録に云聖見阿陀佛は平井村善福寺の開山にて此社に寄進せしと見ゆ俗説に竜宮より上りしと云へと銘ありて分明なれば論するに不及按るに乱世に埋みしを其後掘出せし者なるへし今一鐘田圃の中に埋りてありと里談ありて其所は不浄を拂ひしめなは引渡しあり本社より百歩許

銘 文

参河国宝飲郡

渡津郷

兎足大明神

洪鐘

右爲志者天長地久仰願

四満国土安穩諸人快樂所奉禱也

応安三年庚戌十一月日

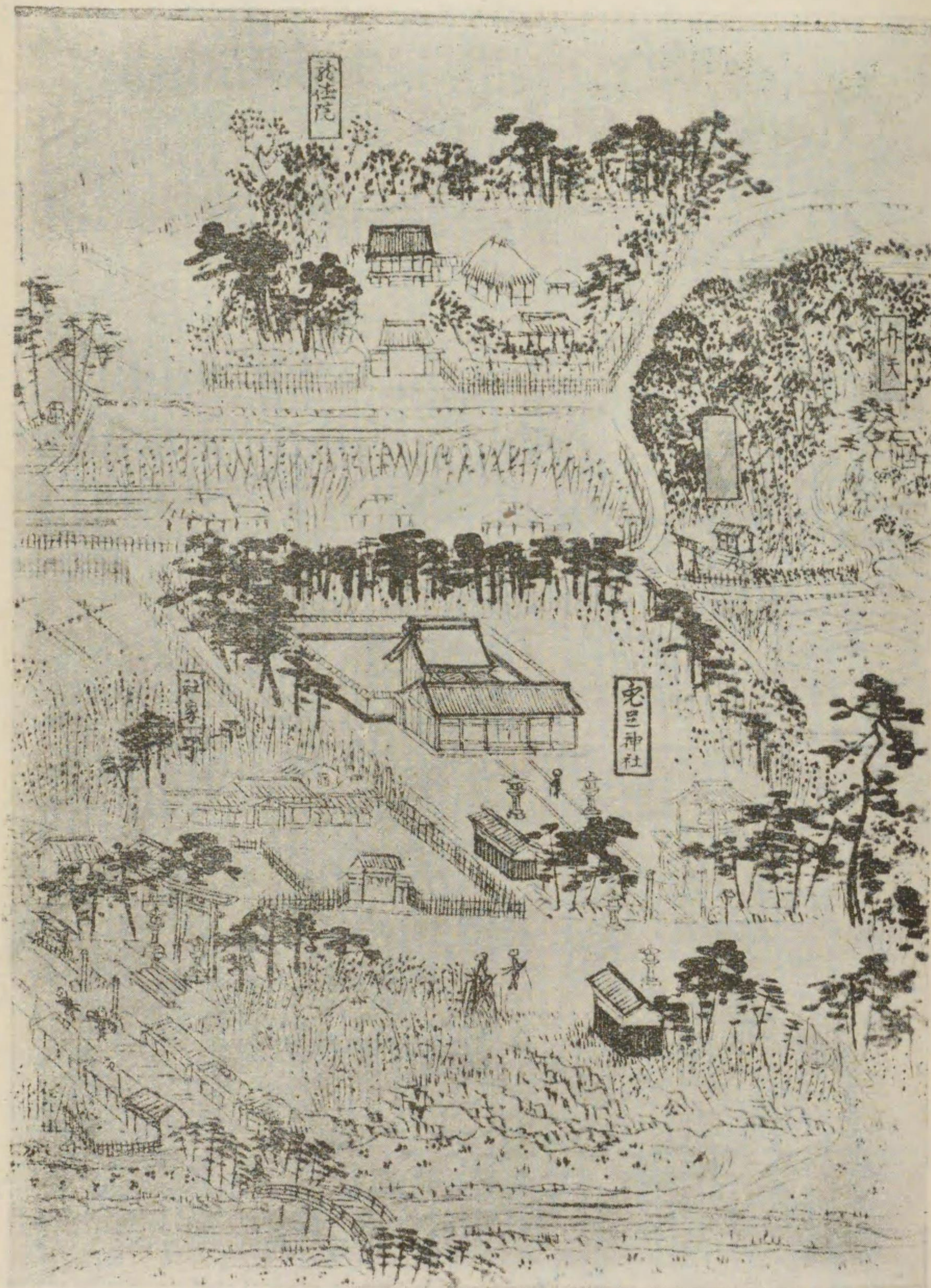
大工藤原助久

勸進聖見阿弥陀佛

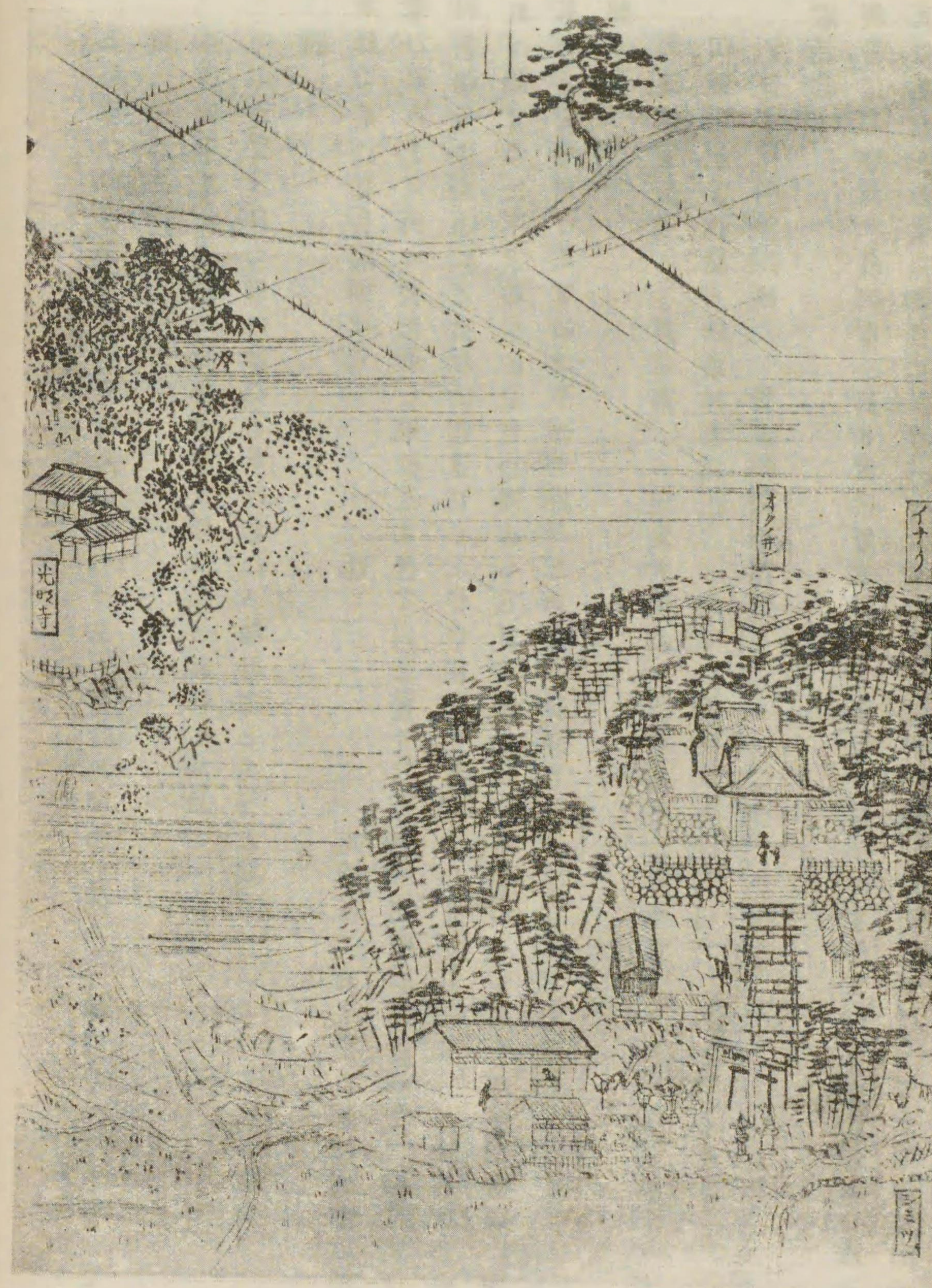
檀那朝阿弥陀佛

大般若經

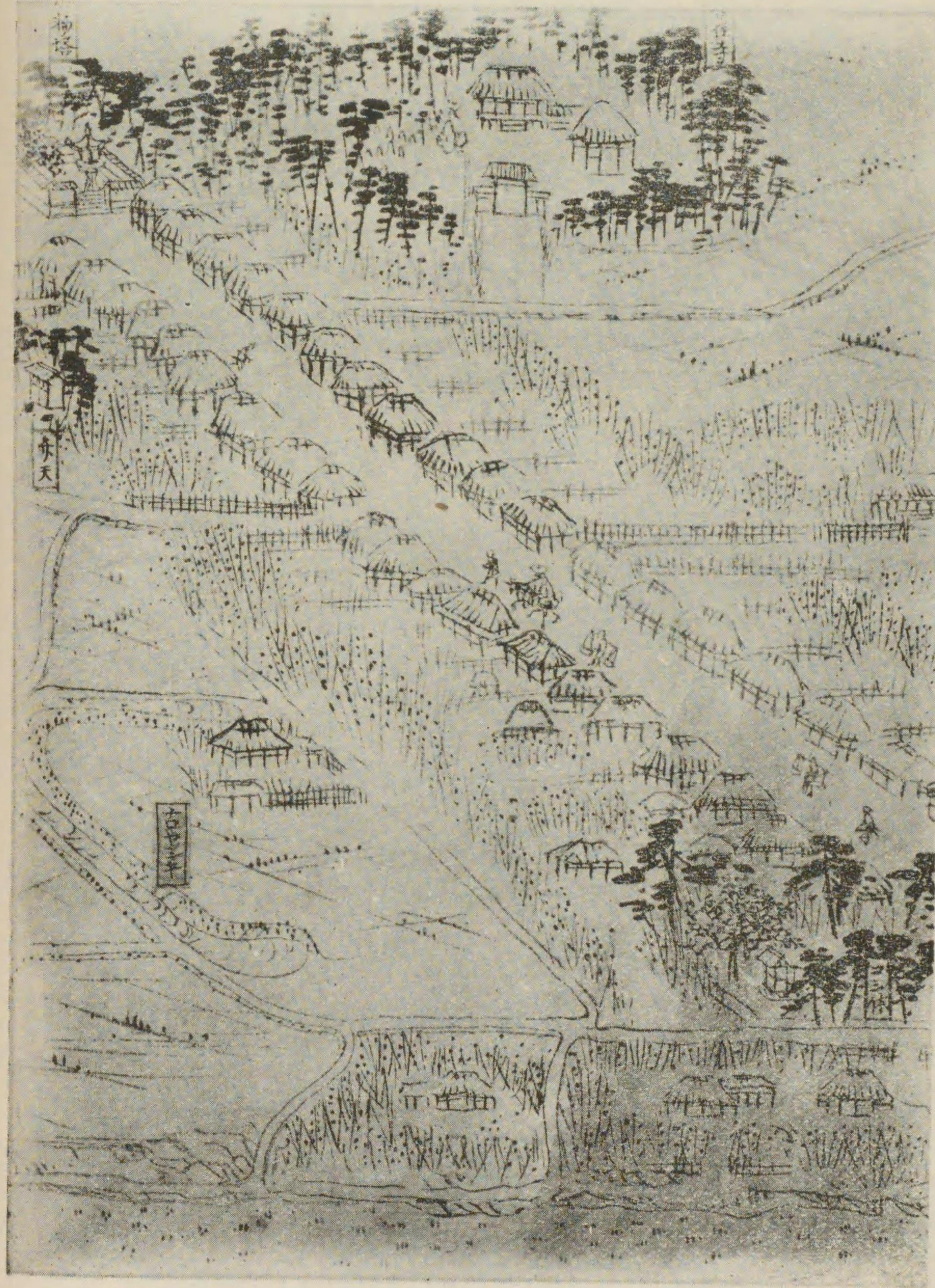
與書に云安元二歳丙申二月廿六日筆立願主大法師覺慶 願主藤原朝臣宗成とあり按るに安元は高倉院天皇の御世にて今より六百七十余年の昔なり吉田線録に云安元治承の頃鐘西肥



(167)



(166)



後国にて書写すと興書に見へたり世に是を武藏坊弁慶の書写なりと雖も其証なし毎歳正月
財賀寺より來りて是を讀誦す

石鳥居

元禄四年辛未九月吉田の城主小笠原長重肅具と銘あり

辨慶松

境内に在辨慶手植の松なりと云ふされと未だ其詳なるを知らず

今八幡と申鳥居の程にて

覽富士記

君まもる契しあれば今やはた

堯孝 法師

いましでこゝに跡やたれけん

右の歌前に関口の歌後に今橋歌ありこゝならん又おもふ
に八幡村八幡宮は往昔今の處より西の方に鎮座ませしと
ぞ蓋當時今の処へ遷座まして今八幡とは云はずや考ふべ
し

いつくの程にて侍りしやらん社櫃あり人に問ひ侍れば八
幡宮と申鳥井の前にて今度の御旅のめでたさ御神慮も殊

に掲焉におほへ侍りて

富士紀行

いはし水君が旅行するも猶まもらん

贈大納言雅世卿

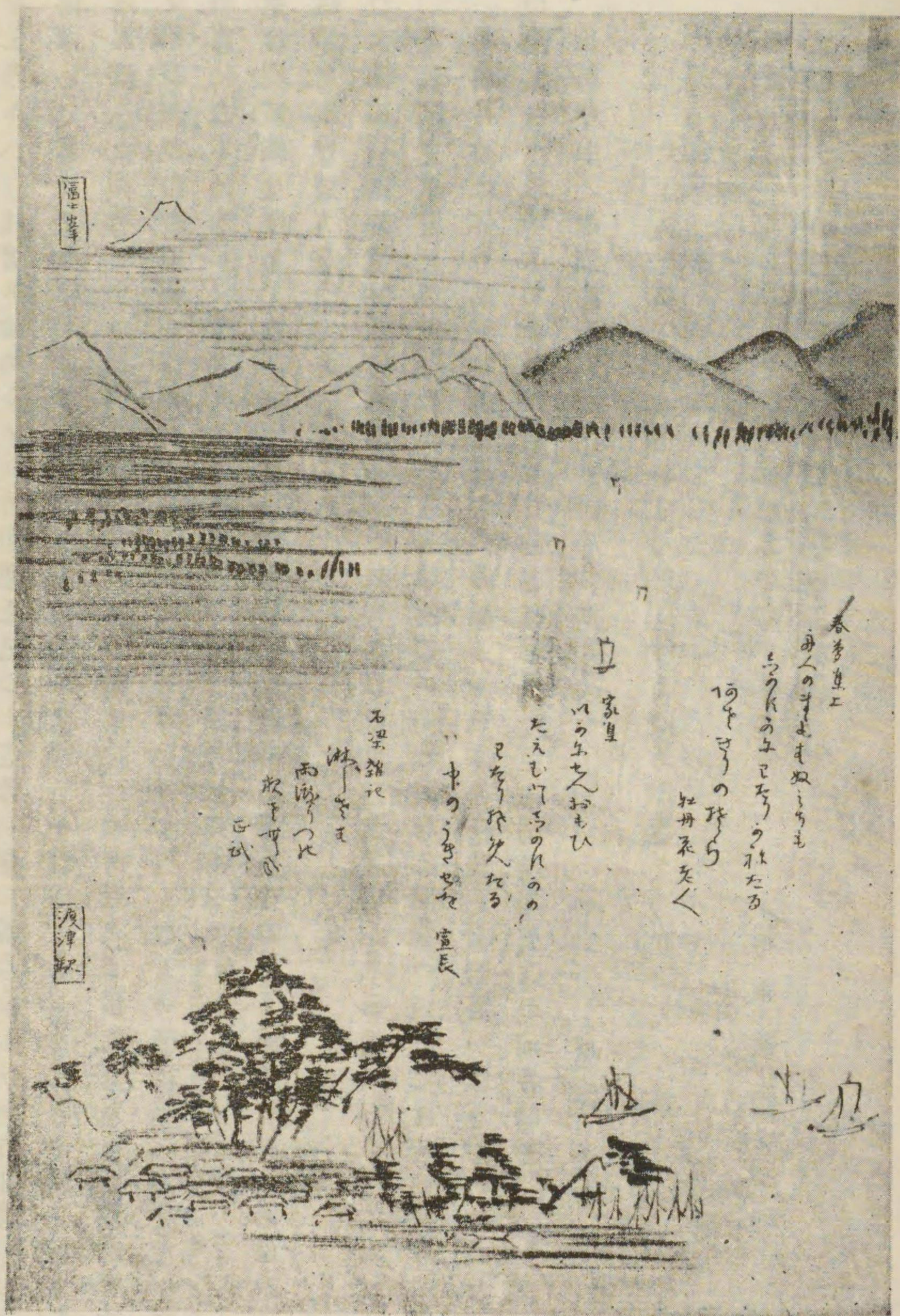
とてや跡をたれけん

志之須香渡

八雲御抄十五ノ三しがすかの渡河三藻塩草十五ノ五志賀須香渡河三更科日記に三河と尾張となるしがす
かのわたリ云々又秋の寢覚河三等当國とせリ三河藻塩草に云豊川里の旧跡は字御世笹と云処
あり往昔しがすかの渡場の岸なりとぞ今猶存せリ其所より船に乗て今橋の里吉田ノへ渡リし
よし口碑あり是豊川の地脈にて三明寺の西南に当れリ又二葉松に云然菅渡此處詳ならず矢
作川上と云ふ説もあれと考見るに宮路山詠合せとなれば宮路山近き豊川の末流なるべしと
又或説に云今小坂井の辺を度津郷と云へリ遠江國浜名橋辺を橋本と謂ふ如くしがすかの渡
ある故に渡津と呼しにやと云へリまた貝原翁吾妻路記に云豊川里は此川に添て一里半北に
有しがすかの渡津は此川下一里半南の方にあり今さだかに知る人なし太田白雪云寛永六年
大猷院殿御上洛の時矢矧駅にて拳母の城主某を召てしがすかの渡を御尋ありければ彼家に
古記ありて奉りぬ後傳へ聞に矢作川上に渡合渡と云処あり当所となん又三川記に神君いま
た元康公と申し、頃御初陣に鹿が渡と云処を越給ふこれをしがすかと云など見ゆ亦三河雀
に云大門村しがすか渡此辺にあり中比鹿の渡を人に教ゆるによりて鹿の渡と云ふ又剛補松

に是は鹿の渡とて然管とは別なり吉田川向地旧下地村森の内に志賀天王と云あり同地藏堂
もあり是志賀寺の旧跡にて渡船の着し所なりと云へり和漢三才圖會六十一に鹿須加渡在大門
村近所舟渡と見へ又一説碧海郡渡村を云ふなど種々あれども何れも寄所あらずなん又当所
の口碑に云しがすかの渡は渡津庄小坂井村より吉田駅関屋と云処へ渡船せしとも其間凡又
小坂井光明寺近より志賀管庄并呂村坂津寺の辺へ舟渡其間凡又とも云へり彼坂津寺藪中に古の
渡場跡なりとて石垣の跡聊か残りりと云り又同村産土神八幡の古額に志賀管神社と書るが
有しに今は朽果て其跡だにあらざと神主森田光茂云りと敬雄の古歌名跡考に云り可敬情考
るに志之須香渡は当国に名高き名所なるゆへ先輩の説前条の如く種々あれといまだ夫れと
指定めたる所あらずまづ其渡はいづれの比に渡りしものと其証歌を尋るに千年以前より
宮道山志之須香渡は名所なること著し紙増基の遠江紀行に宮道山の藤花を詠し次に國府に
とまる云々有て志之須香の渡守を詠す紙増基は後撰集冬又後拾遺集依に歌ありて村上天皇の頃の人なりと石
塚竜磨云へり袋草紙には永延以後の人なりと云り考ふべし
かゝれば志之須香の歌万葉集中にあらんと尋るに卷七に
荒磯超浪者恐然爲蟹海之王藻之嶋者不有半とあり渡りとはとはあらされと集中には櫻とも
花とも云はで高槻の村散にけるかも又遠きこぬれの咲ぬる見はなとあれは蓋彼歌さすがに
といふ辞に志之須香を兼詠せしにはあらぬか考ふべし又憶ふに荒磯超といふに渡りの意こ
もれり又夫木抄六に源朝臣順の歌永観元年一条大相国家障子繪歌へ行がよふ舟路はあれど
しがすかのわたりはあともなくぞありける此歌を以て年歴を察すべし彼朝臣は後撰集を撰

ばれし梨壺五人の内也永観元年より凡八百六十余年其比渡りの絶しこと歌詞に明なりさて
増基法師の時代は有し渡の永観元年の頃絶しを思へは纔に其中間四十年許の内に絶しと見
ゆ是等を以て此渡り八百六十余年先に絶しことを悟るべし又清少納言の枕草紙にわたりは
しかすかとあり玄旨法印の説に彼女房は一条天皇の向皇宮の女房と云々 一条天皇寛和元
年より是又八百六十余年其頃渡りは絶し也其後 四条天皇の御代仁治三年の紀行に渡津の
今道小坂井辺より吉田
までを云ふかにかゝりて旅人通行する由謂り仁治三年より六百余年を歴したり永観元年
より仁治三年まで其中間三百六十余年の間其辺いまだ泥土乾かず志之須香渡絶てより凡三百六十余年
の間は諸人通行ならずと見へたり然
もある通行なし難きにや旅人皆豊川駅へかゝりて和田赤岩などを経舟形山豊谷山を越遠江國橋
本取へ出しなり其は雜の部海道変革の条又当郡二見道の処照し觀べしさて其渡の処を考る
に篠束村辺より小坂井の辺ならん夫より志之須香庄并呂村坂津が又羽田村御茶屋坂の辺へ
着しならん風土記に波多湊
とあるもこなり 土人の口碑又是に同し然して其証を尋るに再び云紙増基宮道山國
府志之須香渡各詠あり其序次も然なりかゝれば此小坂井辺ならん一つの証なり又当村免足
社鐘銘に度津郷志安三年云々見へたり是も亦一の証なり且当村より東吉田駅又牛川村辺南
は羽田并呂村の辺北は豊川辺かけて入海なりしこと論なし是も一の証とす枕草紙にわたり
はしがすかと云如きは尋常の渡りにあらず当村の渡は海上凡一里許渡りはしがすかとも云
ふべき姿になん是又一の証ならんさて志之須香の名義を考るに志之須香は頓てシノヅカの
渡と云意ならん今桑名の渡また新居の渡なと云ひて其渡りに近き地名を以即渡の名に呼な



家が 集 しがすかのわたり雪ふり侍る舟にのりて侍る
雪によりかへりやせまししかすかの
能宣朝臣

夫木雜八 古郷わたりもなき契とそおもふこひしいさ渡りなん夫木
いつかたによりてわたらんしがすかの
同

同 たむけの神にまづやつげまし
うれしきはけふしかすかのわたりにて
読人不知

同 みよこいでたる人にあひける
あひみつゝ猶おほつかなみやち山
同

同 とやしがすかのわたりなるらん
祐子内親王家草鬮歌合
同

夫木雜八 わたし舟ゆたのこゆたにしがすかは
たび人わたすわたりなりけり
同

夫木雜八 しがすかのとほきわたりにおなじくは
なとやつはしをわたさゞりけんるらん
読人不知
為忠朝臣三河国名所歌合
久安御百首畷 忍ふべきみやのならねどしがすかの
待賢門院堀河
わたりもやらすあはれなるかな

拾遺愚草 秋風に鳴音をたつるしがすかの
前中納言定家卿

内裏名所 四 百 首 これも又稀なる中はしかすかの
従二位家隆卿

建保百首 わたりさへこそうつくひにけれ
あひみてもあわでもなげくしがすかの
前丹後守知家波

内裏名所 百 首 うしとてもわすれんことはしがすかの
兵衛内侍

内裏名所 御 四 百 首 わたりときくにそでぬれける
みし人の影はかりこそしがすかの
後成郷女

建保百首 わたりたへにしむかしなりけり
うきながら猶たのむかなししかすかの
権中納言忠定卿

家 集 たのまれぬ人の心をしがすかのひ
思ひわたりてとしのへぬらん
従三位家衡卿

建保百首 うしとてもなほしかすかのわたしもり
しるへの波のゆくへをしへよ
僧正行意

内裏名所
御四百首

かくしつゝくれぬる秋はしがすかの
わたりもあさき契とぞおもふ

順徳院天皇

建保名所
百首

立かへり心づからやしがすかの
わたりもあへぬなみにぬるらん

再後守範宗

同

忘れなんうらみしとてもしがすかの
わたりにしはし身をぞやすらふ

散位行能卿

同

むすびおく契りはいかにしがすかの
わたりも遠き中のへだてぞ

藤原朝臣康光

流後捨遺恋

あふせこそまとをなりともしがすかの
わたりなれにし中なわすれぞ

二品法親王慈道

自歌合

思ひしづむふちはありともしがすかの
わたりしせをばわすれやはする

豊原統秋

家集

ほどもなき舟のうへにもしがすかの
わたりくるしき河風ぞふく

牡丹花老人

春夢集

うき身などあやなき恋をしがすかの
わたりもやらす袖ぬらすらん

同

春夢集

舟人の迷はぬ道もしがすかに
わたりかねたる朝ぎりのさら

牡丹花老人

三國和歌
集恋

恋しなんそれもおもへはしがすかの
わたり川にもしらぬあふせを

雪玉集

哀とはおもふものからしがすかの
わたりわ飛つゝかよふ舟人

逍遙院実隆公

大神宮
御法集

都いでて幾日かたびをしがすかの
とほきわたりにかくぞきにける

三位公晴卿

享保千首
恋

あだ波のたつにやよべもしがすかの
わたりかねてはなむ舟人

従一位実陰公

遠江紀行

しかすがのわたりにてわたしモリのいみじうぬれたるに
たび人のとしも見へねどしがすかの
みなれてみゆるわたし守かな

紙増基

渡津の今道

渡津の今道といふは小坂井村の辺より吉田駅までの道を云ひしならん其は前なる渡津古駅
の糸合せ見るへし当時は吉田駅も新今橋と云ひし由彼糸を披き見へしさて渡津の今道と云

ふこと仁治三年の紀行に豊川と云宿の前をうち過るに或者の云を聞は此道を昔よりよくる
方なかりし程に近比より俄にわたふ津の今道と云方に旅人多くかゝる間今は其宿は人の家
居をさへ外にのみうつすなとそいふなる旧きをすてゝあたらしきにいくならひさだまれる
事といひながらいかなるゆへとおほつかなし云々見へたりさて海道の変革は雑部また二見
道の処にも挙つれど猶又茲に大概を云べし往昔千年以前より九百年代までの街道は当郡牛
久保の地脈金谷村の辺に二見道の旧跡あり世に二女塚又二見塚とも謂其処より道を右に折
て渡津の駅に出て志之須香の渡を経高師山にかゝり遠江国猪鼻駅に至りて濱松に着又一
道は二見道より直に豊川にかゝり遠江国板築^{今ノ三}駅を経て濱松に着又其後九百年代に至りて
は志之須香渡漸く埋りて船楫の便利を失ひしより渡津駅は次第に衰微せしゆへ終に海道一
変して旅人皆二見道より豊川にかゝり遠江国橋本^{今新居の辺の橋本村なりん}駅に出濱松に至りしと見ゆさて
九百年代より仁治年中まで其中間三百余年は皆豊川にかゝりて通行せし故昔より此道はよ
くる方なかりしをなど云へる文章あり然に当時わたむつの今道^{小坂井より吉田まで}開けしかば旅人多く
此道に掛りて通行せし故又豊川に掛る通行日を経るに隨て往來寂莫たれば更に一変して又
豊川駅衰微に及びぬされど此道も元來蒼海変して桑田となりし街道なれば常に湿氣の絶る
ことなく加之数ヶ所に流水亦池沼ありて最不便の往還なりけん其は推して悟るべきこと
なん

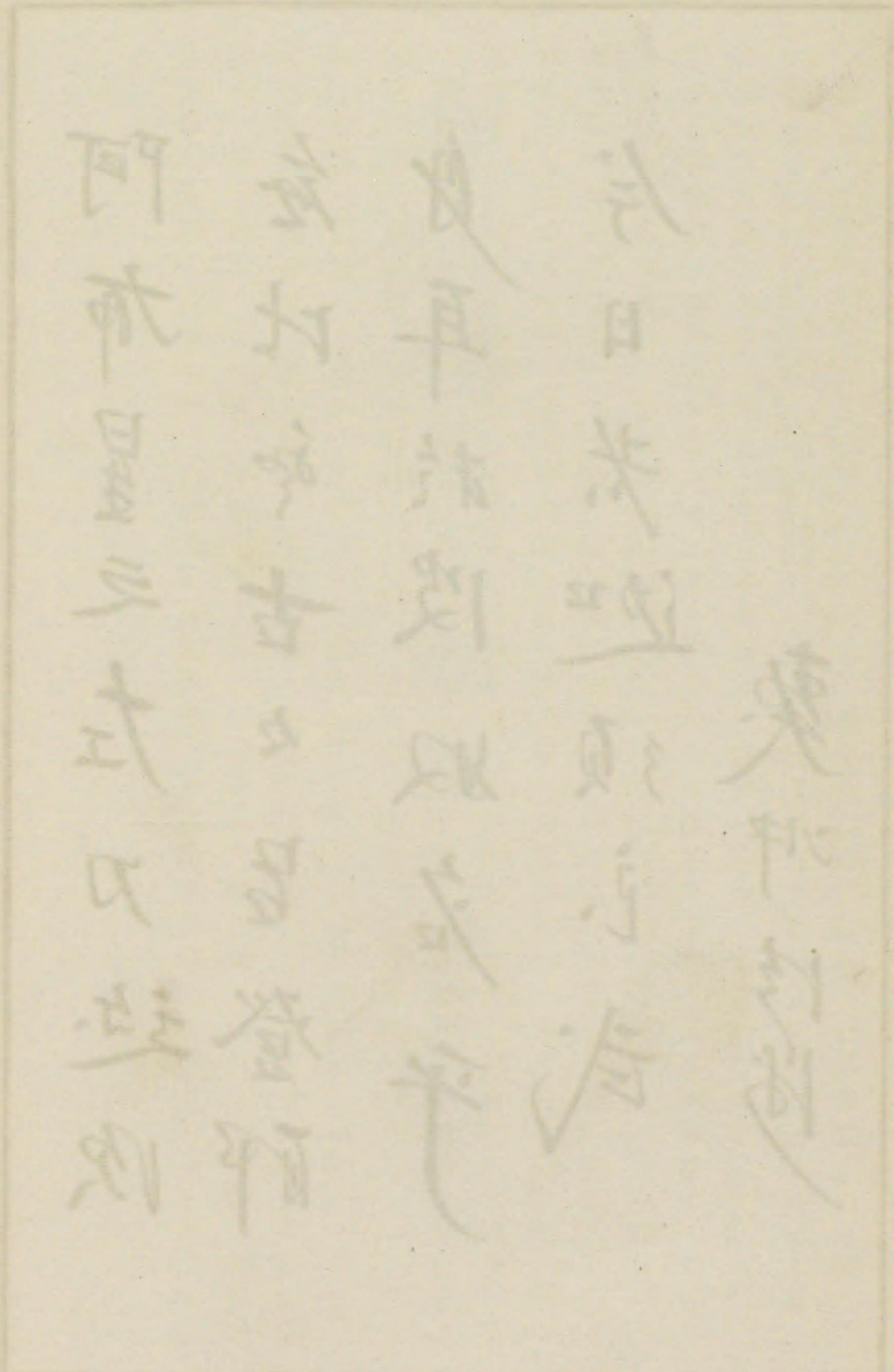
參河國名所圖繪

寶飮郡之部

參同圖名世圖

寶藏錄

阿布星之左刀迹次
每比和古々呂登郛
身耳於波奴名乎
今日若迦須良武
契冲法涉



目録

篠束郷 篠塚 篠束明神 古屋敷 西郷氏墓 糟塚 牛久保 市 牛頭天王社 金色
 清水 御代繩手 長谷寺 牛頭山大聖寺 一色刑部少輔五輪 今川義元位牌 波田野
 金慶墓 一色城趾 岸古屋敷 牛久保城 神原魁出之図 産女塚 金山神社 榎の葉
 師 經塚 若宮 上善寺 正圓寺 光輝菴 牧野定成墳 山本勘助故居 同図 二見道
 同図 金山権現社 古屋敷 真木越中守墓 又次郎墓 墓夫井 同図 熊野権現社 鰐口御手洗洪鐘 辨財天女
 東勝寺 龍野新宮 光明寺 天王社 隣松寺 法信寺 淨福寺 養樹寺 了圓寺 庚申寺
 善光菴 竹村半兵衛智略 春光塚 加藤氏墓 今日坊墓 鯉塚 平井村 古屋敷 東
 林寺 免足神社旧地 菱木野天神 富士見茶屋 柳橋 経塚 塚 山王権現社 役行者一葉松
 満光寺 本多信重墓 下地村 山伏塚 稻荷社 機杼具池故事 同図 城趾 牛頭天
 王社 秋葉権現小社 聖眼寺 親鸞上人像 開山行門上人像 鐘樓 聖徳太子堂 御納涼所の跡 御風宮屋の跡 在天天社 祐泉坊 兼光坊 銅鐘 芭蕉塚 今橋旧地
 下地合戦の図 牛頭天王社 大日堂 矢居所 水神社 兼兼 三本松牧野塚 牧野氏
 兄弟討死之図 若宮八幡宮 白山権現社 八幡村 鷺坂 西明寺 同図 最明寺時頼墓 大江定基墓
 水野氏墓 五輪石塔三基 光明権現堂 秋葉権現堂 船山 定基朝臣の傳 定基朝臣船山遊宴の図
 弁財天祠 宝篋印塔 鐘樓 愛深明王 芭蕉塚 同図 同図 五輪石塔 供女塚
 八幡宮 八幡祠二座 天満天神祠 一品社 射場 石燈籠 八足門 神鏡 弁女祠 石鳥居 同図 同図 五輪石塔 供女塚